

## Ⅱ. 評定尺度調査の分析結果

### 【評定尺度調査の分析にあたって】

今回用いた評定尺度は、「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」による4段階評価である。本報告書においては、データの理解や分析のしやすさを考慮し、便宜的に4段階のカテゴリーに4～1の点数を振り、その平均値を算出することによって、データの代表値とした。ただし評定尺度の各カテゴリーに振られた「数字」を「数値」として加減乗除の演算をすることは、厳密に言えば統計処理として適切でない。3が2よりもあてはまる程度が大きいことは言えても、4と3の間と3と2の間が等距離（つまり1の間隔）だという保証はどこにもないからである。しかし4つのカテゴリーごとの相対度数（パーセント）から何らかの傾向を掴み取ることは容易ではないため、平均値を回答の傾向を推察する目安の1つとして用いたい。

また、ここでの平均値は何らかの単位を持つものではないので、データ同士の相対比較でのみ、その傾向を読み取ることになる。仮にある項目の平均値が、他の項目より低かったとしても、大部分の回答者がその項目に対して肯定的な評価をしていれば、その項目の評価は低いと簡単に断言できるものではないからである。つまり絶対的な評価が把握しにくいと言える。そこで、「あてはまる」もしくは「ややあてはまる」と回答した対象者の割合を同時に提示した。これによって、その評価項目に対し肯定的評価をしている学生がいかほどの割合で存在するかを推測する目安とする。

さらに回答者の属性ごとの回答者数を提示する。本来ならば、グラフ等のデータごとに回答者数を示すべきであるが、データの構造上、全てのデータに回答者数を掲載すると極めて煩雑になるため、ここに一括して掲載することにした（次頁表2-1）。以下、本章においては、常に次頁の回答者数に基づいてデータを見る必要がある。特に回答者数の少ない層ほど誤差が大きくなる傾向で、注意が必要である。

たとえば、大学院では職業別の「家事専業」（11人）、「他大学等の学生」（2人）、「（農業等）」は0人）年齢階層別の「20～29歳」（11人）、プログラム別の「自然環境科学」（17人）が挙げられる。

いずれも参考値としてグラフに記載しているが、極端な値の時は、コメントを割愛する場合がある。

表 2 - 1 回答者数一覧

【学部】

全体	4550	(単位:人)	
メディア		年齢階層	
テレビ科目(TV)	2,783	19歳以下	62
ラジオ科目(R)	1,767	20～29歳	304
職業		30～39歳	523
公務員等	343	40～49歳	985
教員	346	50～59歳	1225
会社員	963	60～69歳	979
個人営業・自営業	292	70歳以上	472
農業等	20	コース	
看護師等	400	一般科目	604
家事専業	239	外国語	48
パート・アルバイト	653	生活と福祉	970
他大学等の学生	37	心理と教育	780
無職	960	社会と産業	505
その他	297	人間と文化	949
		情報	307
		自然と環境	333
		夏季集中科目(看護)	54

【大学院】

全体	350	(単位:人)	
メディア		年齢階層	
テレビ科目(TV)	-	20～29歳	11
ラジオ科目(R)	350	30～39歳	50
職業		40～49歳	79
公務員等	40	50～59歳	101
教員	55	60～69歳	89
会社員	73	70歳以上	20
個人営業・自営業	30	プログラム	
農業等	0	生活健康科学	68
看護師等	25	人間発達科学	45
家事専業	11	臨床心理学	159
パート・アルバイト	33	人文学	31
他大学等の学生	2	情報学	30
無職	48	自然環境科学	17
その他	33		

## Ⅱ-1. 学部の分析結果

### Ⅱ-1-1. 項目平均から見た全体的傾向

ここからは、A-1～B-20 の評価項目（13 頁の提供資料サンプルを参照）ごとに、平均値と肯定的評価のグラフを基に、そのデータから目立つ点や、特徴的傾向を記述していくことにする。

平均値は、評価項目の選択肢である「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」に対して順に 4 点、3 点、2 点、1 点の得点を与え、その得点合計を回答者数で割った値である。全員が「あてはまる」とした場合、平均値は 4.00 で最も高くなり、全員が「あてはまらない」とすると最低の 1.00 となる。

また、肯定的評価は文字通り「あてはまる」と「ややあてはまる」の比率の合計である。

平均値より肯定的な評価の方が（例えば回答者の 80%と）イメージしやすく、平均値と肯定的評価に齟齬が出た場合、どちらを採るか合理的な判断ができないので、記述については肯定的評価を用いて、平均値は参考値として扱っていきたい。

また、過去 2 年間との年度間の比較（22 頁、24 頁等）の箇所は、比率の差の検定結果から、回答者数(2136 人～4550 人)が多いため、各比率の差が概ね 2 ポイントで有意となり、2 ポイント以上で差があることとした。

テレビ科目とラジオ科目のメディア間の比較では、同検定結果から概ね 3 ポイントで有意差が見られるため、3 ポイント以上で差があることとした。

図 2-1 の肯定的評価では各項目とも 87%前後と 8 割後半で、特に『全体評価』は 89%と最も高い評価を得ていた。

『授業評価に関わる項目平均』と『全項目平均 (A-1～B-20)』はそれぞれ 87%と同率の評価であった。

図 2-1 【学部】項目平均による全体的傾向

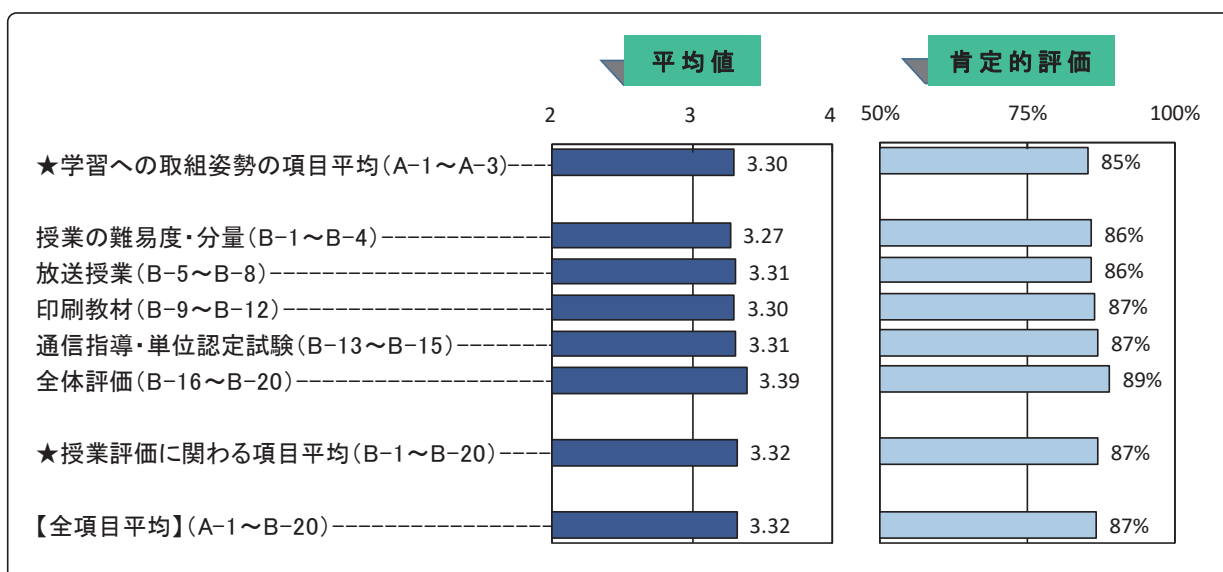
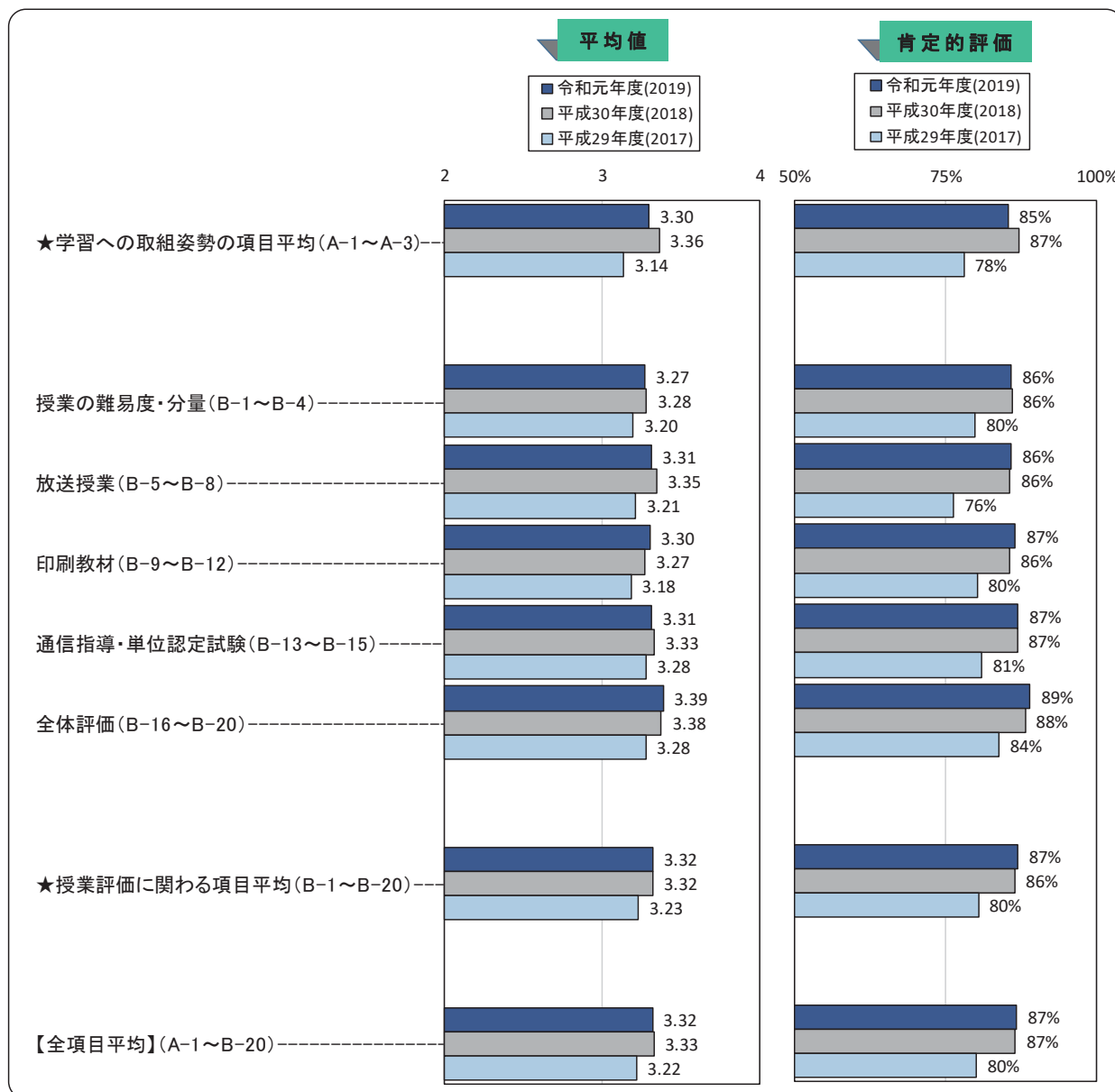


図2-2の項目平均による全体的傾向では、本年度と過去2年度を比較すると、本年度は、『学習への取組み姿勢』(85%)が昨年度よりわずかに下回ったが、授業評価項目では『全体評価』までの5項目で、一昨年度からの上昇を昨年度と変わらず維持していた。

『授業評価に関わる項目平均』と『全項目平均』でも一昨年度からの上昇を維持している。

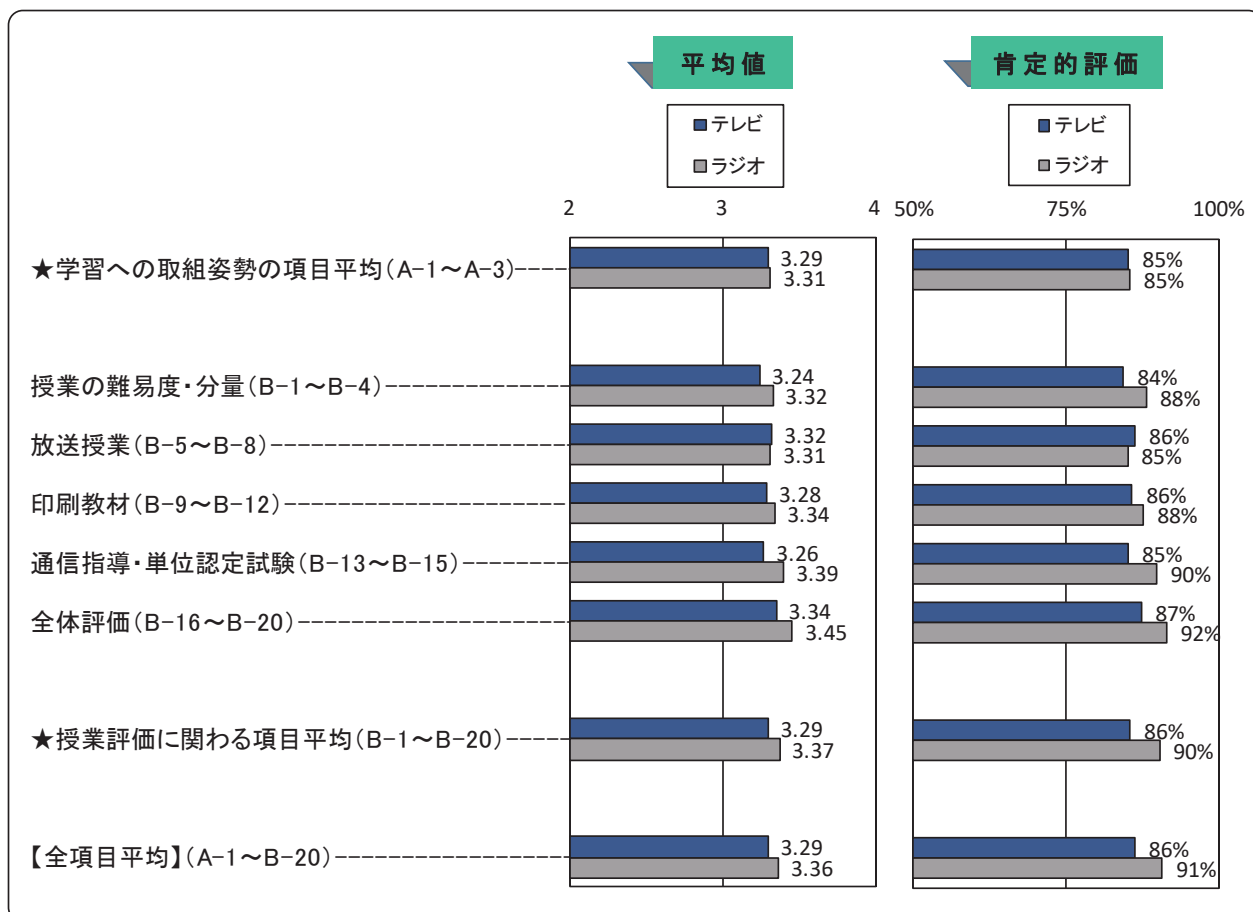
図2-2 【学部】項目平均による全体的傾向（開設年度比較）



メディア別では(図2-3)、テレビ科目(n=2783)とラジオ科目(n=1767)のメディア間で『学習への取組み姿勢』は各メディア受講生の評価は85%と変わらなかった。

授業評価項目の『放送授業』、『印刷教材』については、共に86%前後と変わらなかったが、残る5項目では4~5ポイントの差で、ラジオ科目受講生の評価が高かった。

図2-3 【学部】項目平均によるメディア別全体的傾向

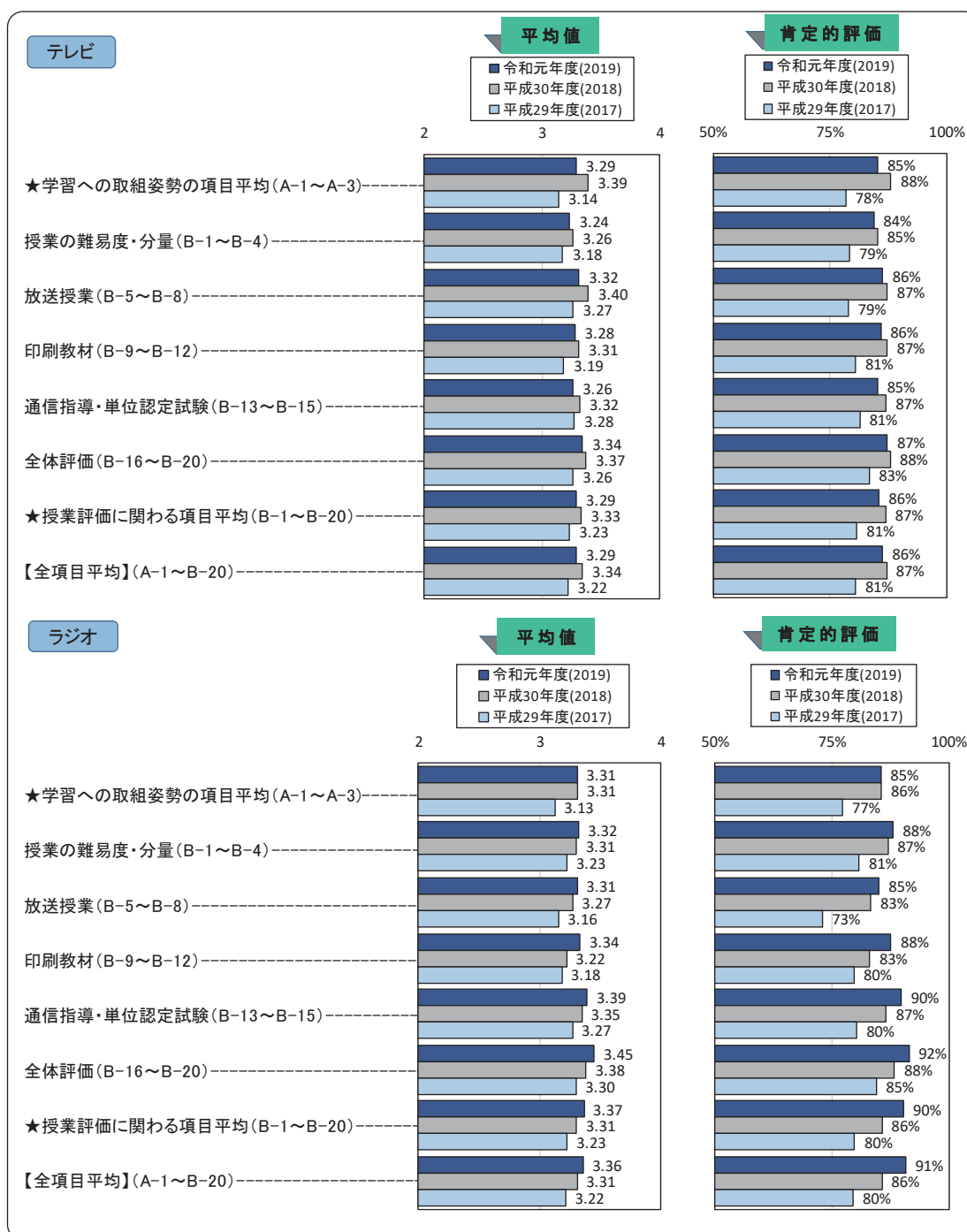


次にメディア別の項目平均を時系列で比較して見ると（図2-4）、テレビ科目において、本年度は、昨年度から『学習への取組み姿勢』で3ポイント下回ったが、それ以外の授業評価項目では同水準の評価を維持していた。

ラジオ科目では、『学習への取組み姿勢』から3項目までは、昨年度と変わらず、一昨年度を大幅に上回っていた。

それ以降の5項目では本年度は、昨年度から3～5ポイントの上昇が見られ、その5項目で90%前後の評価を得ていた。

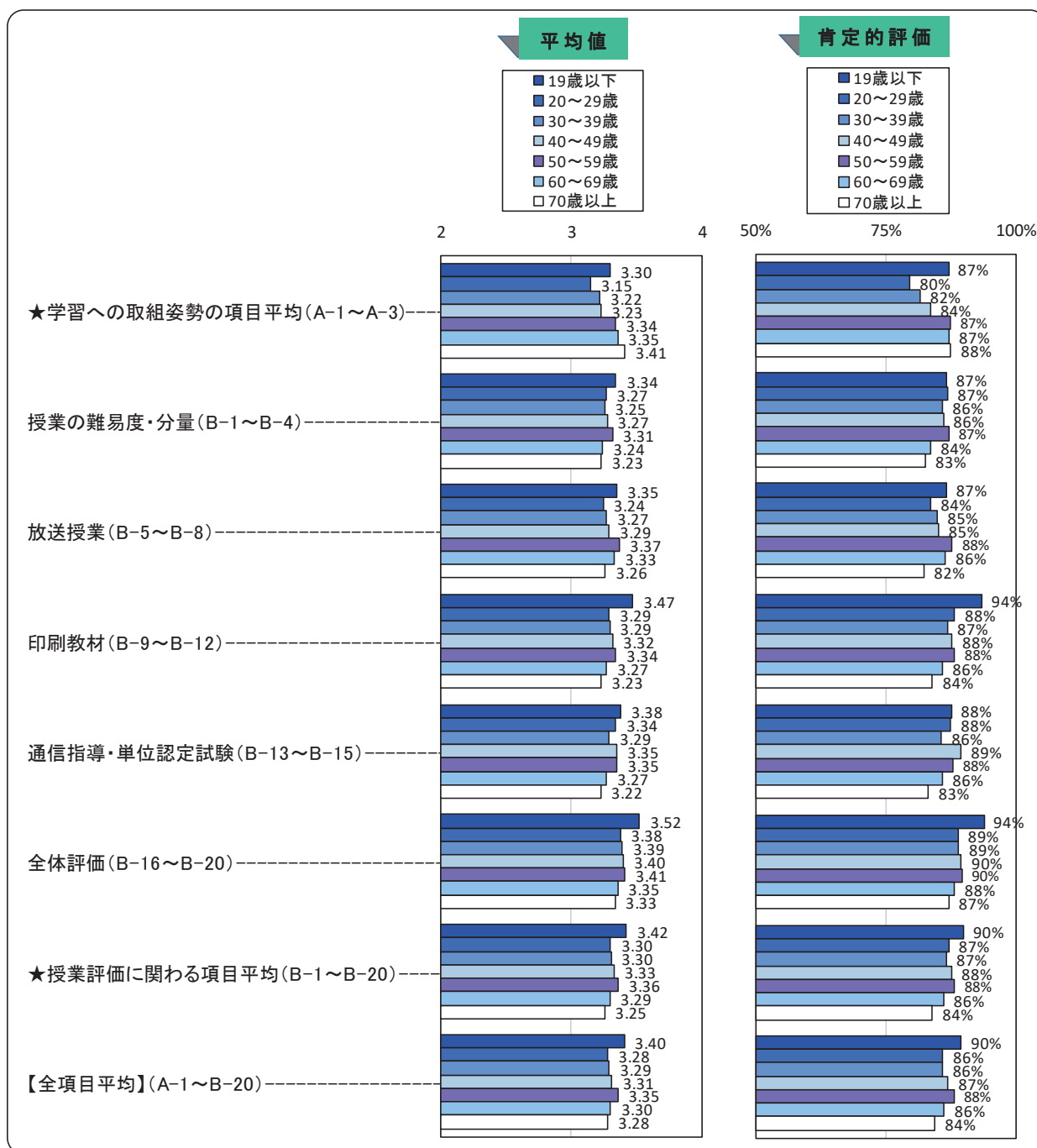
図2-4 【学部】項目平均によるメディア別全体的傾向（開設年度比較）



回答者の年齢階層別（図2-5）では、19歳以下は『学習への取組み姿勢』を含め、いずれの項目でも高い水準で、特に『印刷教材』と『全体評価』は共に94%と高く、『授業評価に関わる項目平均』は他の年代を抑え唯一90%に達していた。

反対に70歳以上は、『学習への取組み姿勢』（88%）は最も高かったが、授業評価の項目についてはいずれも最も低く、特に『通信指導・単位認定試験』は83%と他の年代より3～6ポイント下回っていた。

図2-5 【学部】項目平均による年齢階層別全体的傾向



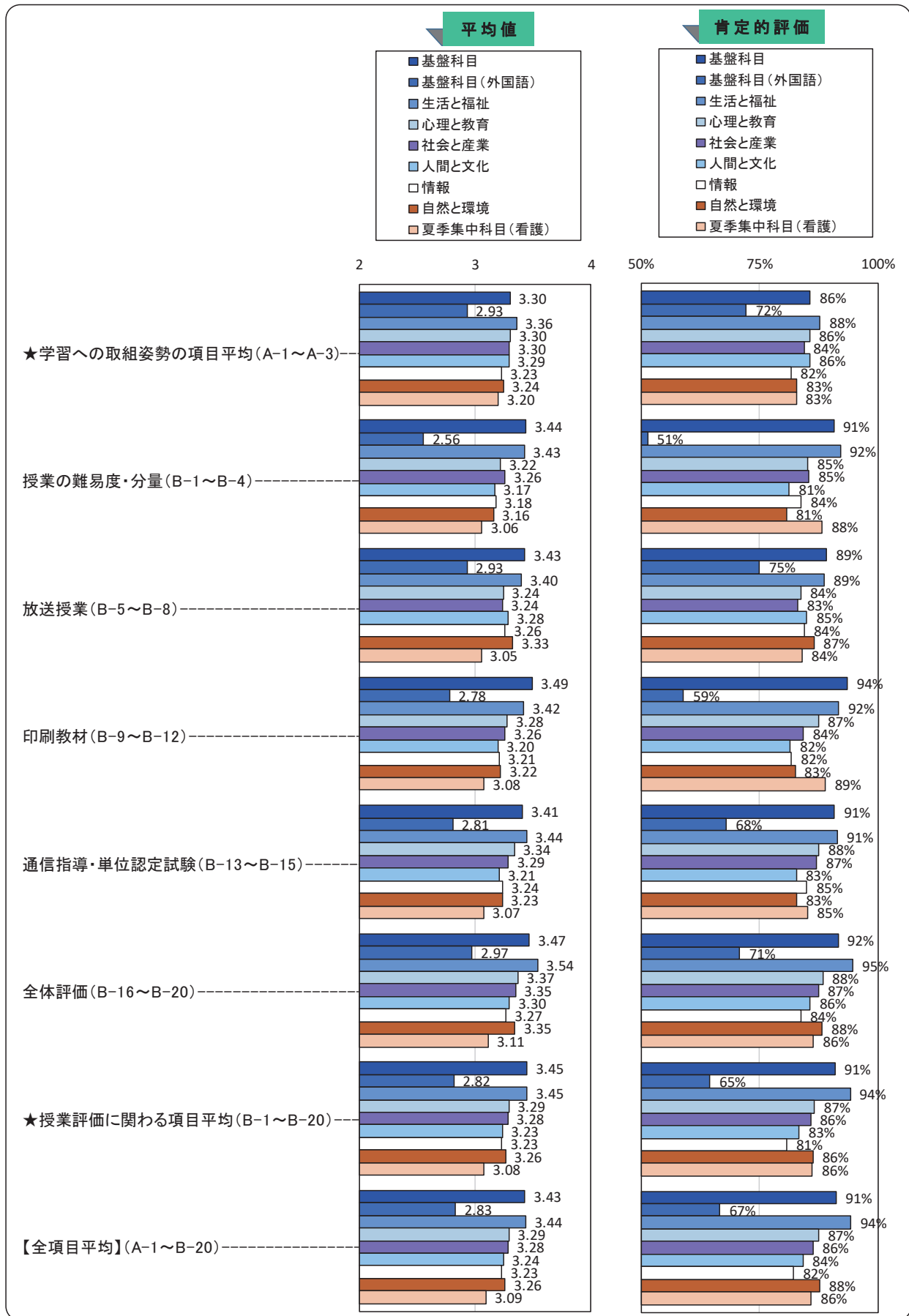
科目の所属コース別に項目平均を見ると（次頁図2-6）、『学習への取組み姿勢』については「生活と福祉」が88%と最も高く、反対に「基盤科目（外国語）」が72%と極端に低かった。

『授業評価に関わる項目』で2項目目～6項目目については、「基盤科目」と「生活と福祉」がいずれの項目でも1～2位を争っており、評価もほぼ90%以上と高率であった。

反対に「基盤科目（外国語）」はいずれの項目でも極端に低く、最も評価の低い『授業の難易度・分量』で51%、最も高い『放送授業』でも75%にすぎず、他の所属コースに比べ大きな差が見られた。



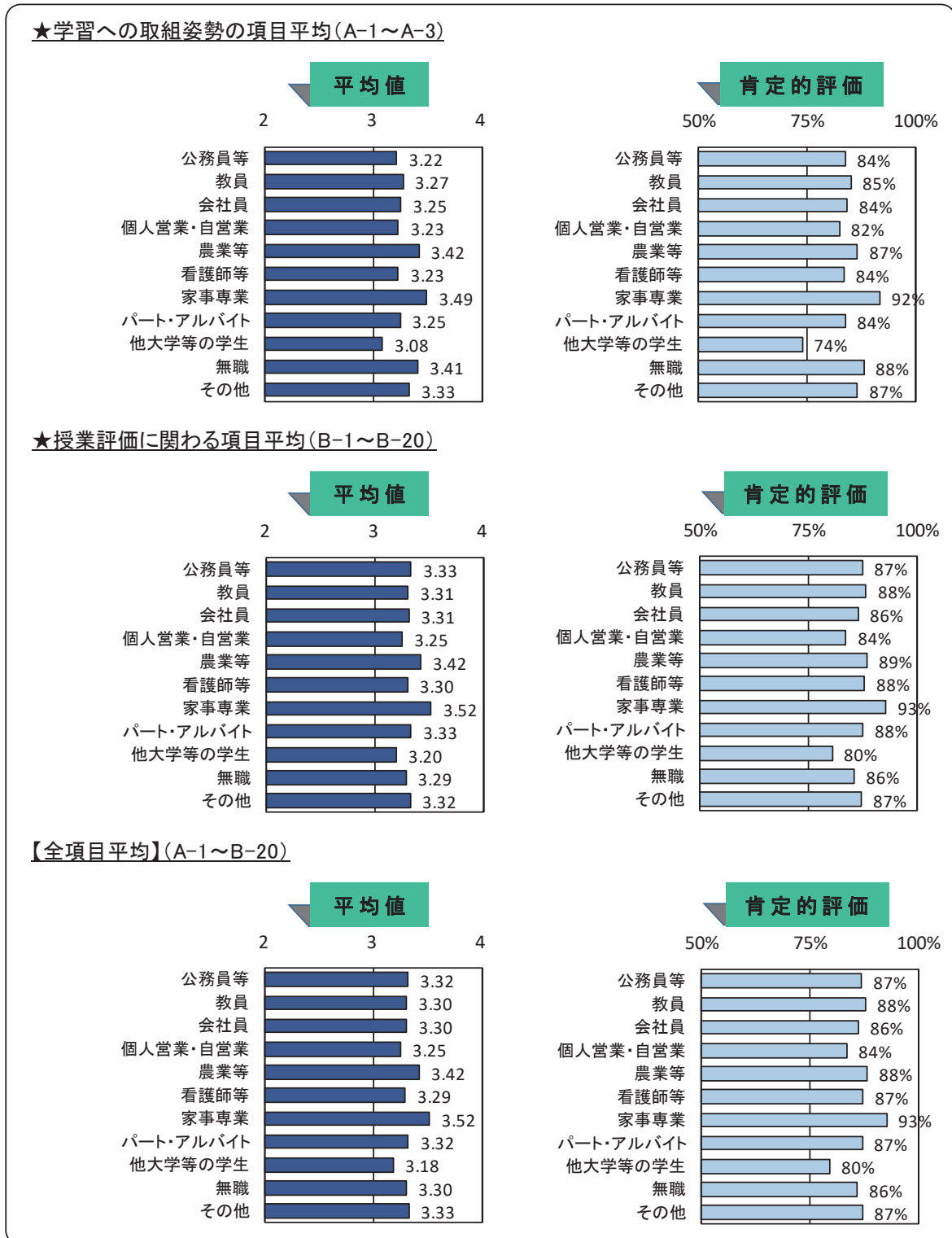
図 2-6 【学部】 項目平均による所属コース別全体的傾向



職業別の(図2-7)『学習への取組み姿勢』では、「家事専業」(92%)が唯一90%台と最も高い取組み姿勢が見られ、反対に「他大学等の学生」は74%にとどまった。それ以外の職業では80%台であった。

『授業評価に関わる項目平均』を見ると、肯定的評価は「家事専業」が93%で最も高く、「他大学等の学生」が80%と評価が低かった。それ以外は8割後半の評価が大半であった。

図2-7 【学部】項目平均による職業別全体的傾向



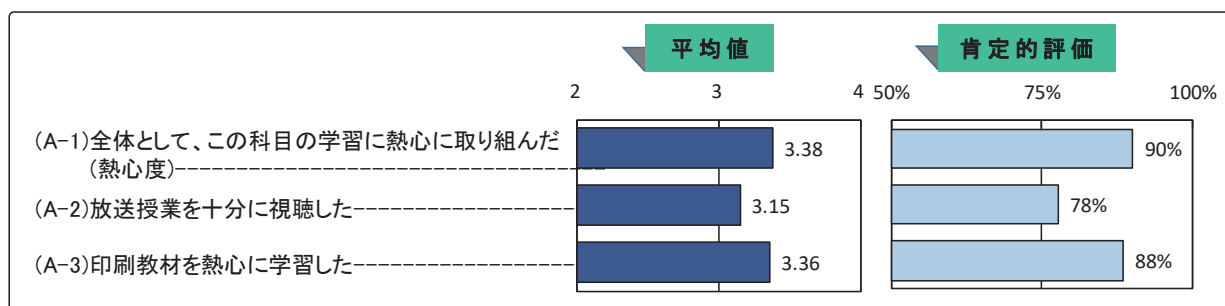
## Ⅱ-1-2. 学習への取組み姿勢

ここからはそれぞれの評価項目ごとに調査結果を見ていく。

全回答者の学習への取組み姿勢（図2-8）では、(A-1)「全体としてこの科目の学習に熱心に取り組んだ（熱心度）」が90%と、履修生の9割が熱心に学習していた。同様に(A-3)「印刷教材を熱心に学習した」も肯定的評価が88%であった。

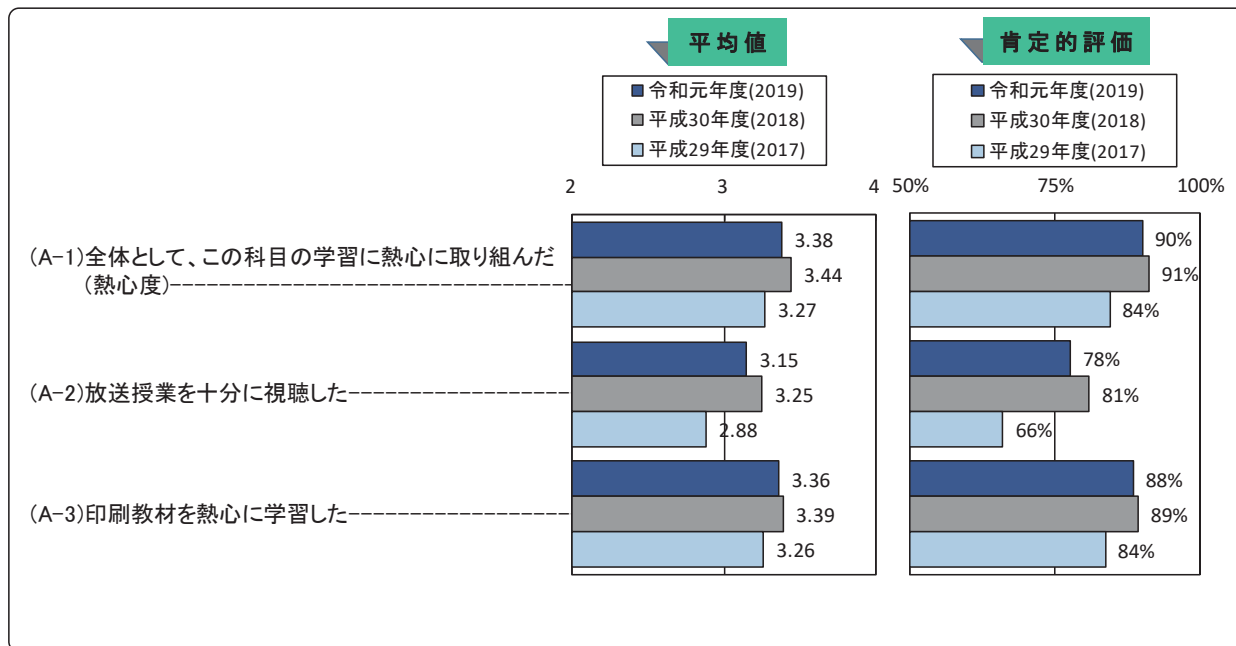
(A-2)「放送授業を十分に視聴した」は78%と前述の項目に比べ低く、印刷教材での学習のウエイトが高かった。

図2-8 【学部】回答者全体の取組み姿勢



取組み姿勢を時系列で見ると（図2-9）、いずれの項目でも本年度と昨年度の評価は、一昨年度を上回っており、特に(A-2)「放送授業を十分に視聴した」については、本年度は昨年度からわずかに比率を下げたが、一昨年度を大幅に上回っている。

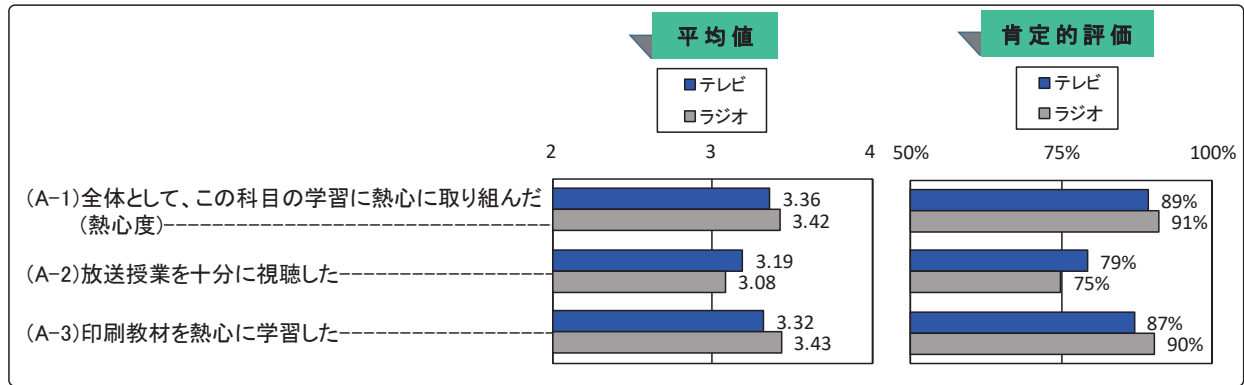
図2-9 【学部】回答者全体の取組み姿勢（時系列）



次にメディア別の取組姿勢では（図2-10）、(A-1)「全体として、この科目の学習に熱心に取り組んだ」と(A-3)「印刷教材を熱心に学習した」は、ラジオ科目がわずかに高く90%に達していた。

(A-2)「放送授業を十分に視聴した」では、反対にテレビ科目（79%）が4ポイント高かった。

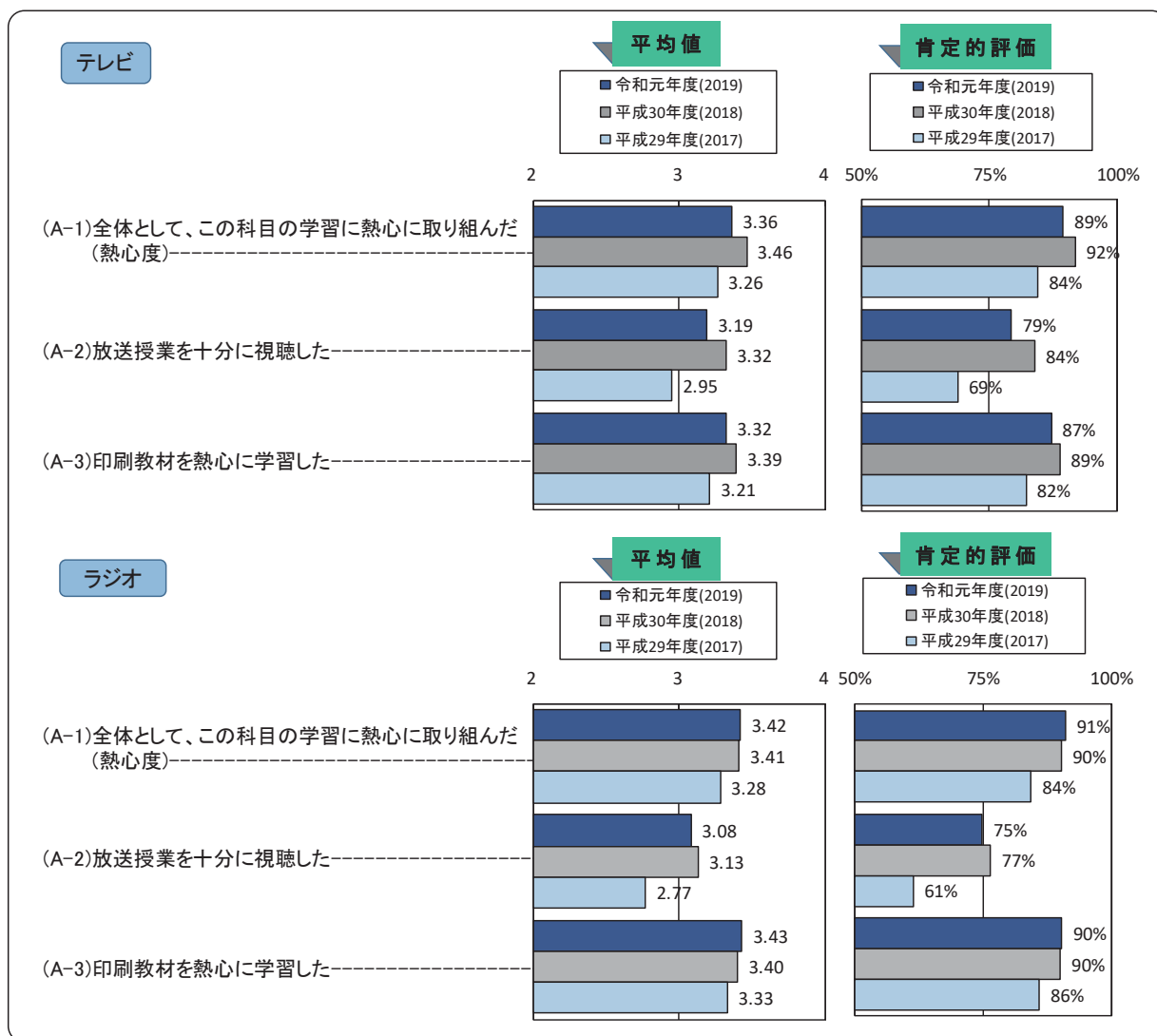
図2-10 【学部】メディア別の取組姿勢



メディア別の取組姿勢を時系列で見ると（図2-11）、テレビ科目は、一昨年度に比べ3項目とも評価が上がっているが、昨年度との対比では3項目とも比率を下げており、特に（A-2）「放送授業を十分に視聴した」では5ポイントのマイナスで79%にとどまった。

ラジオ科目の本年度は、昨年度の一昨年度からの上昇分を維持していた。

図2-11 【学部】メディア別の取組姿勢（時系列）

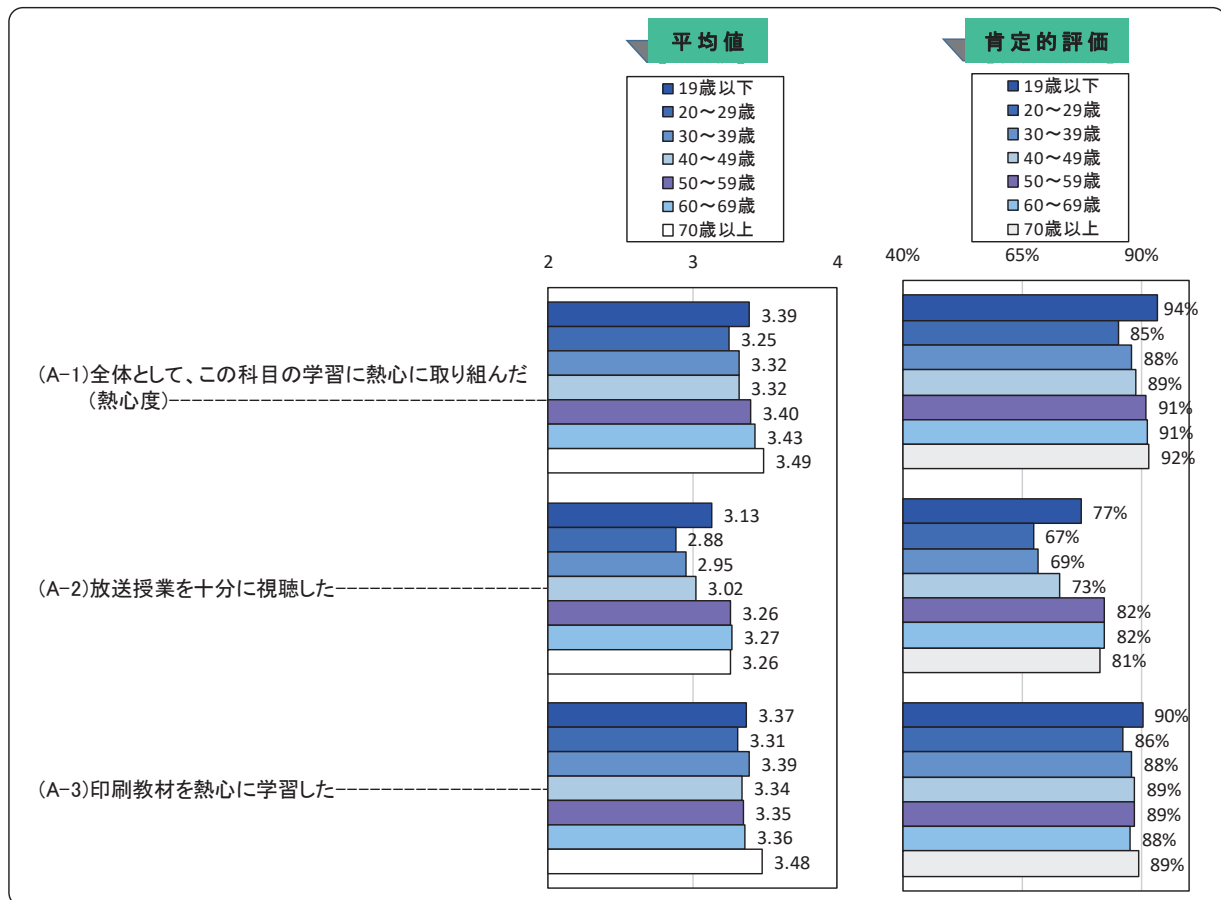


年齢階層別に取り組姿勢を見ると（図2-12）、(A-1)「全体として、この科目の学習に熱心に取り組んだ」は19歳以下(94%)が最も高く、それ以降は20歳代から70歳以上まで年代が上がるにつれ、熱心度も高くなる傾向で、70歳以上は92%に達していた。

(A-2)「放送授業を十分に視聴した」は19歳以下(77%)が平均的な値で、20歳代～40歳代までが70%前後と低く、50歳代～70歳代が80%越えで高かった。

(A-3)「印刷教材を熱心に学習した」は80%後半から90%と、どの年代も一様に高かった。

図2-12 【学部】年齢階層別の取組姿勢



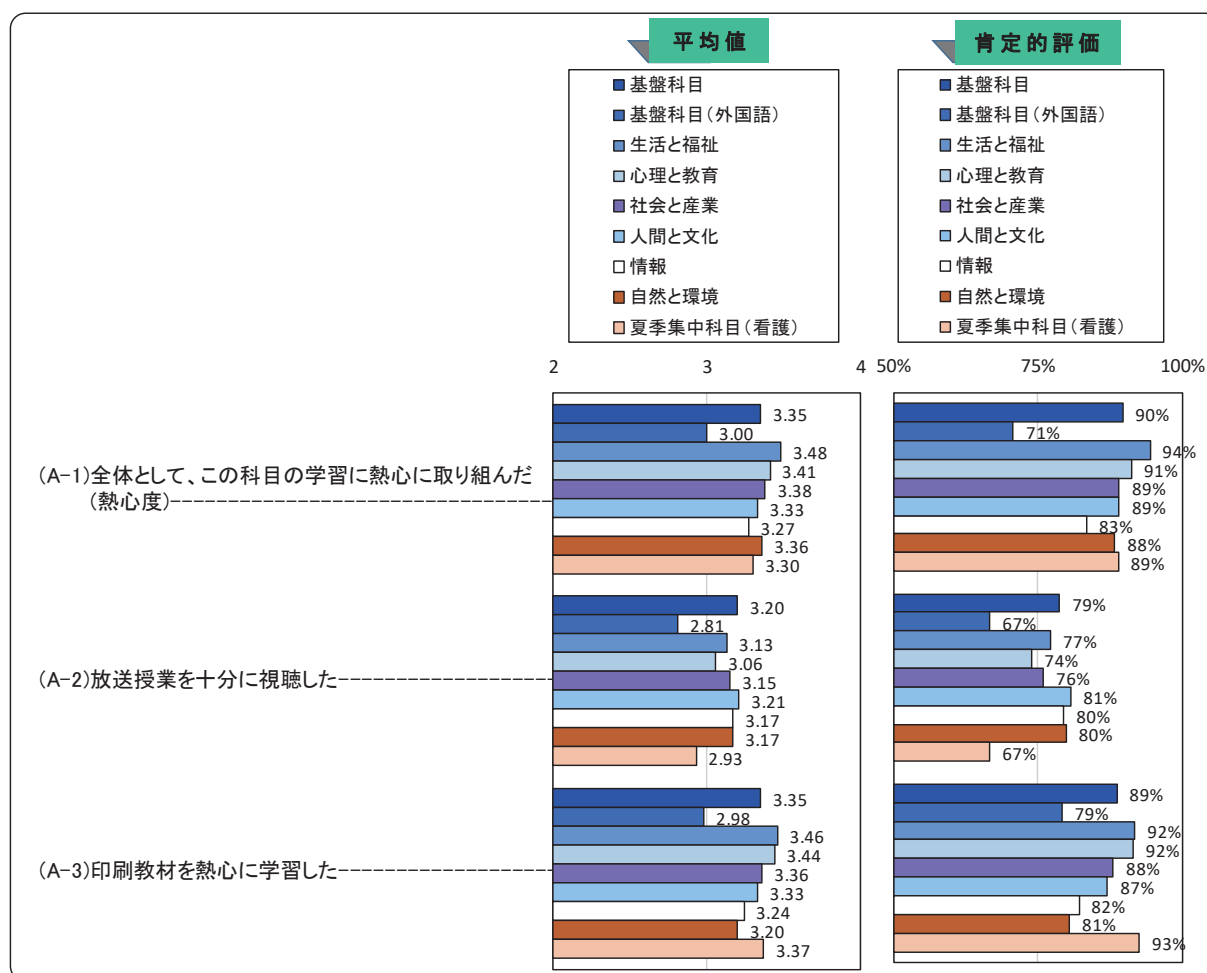
所属コース別に取り組姿勢を見ると（図2-13）、(A-1)「全体として、この科目の学習に熱心に取り組んだ」は「生活と福祉」が94%と熱心度が最も高かった。

反対に「基盤科目（外国語）」（71%）と「情報」（83%）はそれ以外のコースと比べ極めて低率であった。

(A-2)「放送授業を十分に視聴した」は「人間と文化」が81%と最も高く、逆に「基盤科目（外国語）」と「夏季集中科目（看護）」が共に67%と最も低率であった。

(A-3)「印刷教材を熱心に学習した」では「夏季集中科目（看護）」が93%とトップ、反対に「基盤科目（外国語）」「情報」「自然と環境」は80%前後で、他のコースに比べ熱心度は低かった。

図2-13 【学部】所属コース別の取組姿勢



職業別に取り組姿勢を見ると（次頁図2-14）、(A-1)「全体として、この科目の学習に熱心に取り組んだ」は「他大学等の学生」(81%)が他の職業との対比で低率であったが、それ以外は90%前後と熱心度は高かった。

(A-2)「放送授業を十分に視聴した」は「農業等」(90%)と「家事専業」(86%)が高く、反対に「看護師等」と「他大学等の学生」は70%を下回っていた。

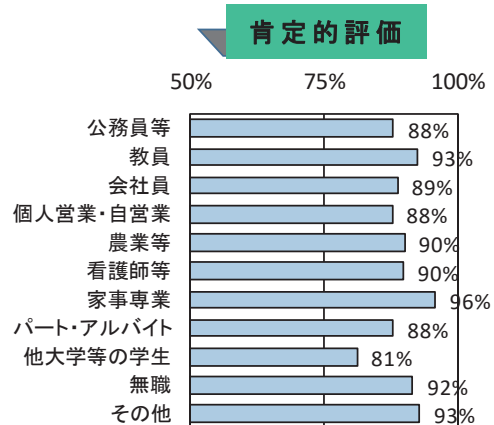
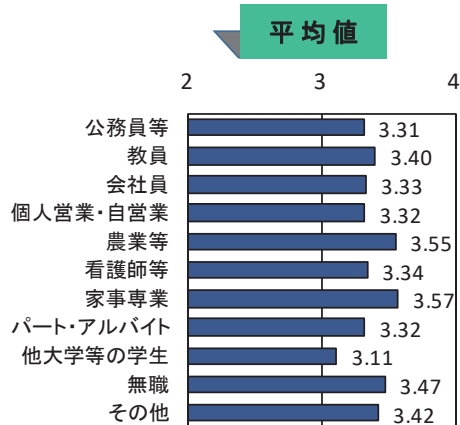
(A-3)「印刷教材を熱心に学習した」は「教員」「看護師等」「家事専業」「無職」が特に高く90%を越えていた。

「他大学等の学生」は(A-3)「印刷教材を熱心に学習した」(73%)でも最も低率で、取り組み姿勢の3項目全てで、最下位であった。

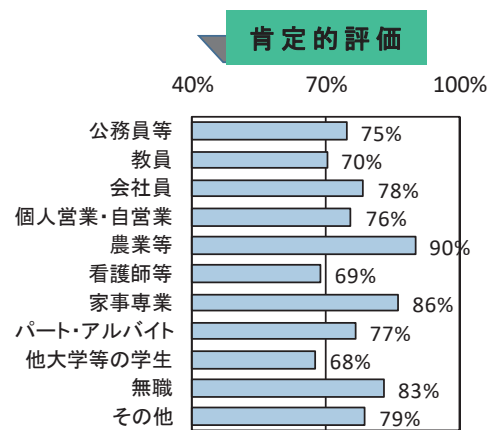
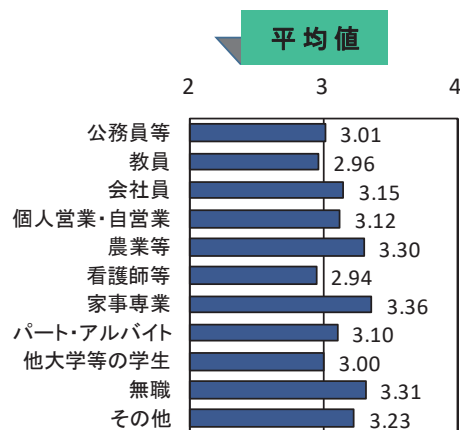


図 2 - 1 4 【学部】職業別の取組姿勢

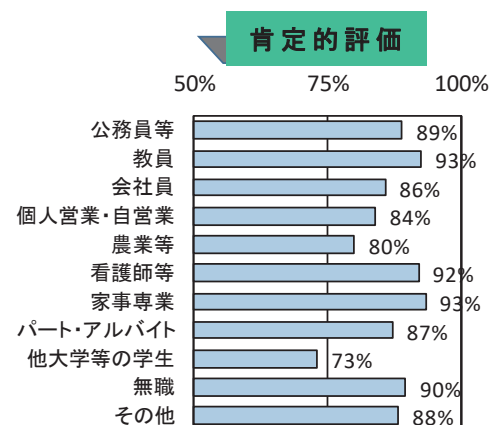
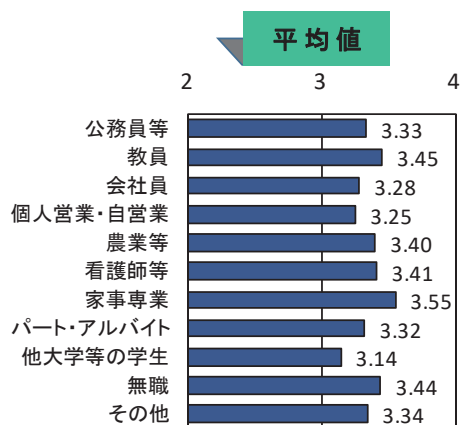
(A-1)全体として、この科目の学習に熱心に取り組んだ



(A-2)放送授業を十分に視聴した



(A-3)印刷教材を熱心に学習した



単位認定のための学習方法（次頁図2-15）は、全体では『放送教材と印刷教材の両方の学習で臨んだ』が68%と過半数を占め、『ほとんど印刷教材の学習だけで臨んだ』が24%、『ほとんど放送教材の学習だけで臨んだ』はわずか8%で、全二者合計の「印刷教材」で臨んだは92%であった。

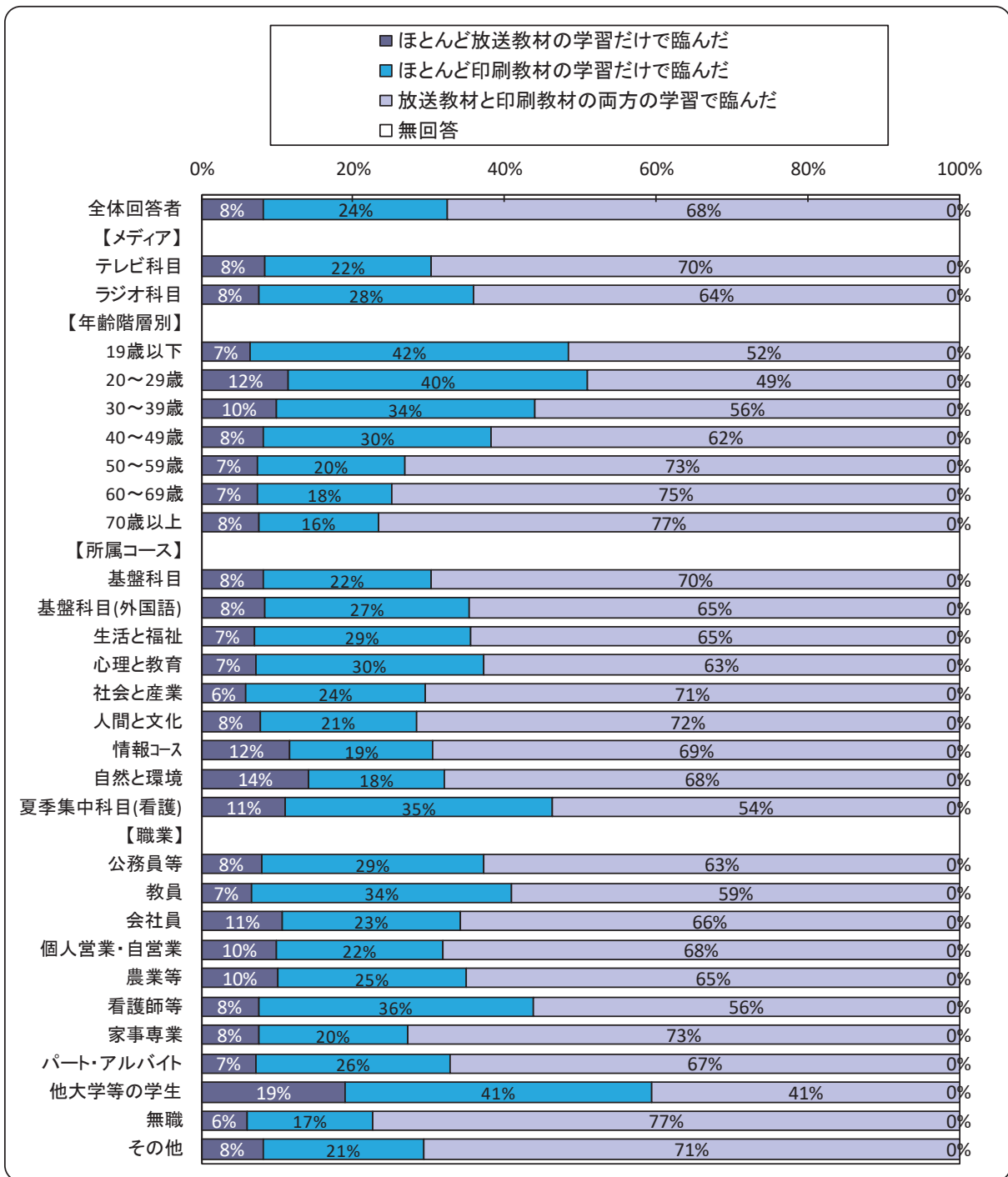
メディア別では「テレビ科目」は『放送教材と印刷教材の両方の学習で臨んだ』が「ラジオ科目」より多く、「ラジオ科目」は『ほとんど印刷教材の学習だけで臨んだ』が「テレビ科目」より多かった。

年齢階層別では19歳以下と20歳代は『放送教材と印刷教材の両方の学習で臨んだ』が50%前後で、それ以降は、年代の上昇と共に『両方の学習で臨んだ』が増加し、70歳以上で77%に達していた。

所属コース別では『放送教材と印刷教材の両方』が70%越えで高かったのは「基盤科目」「社会と産業」「人間と文化」、『印刷教材の学習だけ』は「心理と教育」「夏季集中科目（看護）」が他の所属コースと比べ30%超えと高かった。

職業別では、『両方の学習で臨んだ』が「家事専業」「無職」「その他」で高く、『印刷教材の学習だけ』は「他大学等の学生」が41%と、他の職業と比べ極端に高く、『放送教材の学習だけ』も19%と突出しており固有の傾向が見られた。

図2-15 【学部】 単位認定のための学習方法



## Ⅱ-1-3. 学部の授業評価

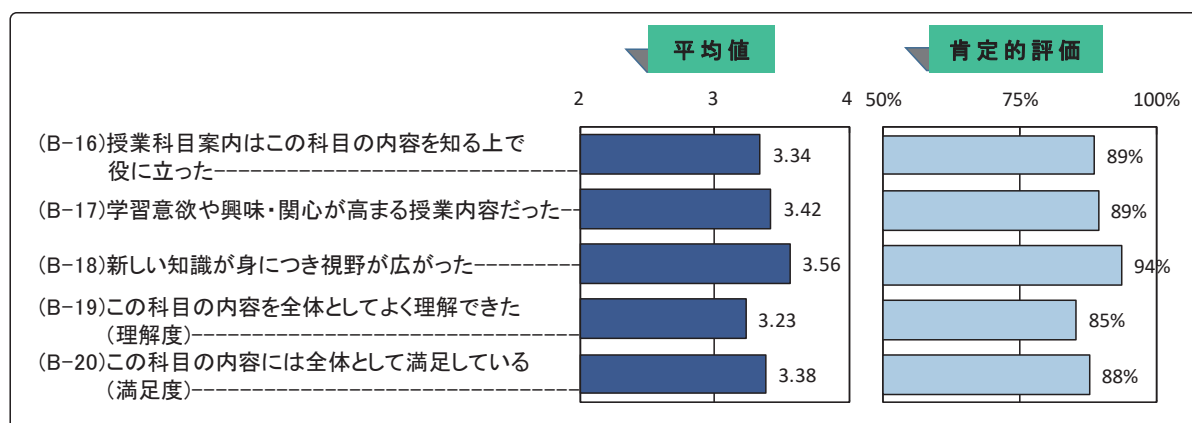
### (1) 全体評価

次に学部の授業評価について、評価項目ごとに見ていく。

全体評価の各項目（図2-16）については、(B-18)「新しい知識が身につく視野が広がった」が94%と最も高く、(B-19)「この科目の内容を全体としてよく理解できた(理解度)」はこの5項目の中では最も低かったが、85%と8割以上から支持されていた。

それ以外の3項目は88%～89%に達していた。

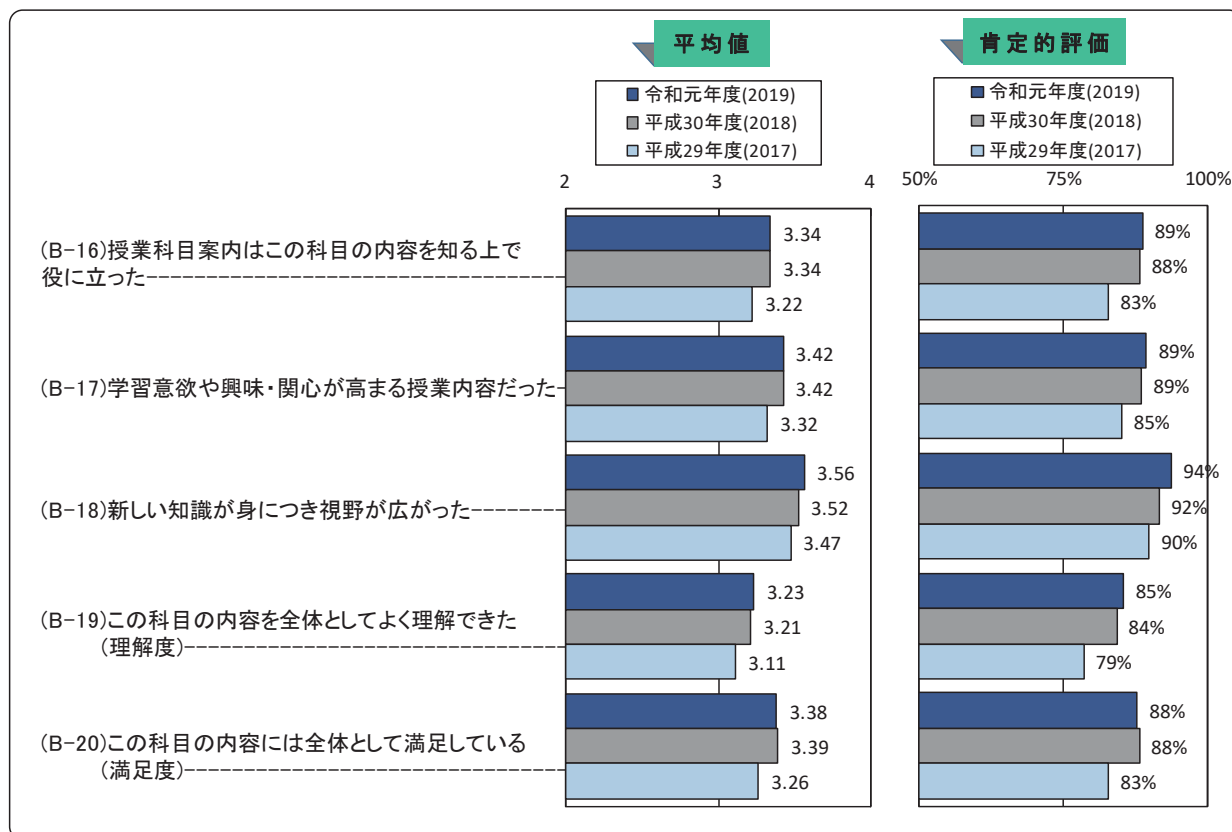
図2-16 【学部】 回答者全体の全体評価



全体評価を時系列で見ると(図2-17)、本年度も下記全ての項目で、概ね昨年度と変わらず、一昨年度からの上昇を維持していた。

本年度の(B-18)「新しい知識が身につく視野が広がった」は昨年度からの上昇が見られ、94%と全項目間で最も高い評価となっていた。

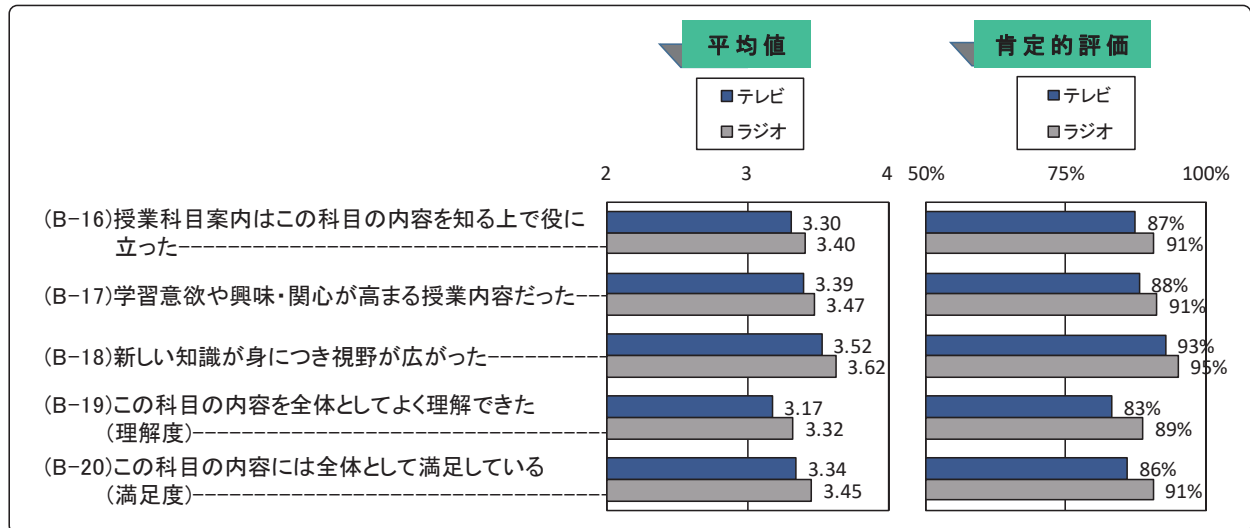
図2-17 【学部】 回答者全体の全体評価(時系列)



メディア別に全体評価を見ると（図2-18）、全ての項目でラジオ科目の評価が高く、いずれもほぼ90%を超えていた。

両メディア間の差を見ると、(B-19)「この科目の内容を全体としてよく理解できた(理解度)」でラジオ科目が6ポイント高く、その差が最も大きかった。

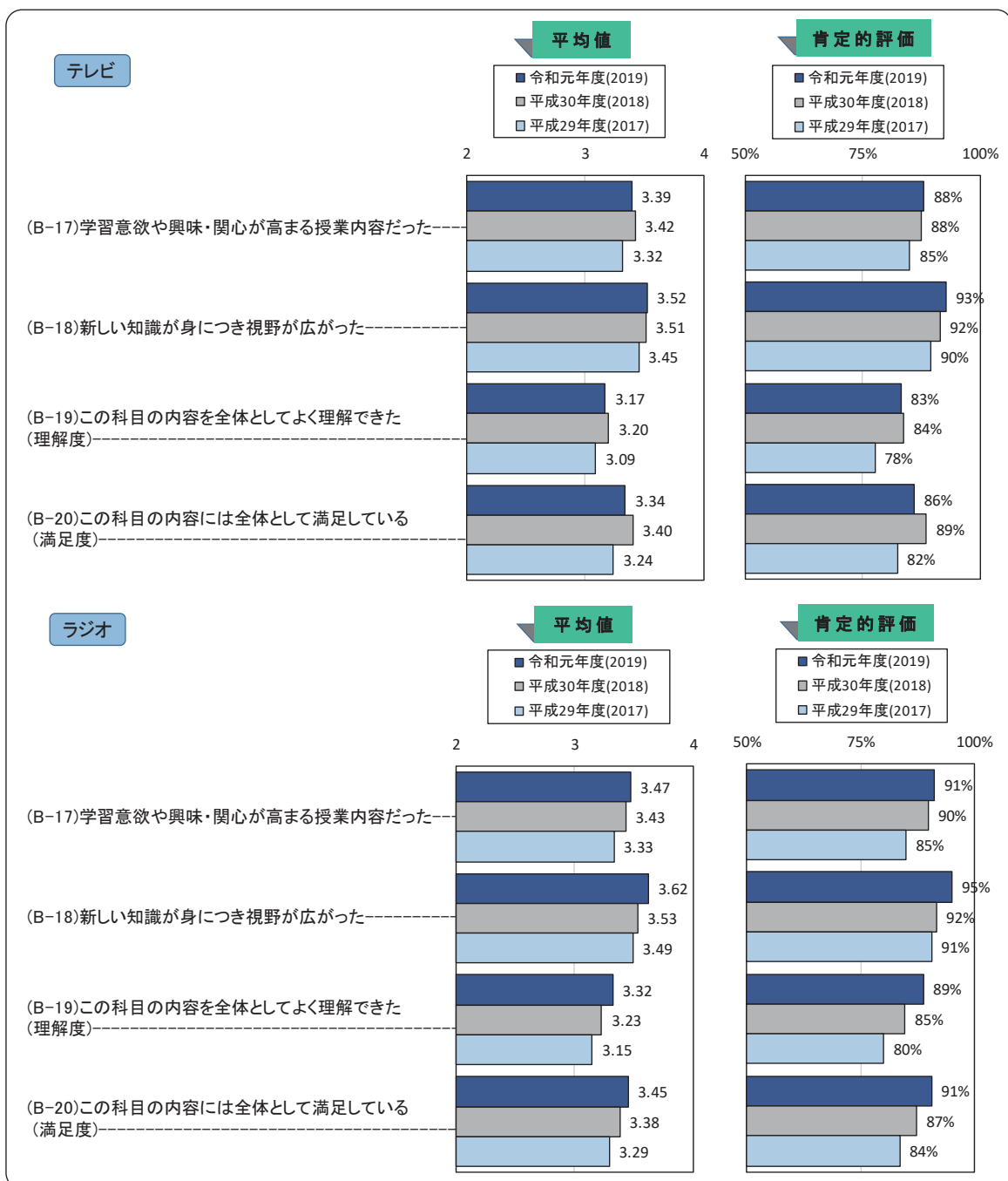
図2-18 【学部】メディア別の全体評価



メディア別の全体評価を時系列で見ると（図2-19）、テレビ科目は、（B-17）「学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった」から（B-19）「この科目の内容を全体としてよく理解できた（理解度）」までの3項目では、本年度は、昨年度と変わらず、一昨年度からの上昇分を維持していたが、（B-20）「この科目の内容には全体として満足している（満足度）」において、昨年度からわずかに支持率を下げ86%であった。

ラジオ科目では、（B-17）「学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった」については昨年度と同水準の91%であったが、それ以降の3項目では、昨年度を上回る評価を得ており、特に（B-18）「新しい知識が身につく視野が広がった」では95%と高く評価された。

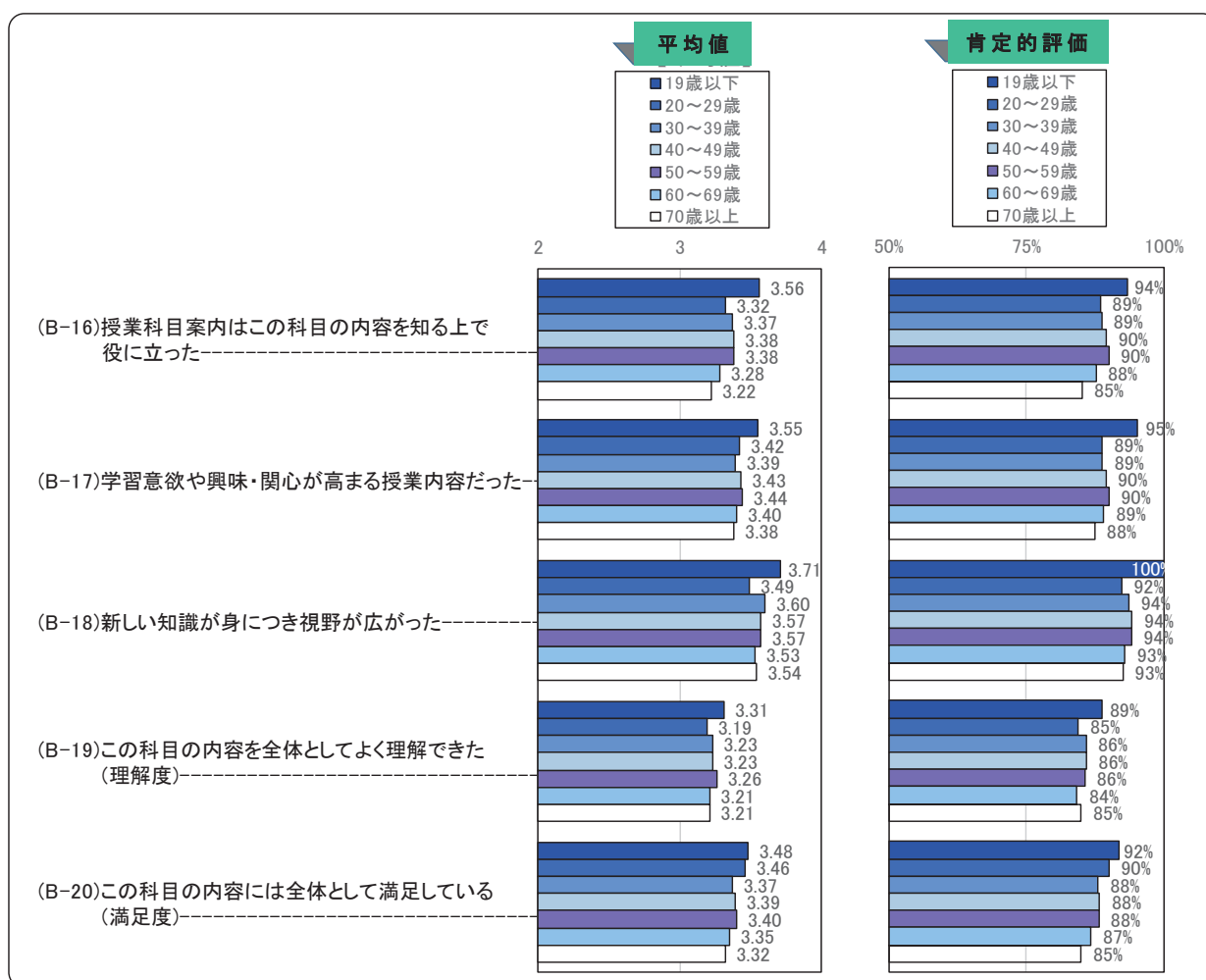
図2-19 【学部】メディア別の全体評価



年齢階層別に全体評価（図2-20）を見ると、全ての項目において19歳以下の評価が最も高く、特に(B-18)「新しい知識が身につき視野が広がった」について肯定的評価をしたのは全員であった。

反対に評価が低かったのは70歳以上で、(B-16)「授業科目案内はこの科目の内容を知る上で役に立った」と(B-20)「この科目の内容には全体として満足している(満足度)」で85%と、トップとの差は大きく(B-17)「学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった」を加えた、3項目で最も低い値だった。

図2-20【学部】年齢階層別の全体評価

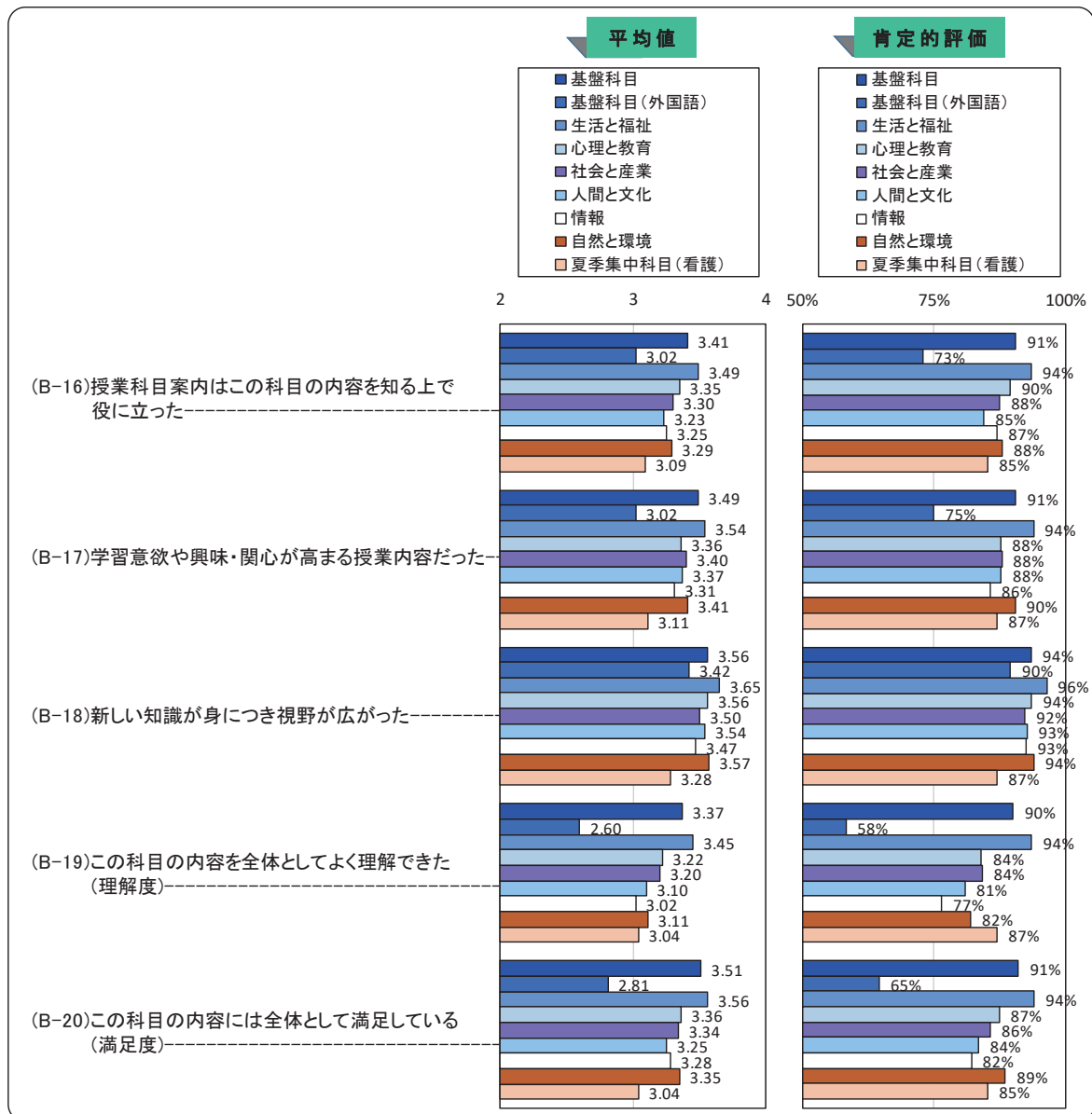




所属コース別の全体評価では（図2-21）、全ての項目で最も高い評価だったのは「生活と福祉」、次いで「基盤科目」であった。その値も全て90%以上の高率であった。

反対に評価が低かったのは「基盤科目（外国語）」で、(B-18)「新しい知識が身につく視野が広がった」を除く4項目で最下位となり、特に(B-19)の理解度と(B-20)の満足度は他の所属コースと比べ極端に低かった。

図2-21 【学部】所属コース別の全体評価



職業別の全体評価（次頁図2-22）で評価が高かったのは「家事専業」と「教員」で、図内の3項目のいずれも92%前後であった。

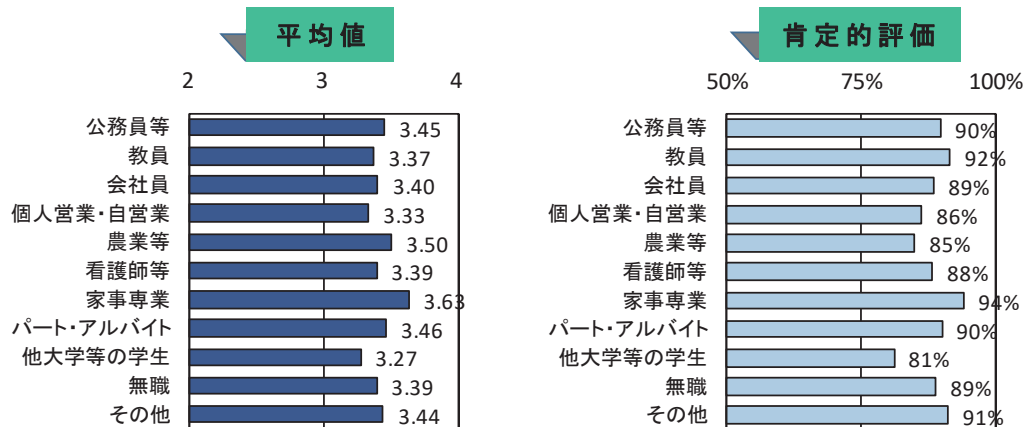
反対に（B-17）「学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった」と（B-19）「この科目の内容を全体としてよく理解できた（理解度）」で評価が低かったのは、「他大学等の学生」で、それぞれ81%に過ぎなかった。

他に（B-19）の理解度と（B-20）「この科目の内容には全体として満足している（満足度）」で評価が低かったのは「個人営業・自営業」で、順に81%と83%にとどまっていた。

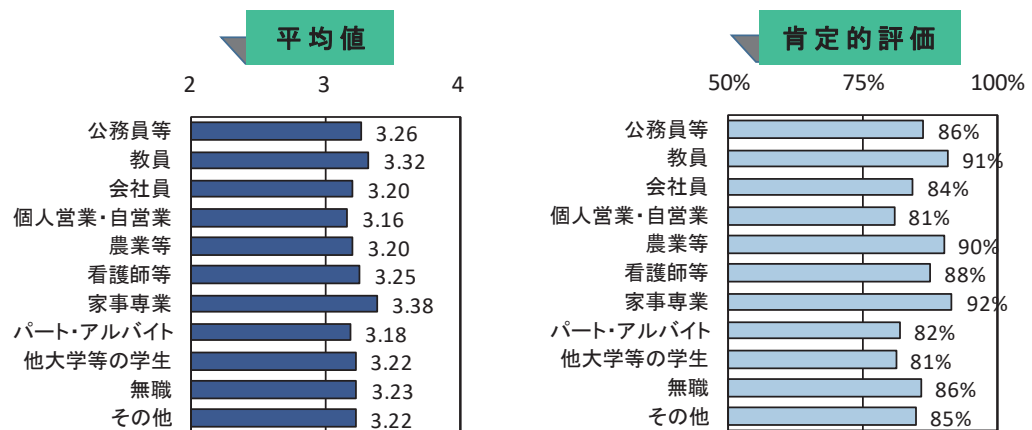
（B-20）の満足度については、その「個人営業・自営業」を除けばどの職業からも86%以上と高い評価を得ていた。

図 2-22 【学部】職業別の全体評価

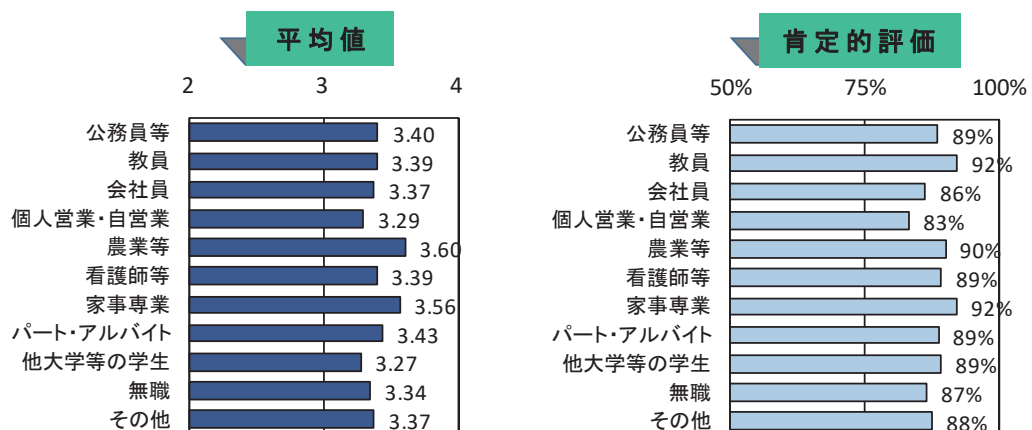
(B-17)学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった



(B-19)この科目の内容を全体としてよく理解できた(理解度)



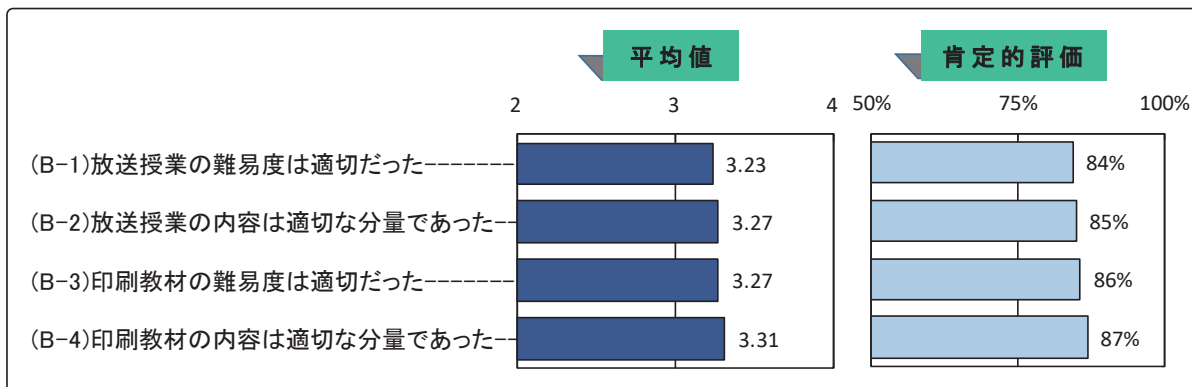
(B-20)この科目の内容には全体として満足している(満足度)



## (2) 授業の難易度・分量

次に授業の難易度・分量（図2-23）について、評価項目ごとに見ていくことにする。  
肯定的評価の全項目で84%～87%と、80%半ばに達し項目間に大きな差は見られなかった。

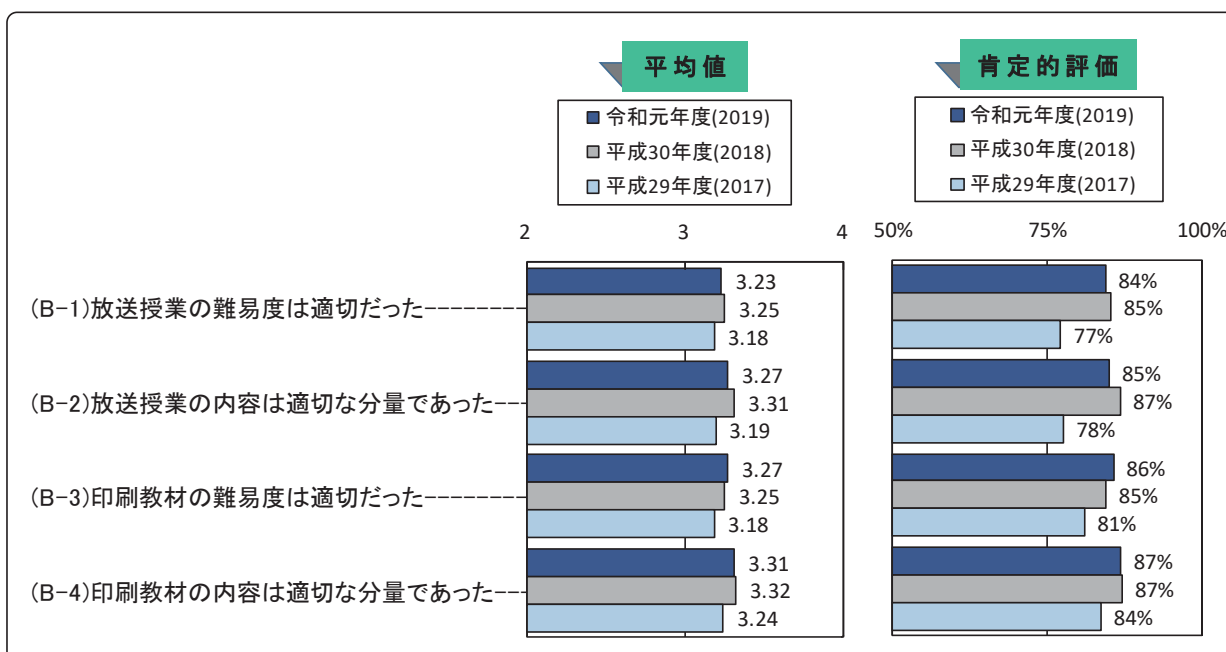
図2-23 【学部】回答者全体の授業難易度・分量の評価



開設年度で比較すると（図2-24）、(B-2)「放送授業の内容は適切な分量であった」以外の3項目では、本年度は昨年度と同水準で、8割半ばを維持していた。

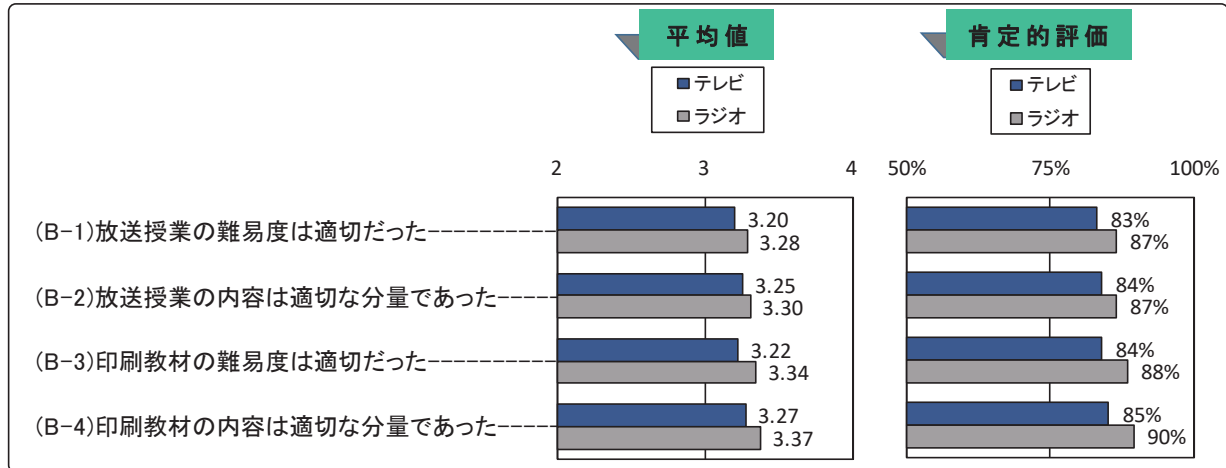
(B-2)「放送授業の内容は適切な分量であった」については、本年度は昨年度からわずかに減少したが、85%と一昨年よりは高い支持率であった。

図2-24 【学部】回答者全体の授業難易度・分量の評価（開設年度比較）



メディア別に授業の難易度・分量を見ると（図2-25）、いずれの項目もテレビ科目よりラジオ科目の評価は高く、(B-4)「印刷教材の内容は適切な分量であった」で5ポイントと最も大きな差が見られた。

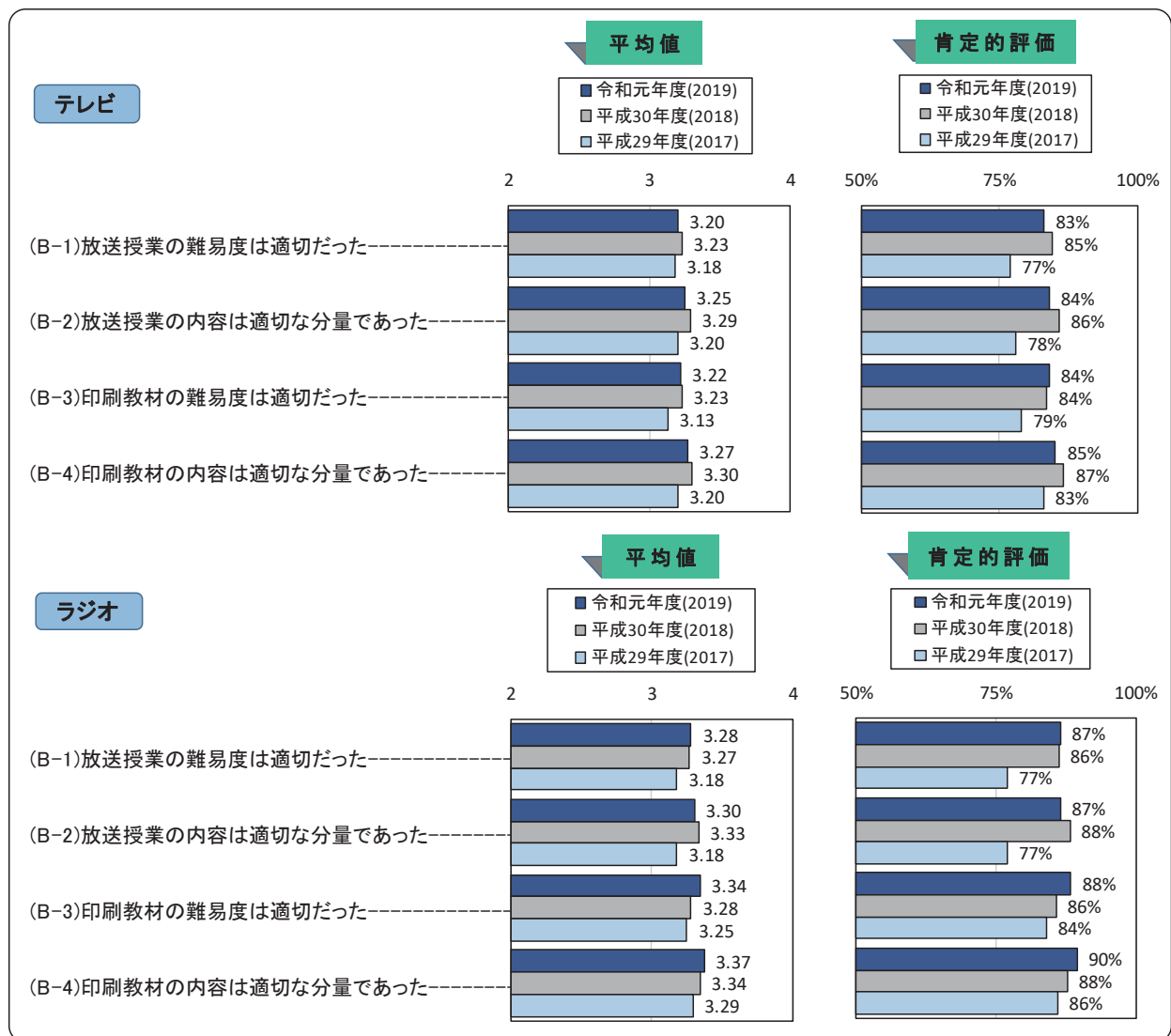
図2-25 【学部】メディア別の授業難易度・分量の評価



メディア別の授業の難易度・分量を開設年度で比較すると（図2-26）、テレビ科目では、昨年度の一昨年度からの上昇分を全項目で概ね維持していたが、(B-3)「印刷教材の難易度は適切だった」以外の3項目では昨年度と比べわずかな下降が見られた。

ラジオ科目もテレビ科目同様、一昨年度からの上昇を維持しており、昨年度との対比では(B-3)「印刷教材の難易度は適切だった」と(B-4)「印刷教材の内容は適切な分量であった」でわずかに上昇が見られ後者は90%に達していた。

図2-26 【学部】メディア別の授業難易度・分量の評価（開設年度比較）



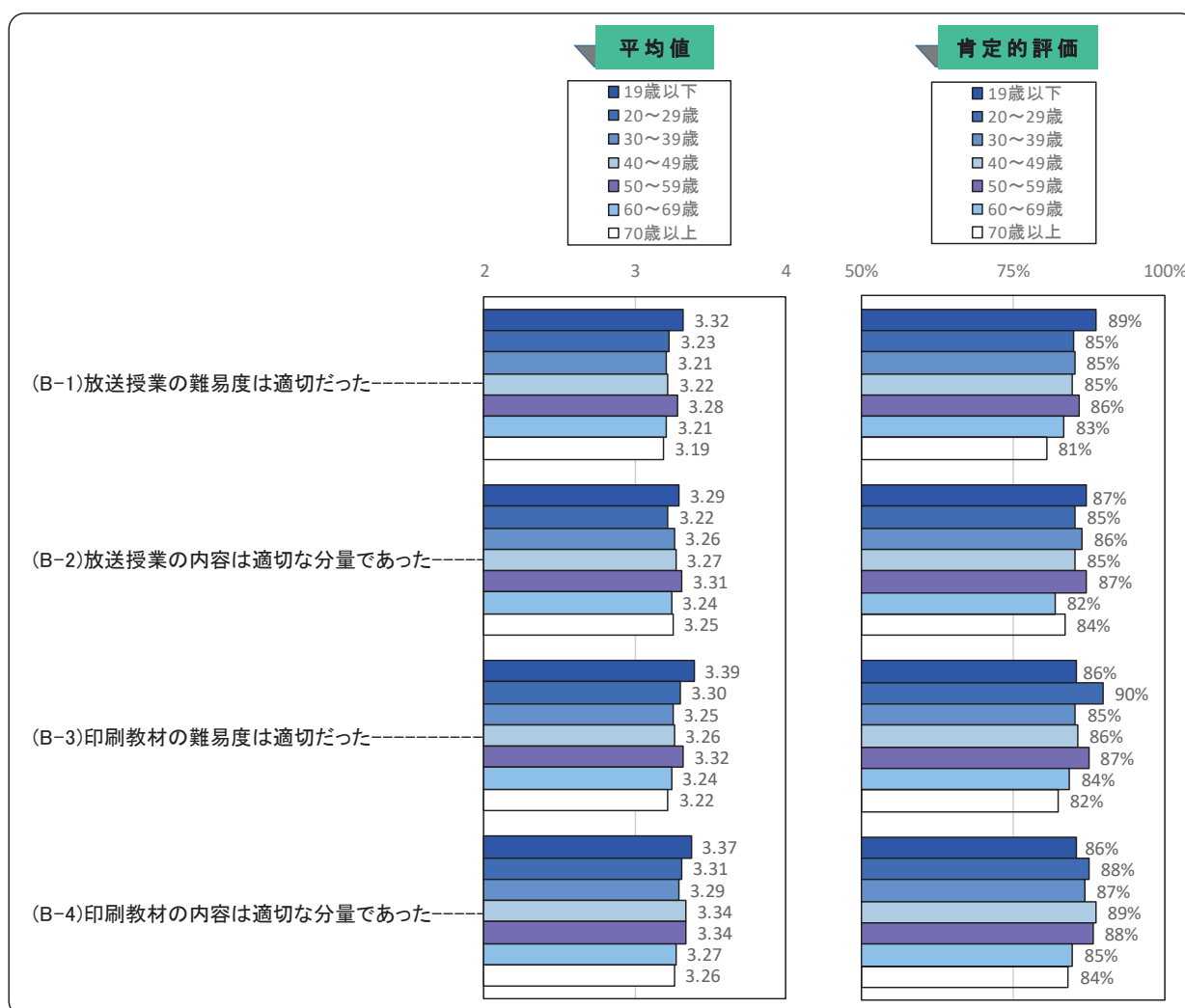
年齢階層別に授業の難易度・分量を見ると（図2-27）、(B-1)「放送授業の難易度は適切だった」で最も高く評価をしていたのは19歳以下（89%）、最も低かったのは70歳以上（81%）で、それ以外の年代の支持率は85%前後であった。

(B-2)「放送授業の内容は適切な分量であった」では60歳代（82%）の評価は低かったが、それ以外の年代は85%前後で、一様な水準であった。

(B-3)「印刷教材の難易度は適切だった」に対して、高い評価は20歳代（90%）、反対に低い評価は70歳以上（82%）で、この二者間の差は大きかった。

(B-4)「印刷教材の内容は適切な分量であった」について、どの年代でも8割半ばから後半に達していた。

図2-27 【学部】年齢階層別の授業難易度・分量の評価

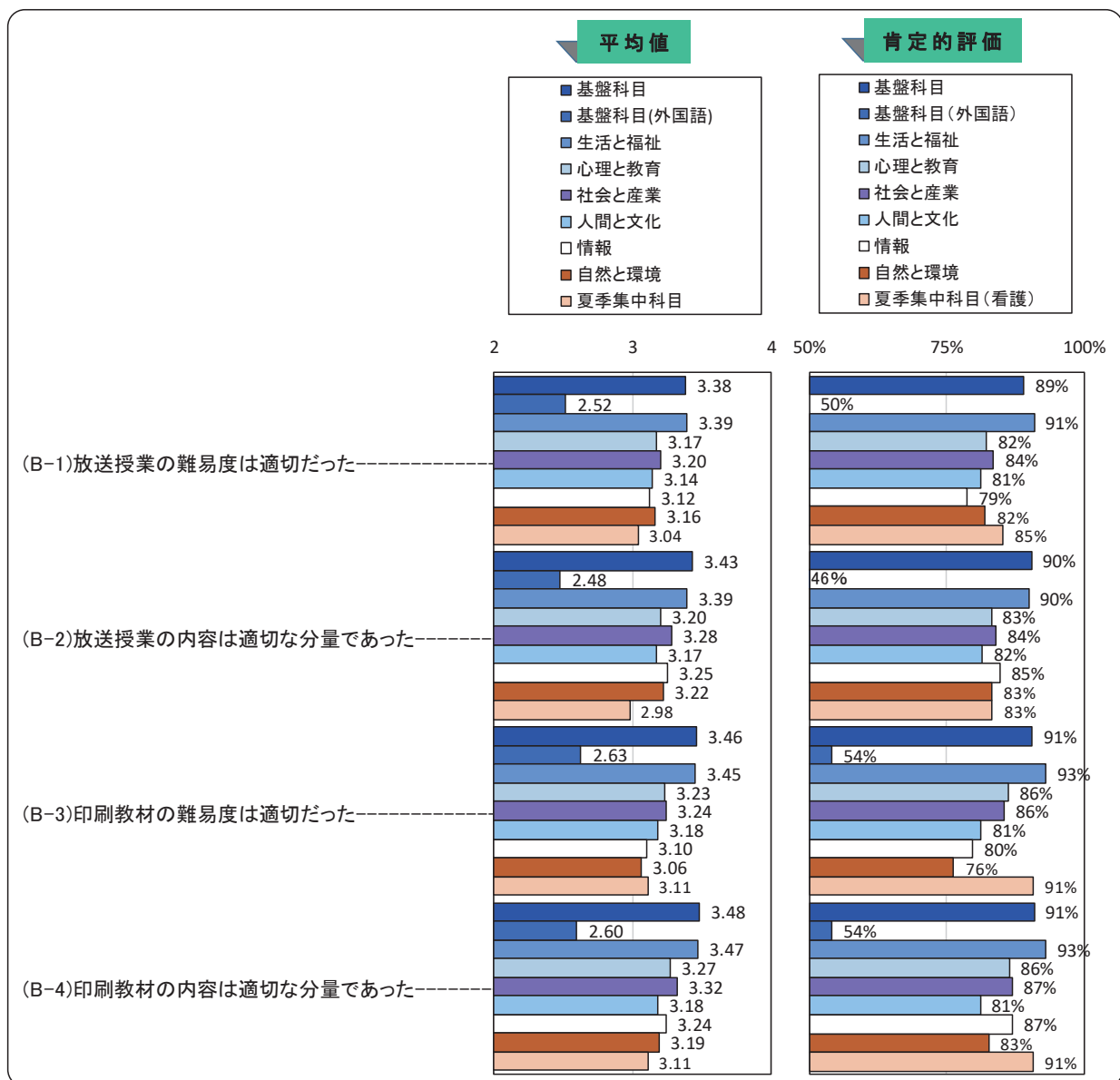


所属コース別に授業の難易度・分量を見ると（図2-28）、下記の4項目について見られる傾向は、「基盤科目」と「生活と福祉」受講生の評価がトップクラスで、90%前後の支持率に達していた。

反対に「基盤科目（外国語）」はそれぞれの評価が極端に低く、その値は46%～54%にすぎなかった。

(B-3)「印刷教材の難易度は適切だった」と(B-4)「印刷教材の内容は適切な分量であった」については「夏季集中科目（看護）」も前述の「基盤科目」と「生活と福祉」同様、評価が高く91%に達していた。

図2-28 【学部】所属コース別の授業難易度・分量の評価

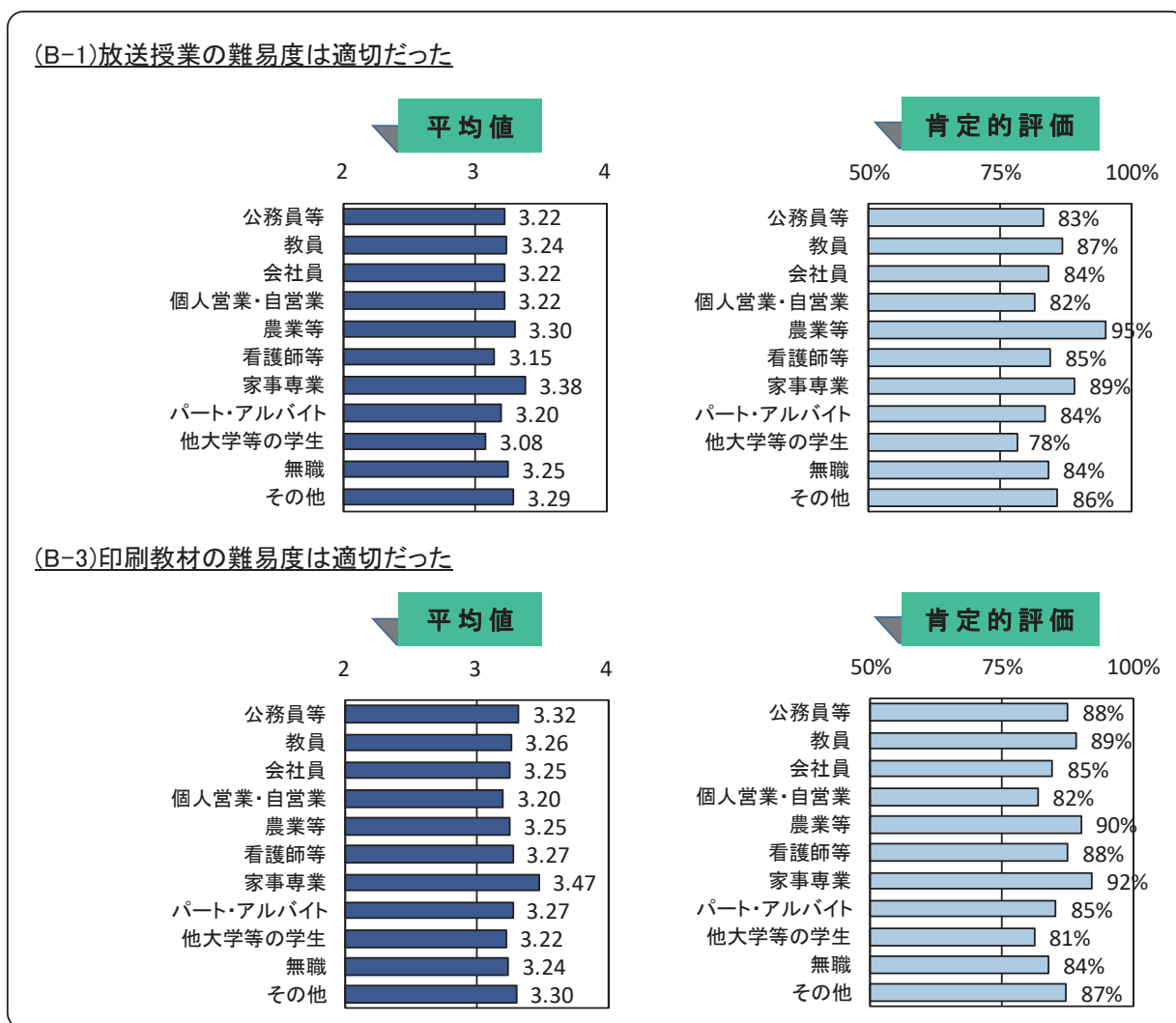




職業別に授業の難易度を見ると（図2-29）、(B-1)「放送授業の難易度は適切だった」は、「他大学等の学生」（78%）を除くと、いずれも80%以上の支持率であったが、「農業等」（95%）は唯一90%越えて、他の職業に比べ際立っていた。

(B-3)「印刷教材の難易度は適切だった」で90%を超えていたのは「家事専業」（92%）と「農業等」（90%）で上位であった。

図2-29 【学部】職業別の授業難易度の評価

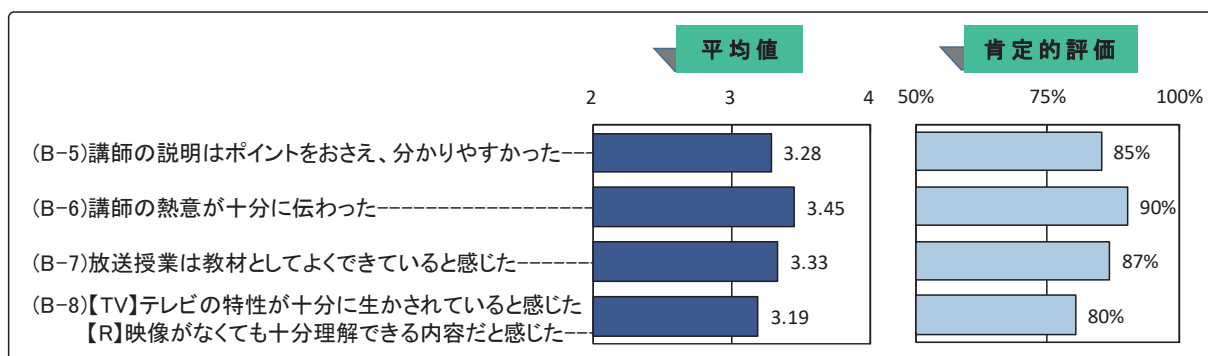


### (3) 放送授業

ここからは放送授業について、評価項目ごとに見ていくことにする。

放送授業に関する4つの評価項目（図2-30）で最も支持率が高かったのは、(B-6)「講師の熱意が十分に伝わった」で90%に達し、最も低かったのは(B-8)「【TV】テレビの特性が十分に生かされていると感じた／【R】映像がなくても十分理解できる内容だと感じた」が80%にとどまり、この両者には大きな差が見られた。

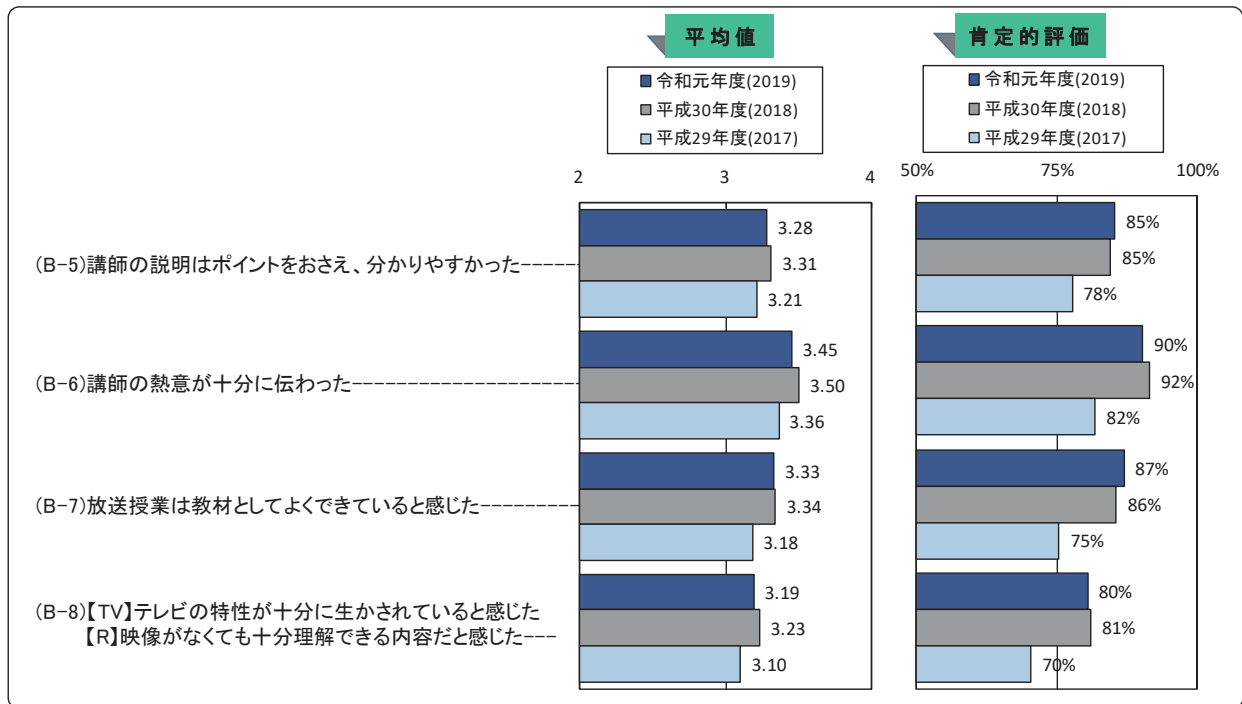
図2-30 【学部】回答者全体の放送授業の評価



放送授業の評価を時系列で見ると（図2-31）本年度は、4項目全てで昨年度の一昨年度からの上昇分を概ね維持していた。

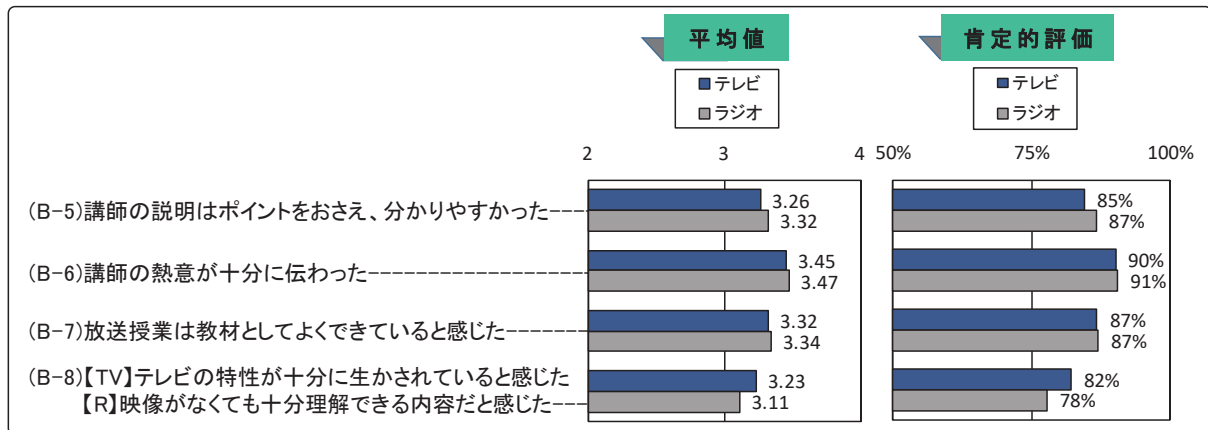
本年度は昨年度と比べると、(B-6)「講師の熱意が十分に伝わった」にわずかな減少が見られたが、90%に達していた。

図2-31 【学部】回答者全体の放送授業の評価（時系列）



メディア別に放送授業の肯定的評価を見ると（図2-32）」（B-5）「講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった」から（B-7）「放送授業は教材としてよくできていると感じた」までは、テレビ科目とラジオ科目間にほとんど差はなかったが、（B-8）「【TV】テレビの特性が十分に生かされていると感じた／【R】映像がなくても十分理解できる内容だと感じた」では、テレビ科目が4ポイント高く、ラジオ科目を上回っていた。

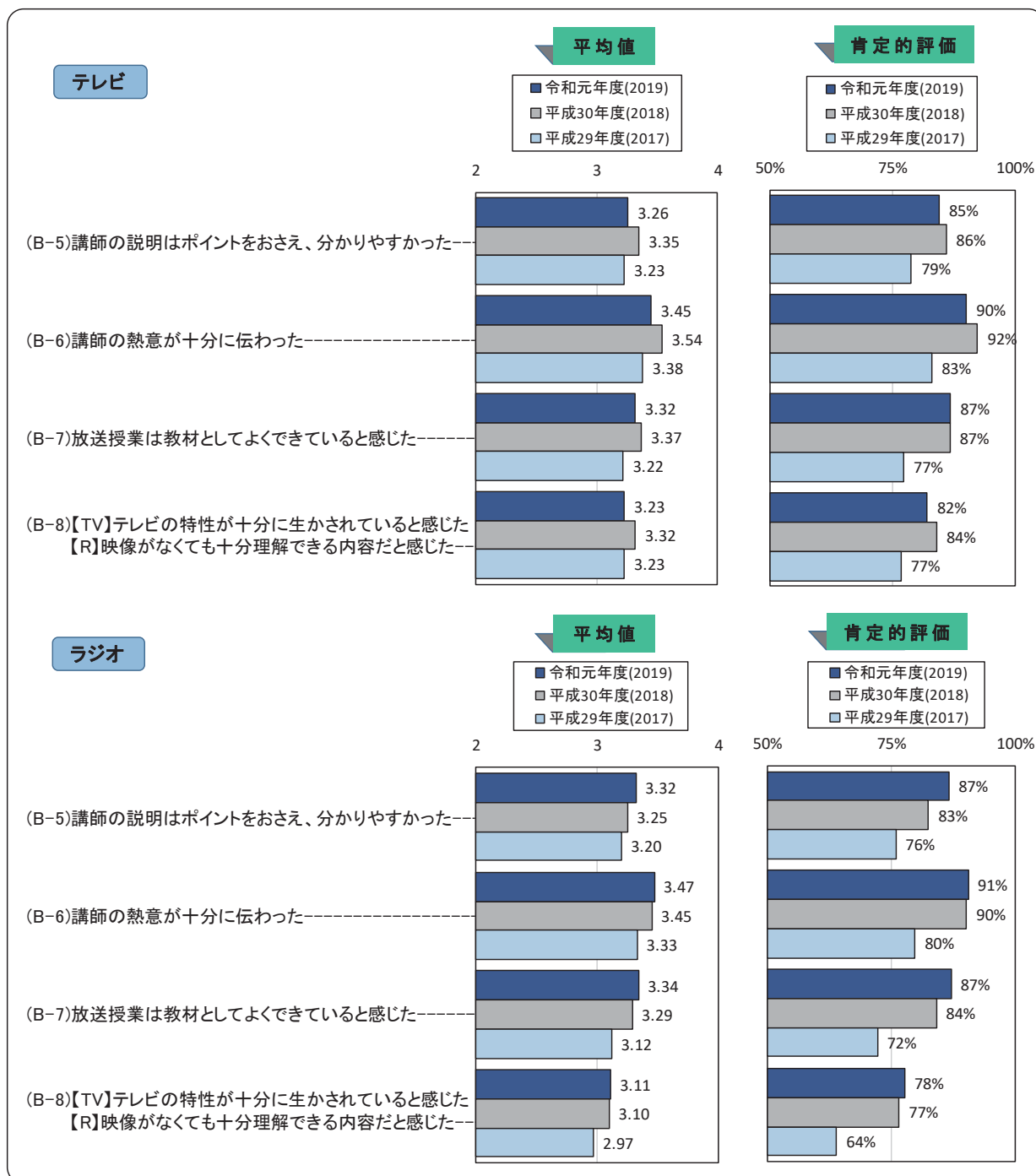
図2-32 【学部】メディア別の放送授業の評価



また、メディア別に放送授業の評価を時系列で見ると（図2-33）、テレビ科目では、本年度は、4項目全てで昨年度の一昨年度からの上昇分を維持しており、本年度と昨年度の4項目の評価は同水準であった。

ラジオ科目では、一昨年度からの上昇という点でテレビ科目と同様であったが、（B-5）「講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった」と（B-7）「放送授業は教材としてよくできていると感じた」については、本年度の支持率に増加が見られ、それぞれ87%に達していた。

図2-33 【学部】メディア別の放送授業の評価（時系列）

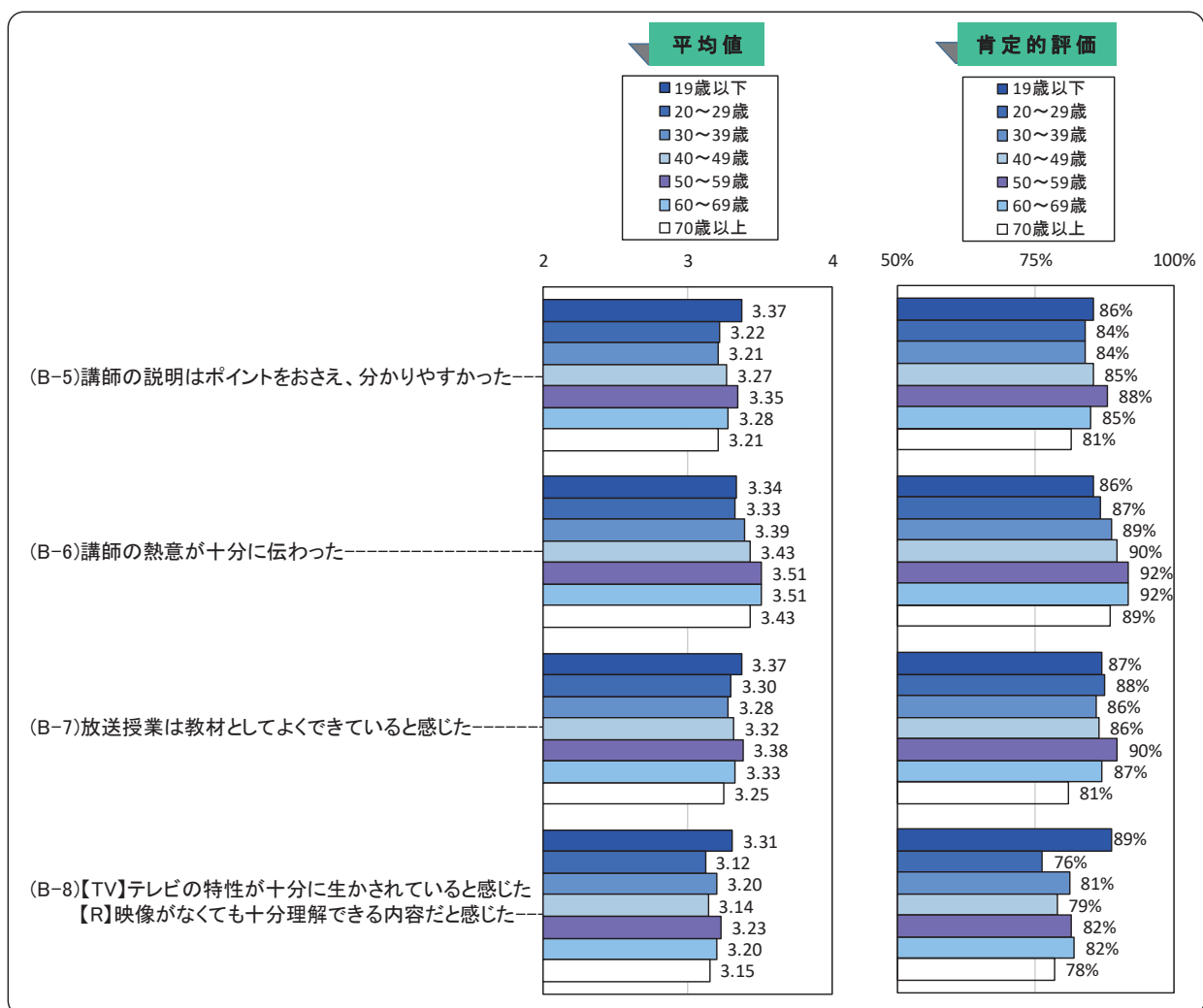


年齢階層別に放送授業の評価を見ると（図2-34）、(B-5)「講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった」と(B-7)「放送授業は教材としてよくできていると感じた」は50歳代（順に88%,90%）で高く、70歳以上（各81%）で低いという傾向が見られた。

(B-6)「講師の熱意が十分に伝わった」はどの年代も86%以上の支持率で、中でも50歳代と60歳代はそれぞれ92%と高い支持率であった。

(B-8)「【TV】テレビの特性が十分に活かされていると感じた／【R】映像がなくても十分理解できる内容だと感じた」は19歳以下が89%と高率で、20歳代が76%と、評価に大きな違いが見られた。

図2-34 【学部】年齢階層別の放送授業の評価



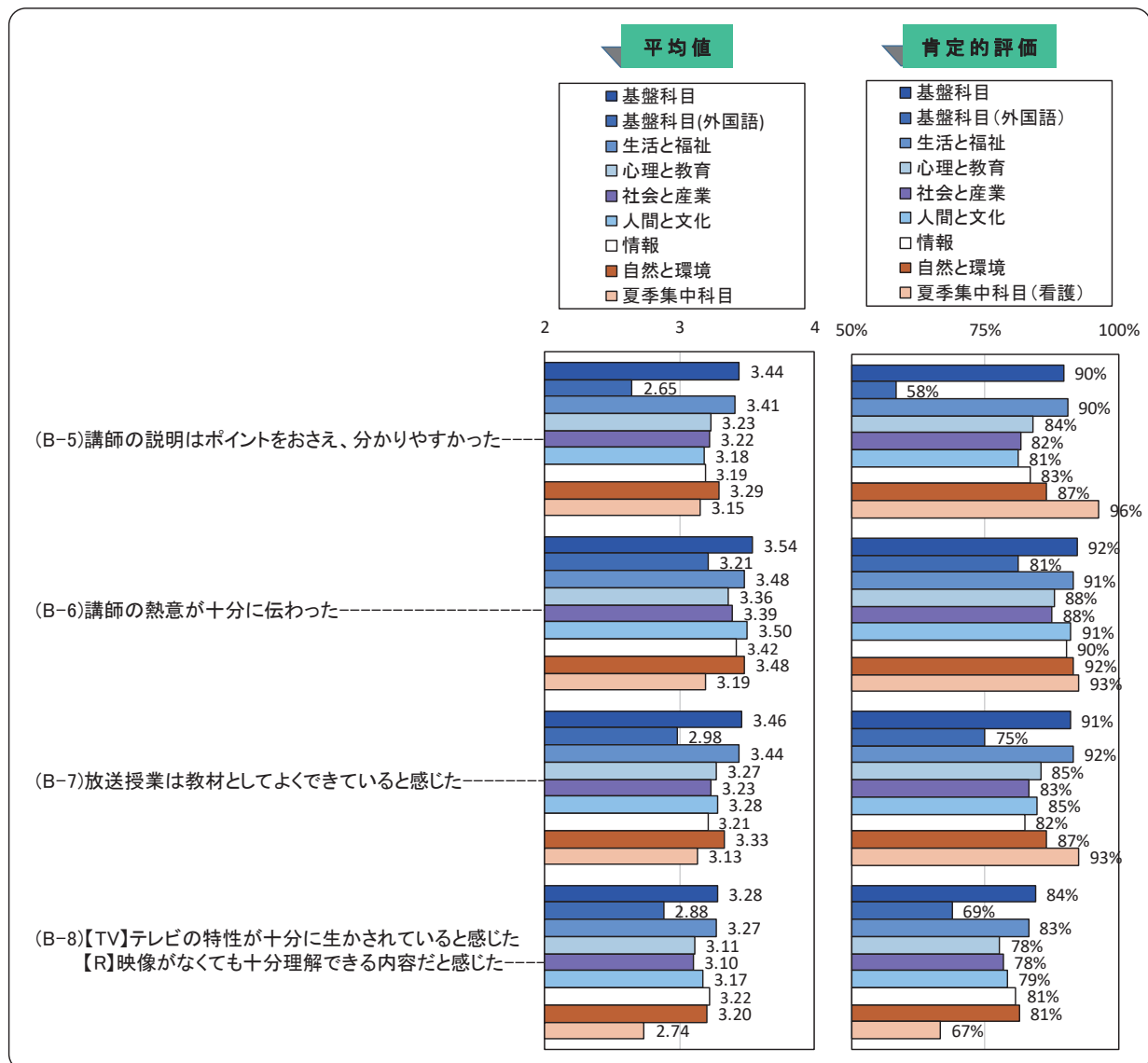
所属コース別に放送授業の評価を見ると（図2-35）、(B-5)「講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった」では「夏季集中科目（看護）」「基盤科目」が90%を越え、評価が高く、「基盤科目（外国語）」が58%と極端に評価が低かった。

(B-6)「講師の熱意が十分に伝わった」でも「基盤科目（外国語）」(81%)が最下位で、それ以外のコースは90%前後と一様に評価が高かった。

(B-7)「放送授業は教材としてよくできていると感じた」では、90%を超えたのは、評価の高い順に「夏季集中科目（看護）」「生活と福祉」「基盤科目」で、この項目でも「基盤科目（外国語）」が75%で最も低かった。

(B-8)「テレビの特性が十分に活かされていると感じた／（ラジオ）映像がなくても十分理解できる内容だと感じた」は「基盤科目」(84%)と「生活と福祉」(83%)が高く、「夏季集中科目（看護）」(67%)と「基盤科目（外国語）」(69%)で低かった。

図2-35 【学部】所属コース別の放送授業の評価

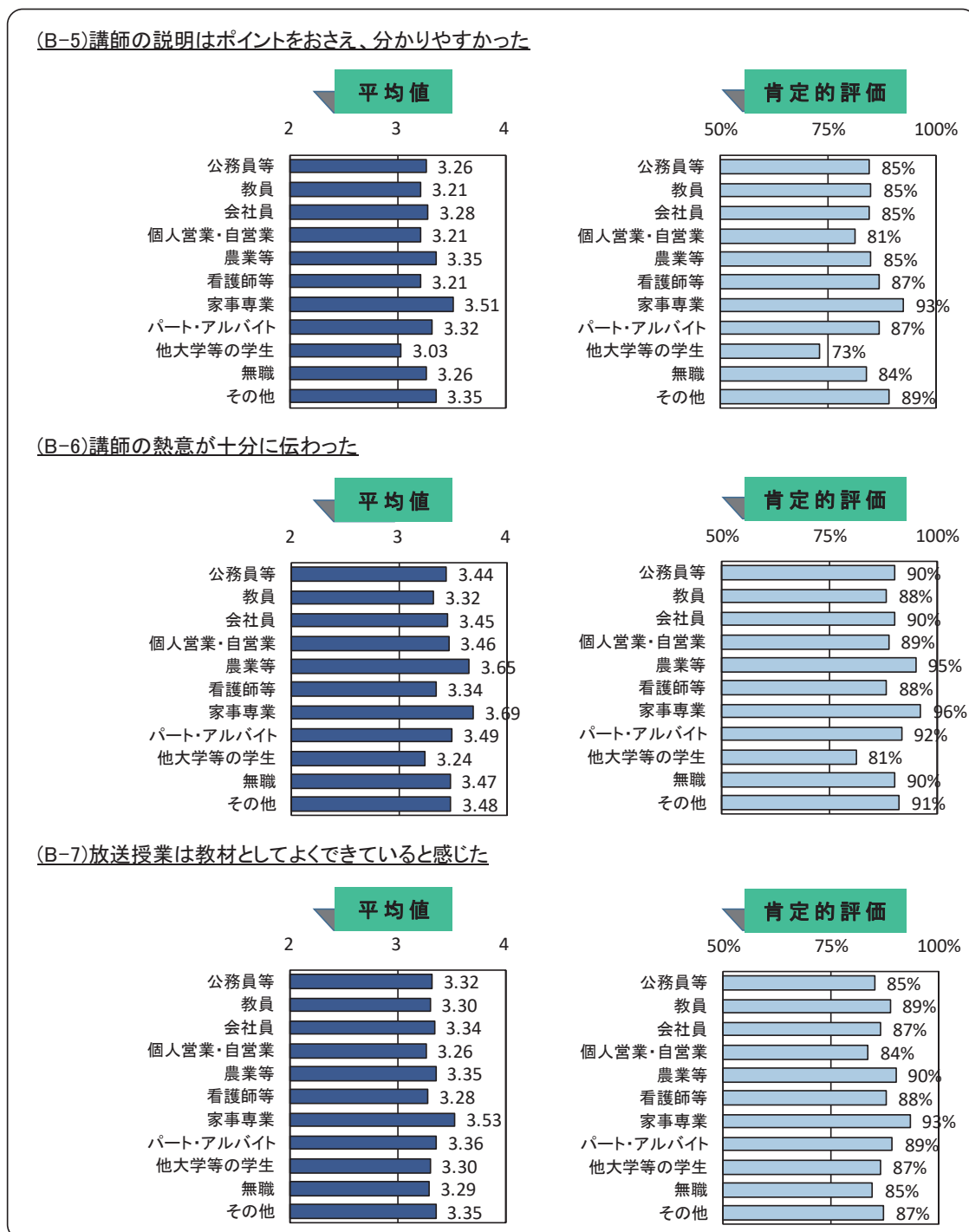


職業別に放送授業の評価を見ると（図2-36）、(B-5)「講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった」では、「家事専業」（93%）が唯一 90%越えで最も高く、「他大学等の学生」が73%と極端に評価が低かった。

(B-6)「講師の熱意が十分に伝わった」では、この項目でも「家事専業」（96%）が最も高く、「農業等」が95%で続き、「他大学等の学生」（81%）が最も低かった。

(B-7)「放送授業は教材としてよくできていると感じた」では90%を超えていたのは「家事専業」（93%）と「農業等」（90%）でそれ以外の職業は84%～89%の支持率であった。

図2-36 【学部】職業別の放送授業の評価





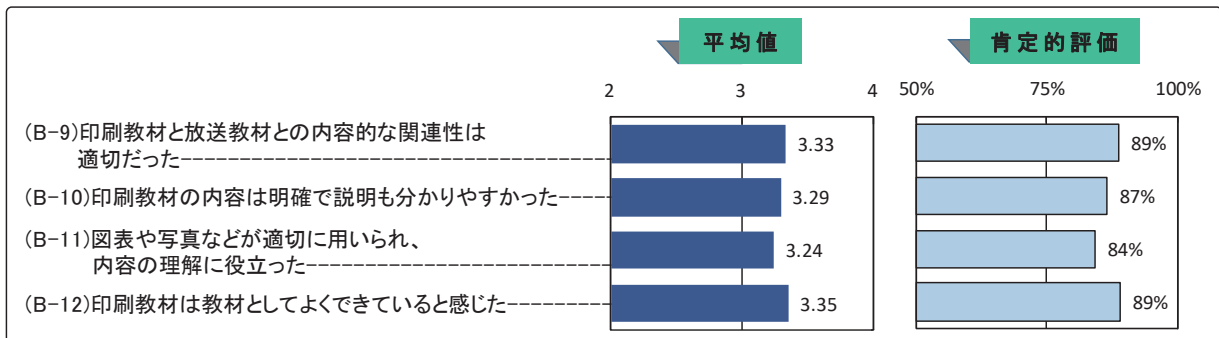
#### (4) 印刷教材

ここからは印刷教材について、評価項目ごとに見ていくことにする。

印刷教材の評価項目では（図2-37）、(B-9)「印刷教材と放送教材との内容的な関連性は適切だった」と (B-12)「印刷教材は教材としてよくできていると感じた」は 89%で高い支持率であった。

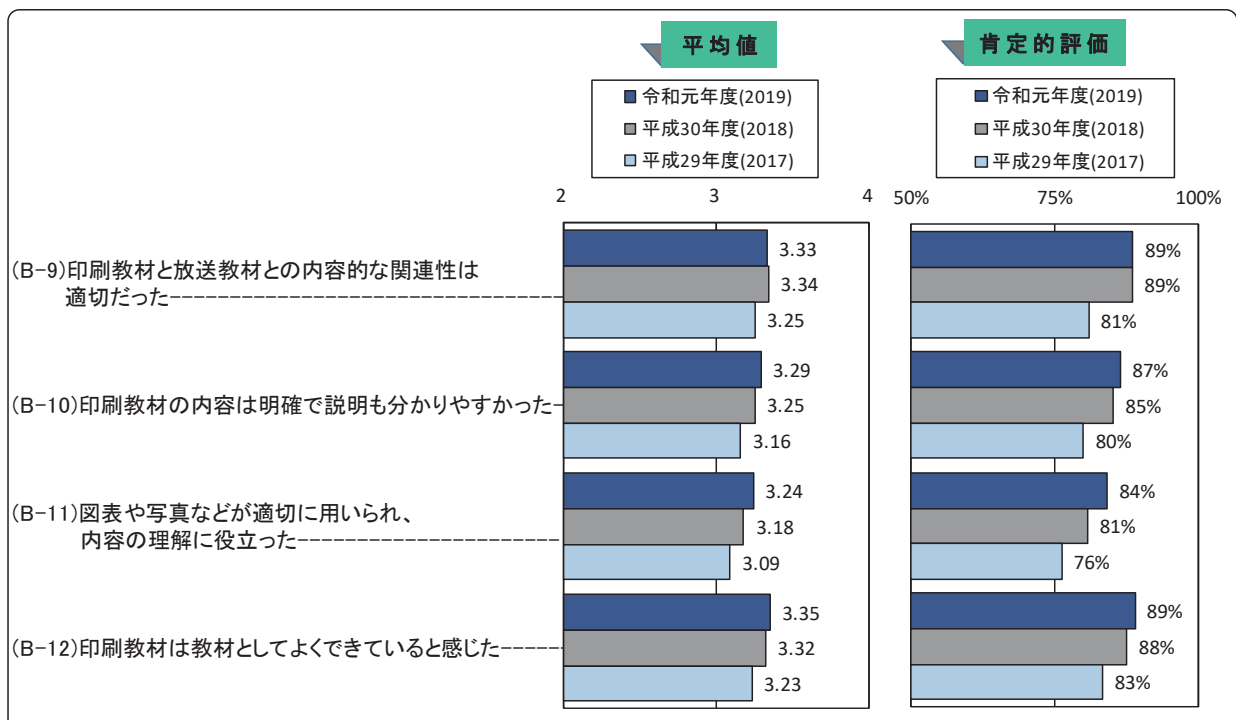
(B-11)「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った」は他の項目と比べると 84%と評価が低かった。

図2-37 【学部】 回答者全体の印刷教材の評価



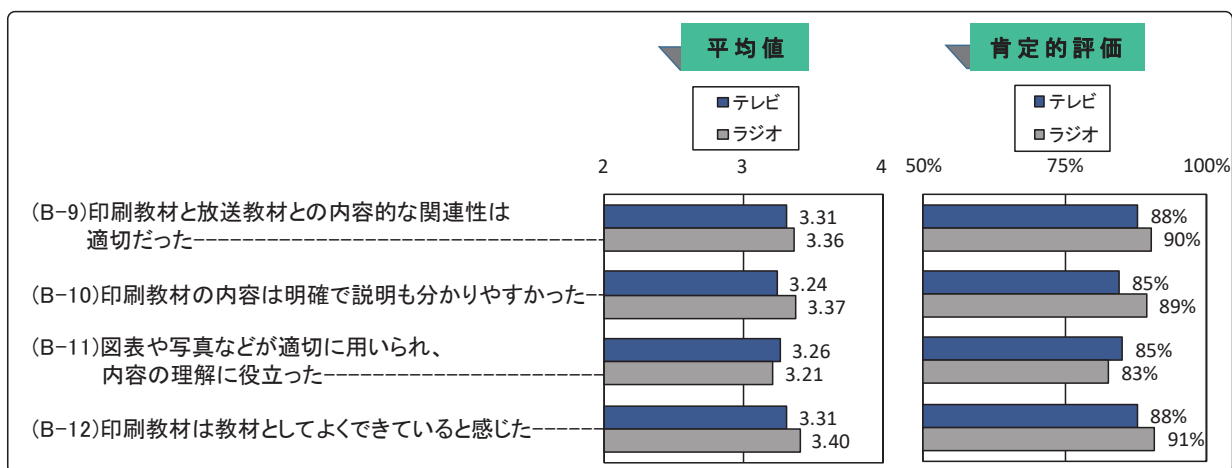
印刷教材の評価を時系列で見ると（図2-38）、(B-9)「印刷教材と放送教材との内容的な関連性は適切だった」と (B-12)「印刷教材は教材としてよくできていると感じた」は昨年度と変わらず高い支持率を維持しており、(B-10)「印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった」と (B-11)「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った」昨年度から更に評価を上げていた。

図2-38 【学部】 回答者全体の印刷教材の評価（時系列）



メディア別に印刷教材の評価を見ると（図2-39）、(B-9)「印刷教材と放送教材との内容的な関連性は適切だった」と(B-11)「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った」は両メディア間にほとんど差はなかったが、(B-10)「印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった」と(B-12)「印刷教材は教材としてよくできていると感じた」では差が見られ、ラジオ科目の支持率の方が多かった。

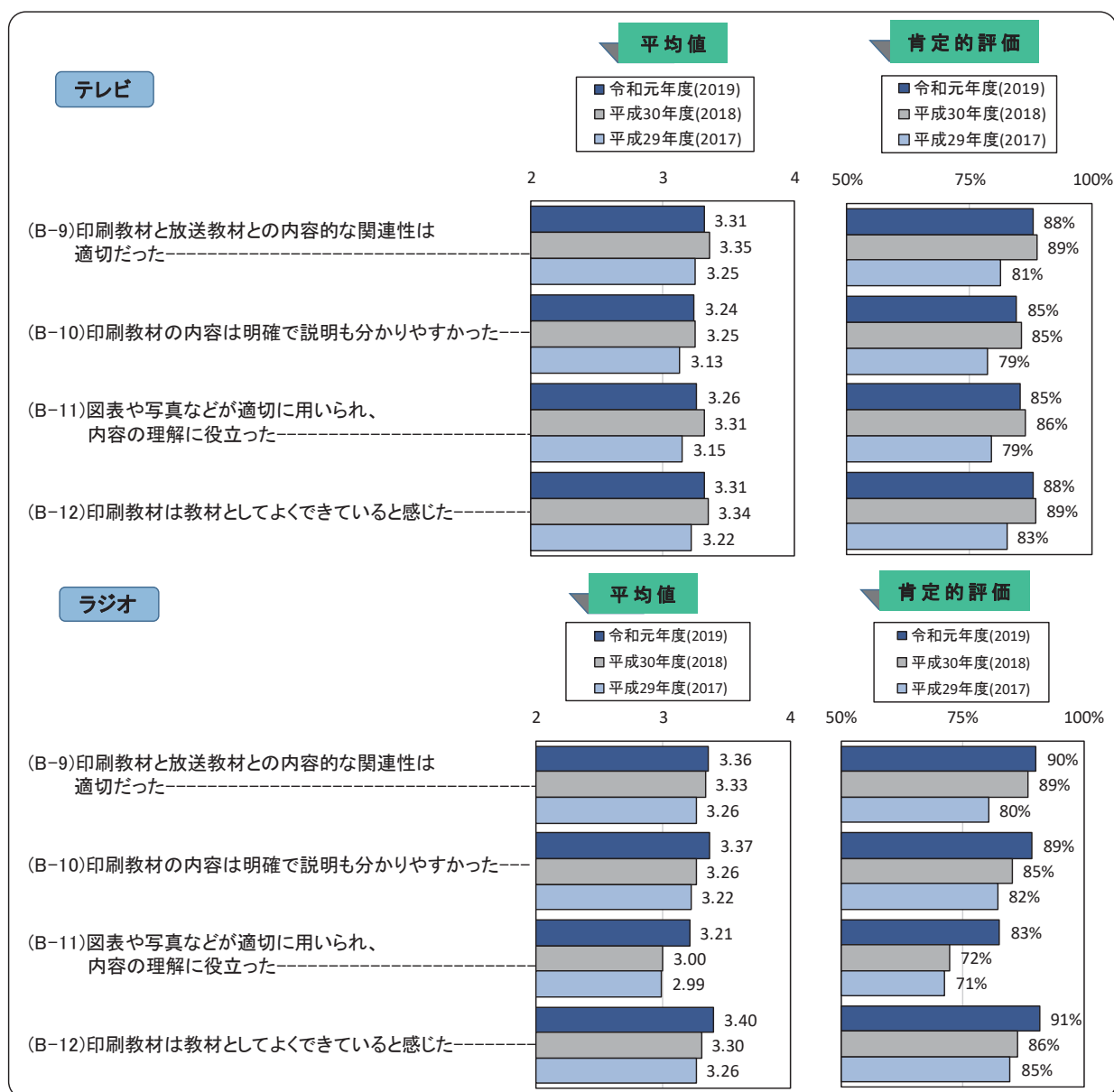
図2-39 【学部】メディア別の印刷教材の評価



メディア別の印刷教材の結果を時系列で見ると（図2-40）、テレビ科目では、本年度は、4項目全てで昨年度の一昨年度からの上昇分を維持しており、その支持率は昨年度と同じ水準を保っていた。

ラジオ科目について、本年度と昨年度を比べてみると(B-9)「印刷教材と放送教材との内容的な関連性は適切だった」は、同じ水準であったが、残りの3項目については本年度が増加傾向で、特に(B-11)「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った」は11ポイントの大幅増であった。

図2-40 【学部】メディア別の印刷教材の評価（時系列）



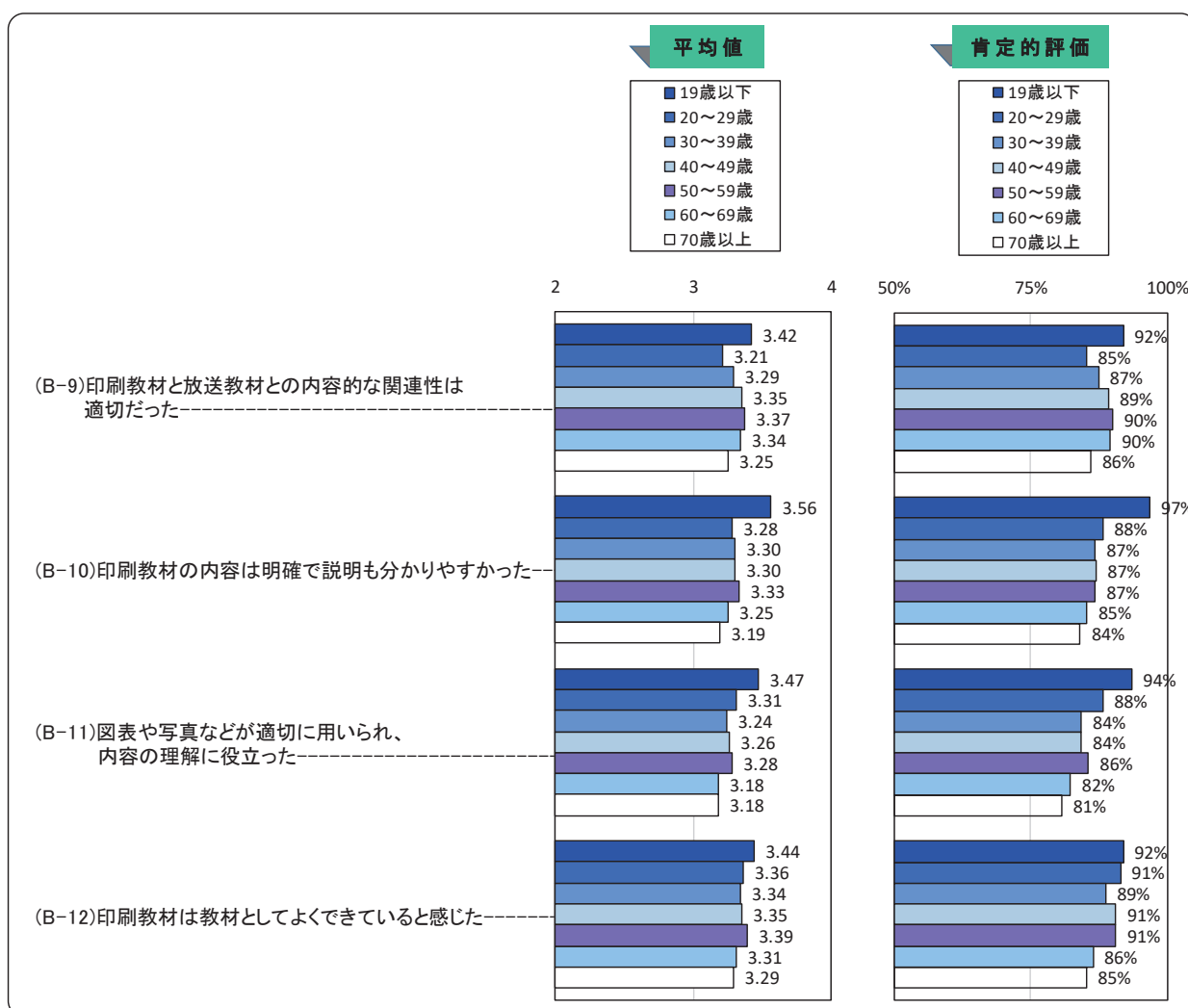
年齢階層別に印刷教材の評価を見ると（図2-41）、(B-9)「印刷教材と放送教材との内容的な関連性は適切だった」は各年代とも85%以上の支持率で、特に19歳以下は92%と高率であった。

(B-10)「印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった」は19歳以下が97%と最も高く、他の年代を大きく引き離していた。

(B-11)「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った」も同様に19歳以下の評価が94%と群を抜いており、60歳代と70歳以上は逆に80%にとどまり、他の年代との対比で評価が低かった。

(B-12)「印刷教材は教材としてよくできていると感じた」はいずれの年代も85%以上で、19歳以下～50歳代は90%前後に達していた。

図2-41 【学部】年齢階層別の印刷教材の評価



所属コース別に印刷教材の評価を見ると（図2-42）、(B-9)「印刷教材と放送教材との内容的な関連性は適切だった」では、「基盤科目」と「生活と福祉」が共に90%を超え上位で、「基盤科目（外国語）」は67%と、他の所属コースから大差を付けられていた。

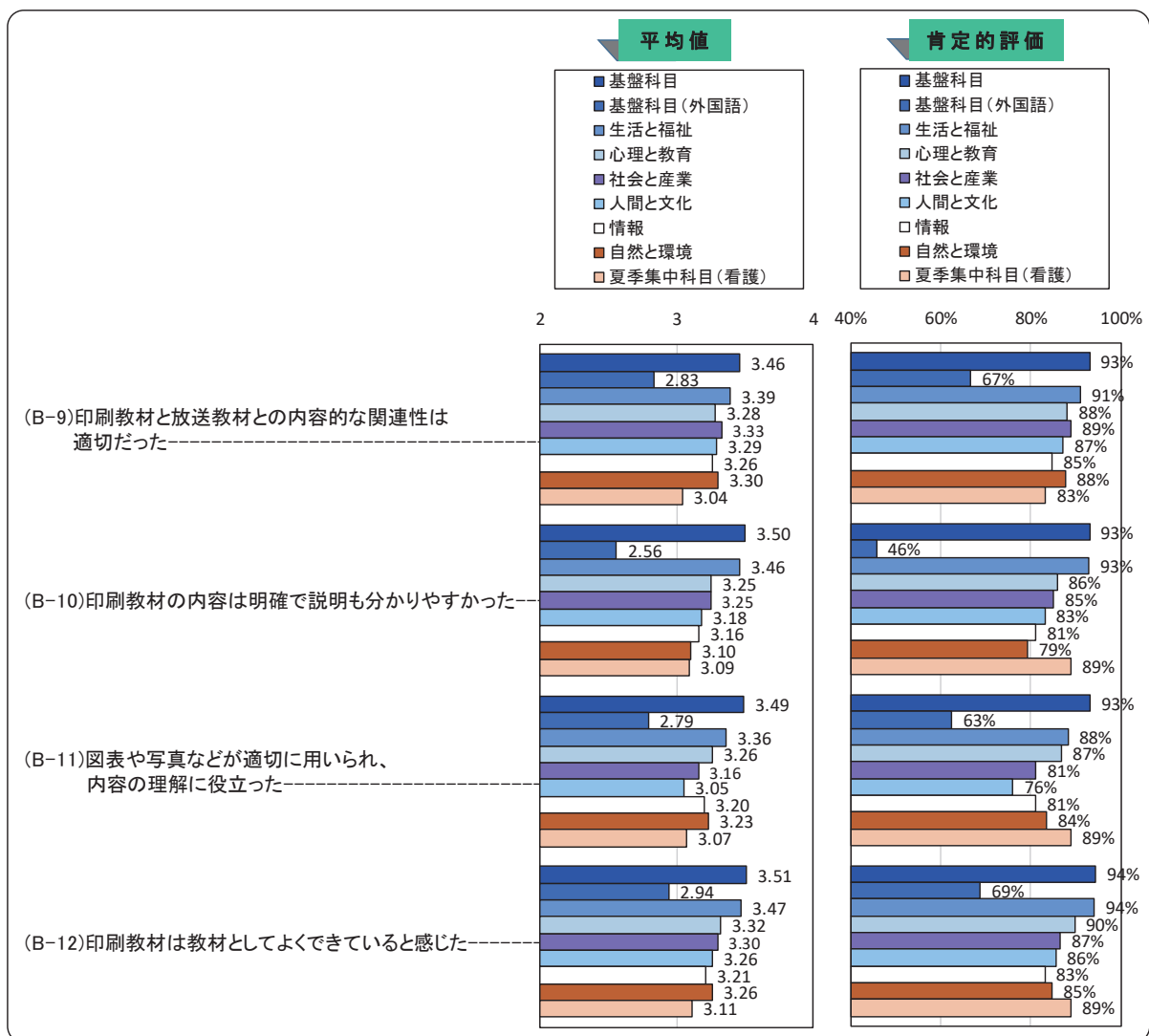
(B-10)「印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった」については、「基盤科目」と「生活と福祉」が共に93%で評価は高く、他に「夏季集中科目（看護）」(89%)も上位となっていた。

反対に「基盤科目（外国語）」の支持率は46%と5割に達せず、他の所属コースと大きな開きが見られた。

(B-12)「印刷教材は教材としてよくできていると感じた」は(B-10)と同じ様な傾向で、「基盤科目（外国語）」が69%と、他のコースとの開きは依然大きい。

(B-11)「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った」では、「基盤科目」と「夏季集中科目（看護）」が90%前後と1, 2位を占め、ここでも「基盤科目（外国語）」が63%で最も低い評価であった。

図2-42 【学部】所属コース別の印刷教材の評価

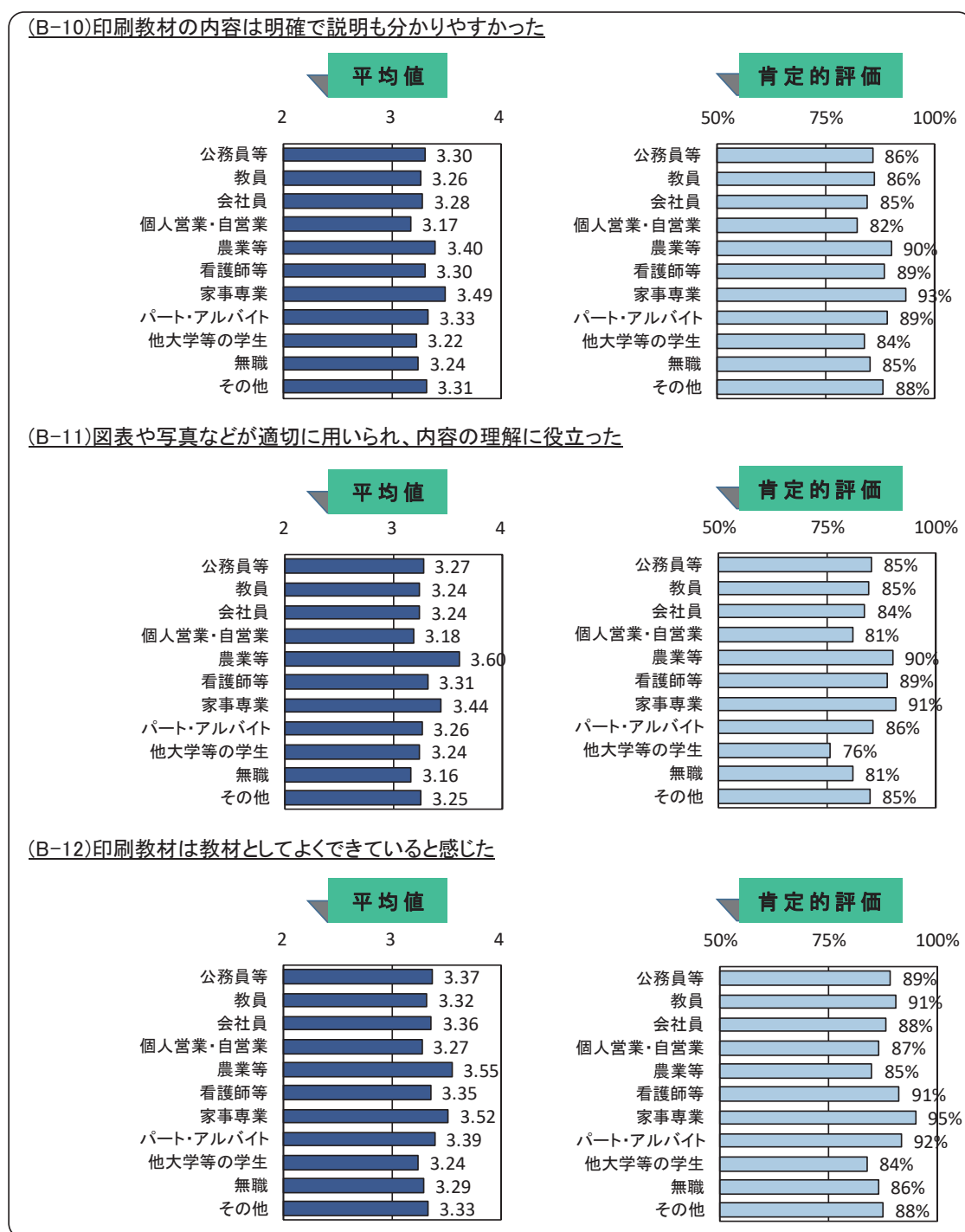


職業別の印刷教材の評価では（図2-43）、(B-10)「印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった」は「家事専業」（93%）が最も高く、最も低かったのは「個人営業・自営業」（82%）で、それ以外の職業は84%～90%に分散していた。

(B-11)「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った」では「家事専業」「農業等」「看護師等」が90%前後で上位に位置し、「他大学等の学生」は76%で他の職業と比べ、低い支持率であった。

(B-12)「印刷教材は教材としてよくできていると感じた」では、いずれの職業も84%以上で、特に「家事専業」の評価は95%と特に高かった。

図2-43 【学部】職業別の印刷教材の評価



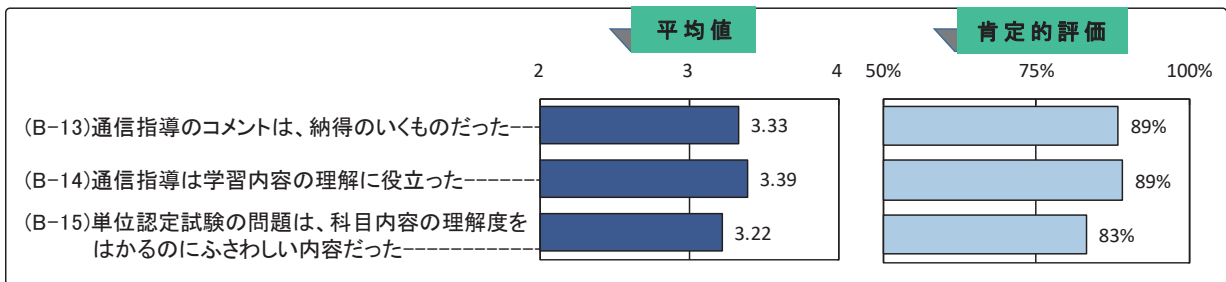
(5) 通信指導・単位認定試験

最後に通信指導・単位認定試験の評価について項目ごとに見ていくことにする。

通信指導については(図2-44)、(B-13)「通信指導のコメントは、納得のいくものだった」と(B-14)「通信指導は学習内容の理解に役立った」はそれぞれ89%に達していた。

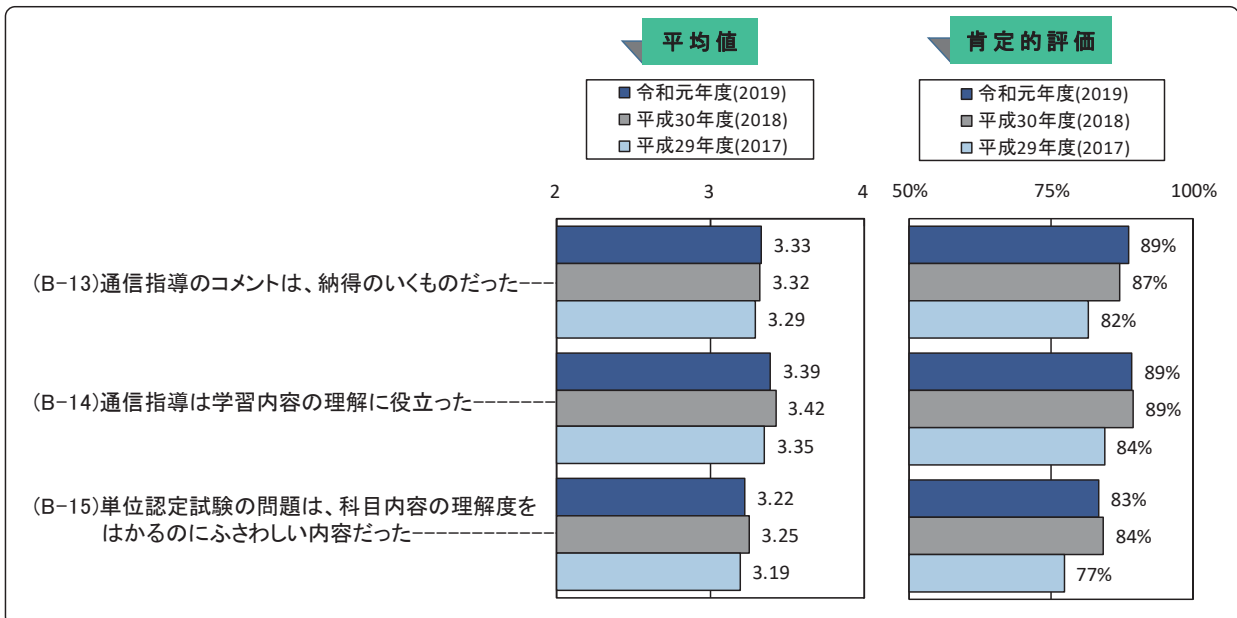
(B-15)「単位認定試験の問題は科目内容の理解度をはかるのにふさわしい内容だった」は83%と前2項目より評価は低いが、80%を超えている。

図2-44【学部】回答者全体の通信指導・単位認定試験の評価



通信指導・単位認定試験の評価を時系列で見ると(図2-45)、本年度は、下記の3項目全てで、昨年度の一昨年度からの上昇分を維持しており、支持率が昨年度とあまり変わらなかった。

図2-45【学部】回答者全体の通信指導・単位認定試験の評価(時系列)

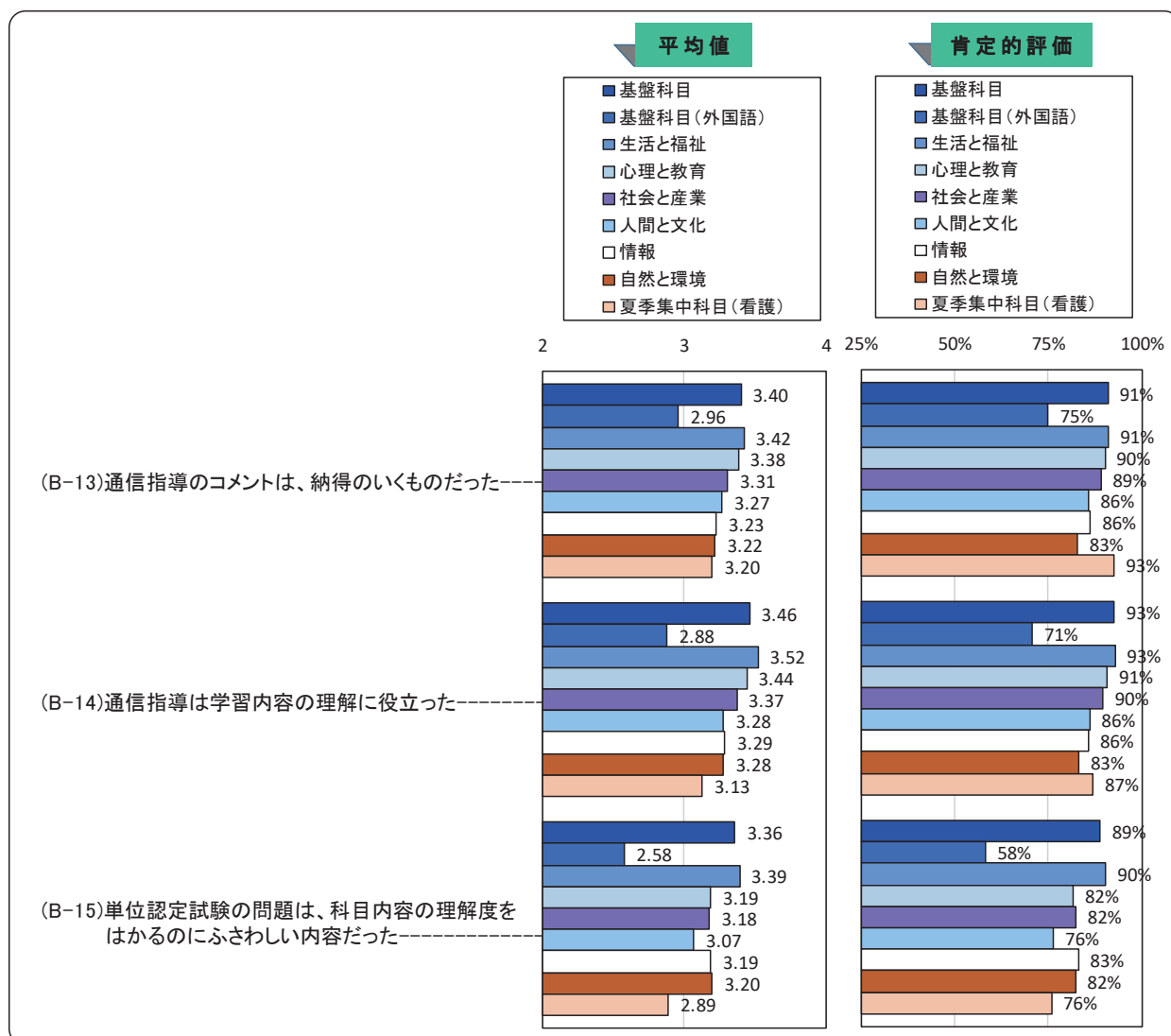


所属コース別に通信指導・単位認定試験の評価を見ると（図2-46）、(B-13)「通信指導のコメントは、納得のいくものだった」では、「夏季集中科目（看護）」が93%と最も高く、最も低かったのは「基盤科目（外国語）」75%で、その他の所属コースは83%～91%であった。

(B-14)「通信指導は学習内容の理解に役立った」では「基盤科目」と「生活と福祉」が共に93%で最上位、反対に「基盤科目（外国語）」が71%で最も低く、それ以外の各コースは83%～91%で分散していた。

(B-15)「単位認定試験の問題は、科目内容の理解度をはかるのにふさわしい内容だった」では、前述の傾向と同じで、「基盤科目」と「生活と福祉」が共に90%前後で最も高く、「基盤科目（外国語）」は58%で極端に低く、それ以外の各コースは76%～83%であった。

図2-46 【学部】所属コース別の通信指導・単位認定試験の評価





## Ⅱ－１－４．学部の重回帰分析

重回帰分析とは、数量データである目的変数と説明変数の関係を調べ、重回帰式（モデル式）を導き出す解析手法である。

今回の調査では全体の満足度 B-(20)「この科目の内容には全体として満足している」を目的変数とし、調査票 I.A. 授業への取り組み姿勢を除く B.(1)～(19)の各項目を説明変数として分析を試みる。

本調査の選択肢はカテゴリデータであるが、平均値の算出と同様『あてはまる→4』のように数値ポイント化することで数量として扱い、重回帰分析を適用する。

最終的には「全体の満足度」に寄与する項目を明らかにすると共に、その影響力の強さを知ることが目的としている。

項目名	変数	対象
目的変数	y	全体の満足度 B-(20)
説明変数	$x_1, x_2, \dots$	各項目 B(1)～(19):全 19 問(項目)
係数	$a_1, a_2, \dots$	重回帰分析によって得られる偏回帰係数

重回帰式  $y = a_0 + a_1x_1 + a_2x_2 + \dots + a_{19}x_{19}$  (説明変数が 19 個の場合)

サンプルサイズが十分でない場合や説明変数が多すぎると、全体の満足度を表すのに適した重回帰式を得られないことが経験的に分かっているため、重回帰分析の中で、説明変数間で強い相関関係がある場合、その一方の項目を自動的に削除する「変数減少法」を用いて解析を行うことにする。

使用するデータは質問項目 I.B の全設問を全て回答した 4,550 人のローデータを使用する。(昨年度からオンライン利用によるアンケート形式に替わり、今回も全員が全設問を回答していた。)

### ■分析精度

自由度修正済み決定係数とは、得られた重回帰式が目的変数に対してどれだけ説明力(寄与度)があるかを示す指標で、「1」に近いほど良い結果で、この分析では 0.730 となった。

ダーヴィンワトソン比とは、残差同士の系列相関(自己相関)を示す指標で 0～4 までの値を示し、1 以下や 3 以上だと残差(誤差)に規則性があり、解析自体あるいはデータ自体に問題があり、「2」近辺の値ならよいとされ、その値は 2.002 となった。

#### ◆分析精度

決定係数	0.731
自由度修正済み決定係数	0.730
ダーヴィンワトソン比	2.002
残差の標準偏差	0.401

今回の重回帰分析では分散分析表が示すとおり、有意水準 0.01 の判定で、かなりの精度で式の当てはまりの良さが確認できた。

(有意水準とは危険率と同義で 0.01 の場合、判定を誤る確率が 1%ある事を表している。)

◆分散分析表

変動	偏差平方和	自由度	不偏分散	分散比	p値	判定
全体変動	2710.122	4549				
回帰による変動	1981.993	18	110.1107	685.1972	0.000	[**]
回帰からの残差変動	728.1288	4531	0.160699			

凡例	有意水準	凡例	有意水準
[**]	0.01	[*]	0.05

下表にある標準偏回帰係数とは説明変数の相互比較を可能にするためのもので、各説明変数の目的変数に対する影響力の度合いがこれで分かる。

標準偏回帰係数（全体の満足度に対する寄与度）が最も高かったのは B-19 で 0.241、次いで B-17 の 0.232、他に B-18 (0.164)、B-5 (0.093) と続いた。

説明変数の影響力の度合いを比較するために、表中の標準偏回帰係数の中で絶対値が最も小さい B-6 (0.027) とそれ以外の標準偏回帰係数が B-6 の何倍になるか算出してみた。(表中の右端の数値) その結果、高い順に B-19:8.9 倍、B-17:8.6 倍、B-18:6.1 倍、B-5:3.4 倍となった。

「全体の満足度」(肯定的評価 88%) を上げるためには、上位 2 項目の「B-19 この科目の内容を全体としてよく理解できた(理解度)」と「B-17 学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった」の肯定的評価を上げる事が最も効果的であると考えられる。

この 2 項目の肯定的評価について見てみると、B-19:85%、B-17:89%で、それぞれの肯定的評価を上げる余地は残っていると思われる。

目的変数	標準偏回帰係数	説明変数	判定	B-6との対比
B-20.全体の満足度	0.241	B-19 この科目の内容を全体としてよく理解できた(理解度)	[**]	8.9
	0.232	B-17 学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった	[**]	8.6
	0.164	B-18 新しい知識が身につく視野が広がった	[**]	6.1
	0.093	B-5 講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった	[**]	3.4
	0.067	B-15 単位認定試験の問題は、科目内容の理解度をはかるのにふさわしい内容だった	[**]	2.5
	0.066	B-12 印刷教材は教材としてよくできていると感じた	[**]	2.4
	0.065	B-7 放送授業は教材としてよくできていると感じた	[**]	2.4
	0.063	B-16 授業科目案内はこの科目の内容を知る上で役に立った	[**]	2.3
	0.048	B-3 印刷教材の難易度は適切だった	[**]	1.8
	0.032	B-2 放送授業の内容は適切な分量であった	[*]	1.2
	0.030	B-10 印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった	[*]	1.1
	-0.027	B-6 講師の熱意が十分に伝わった	[*]	1.0
	定数項	[**]		

※説明変数の中で有意水準が0.05以下の項目だけを掲載した

## Ⅱ－２．大学院の分析結果

### Ⅱ－２－１．項目平均から見た全体的傾向

評価項目の内容ごとに回答者全体の平均値と肯定的評価を A-1～A-3 等の複数の項目の平均を算出しグラフ化（図 2－4 7）した。

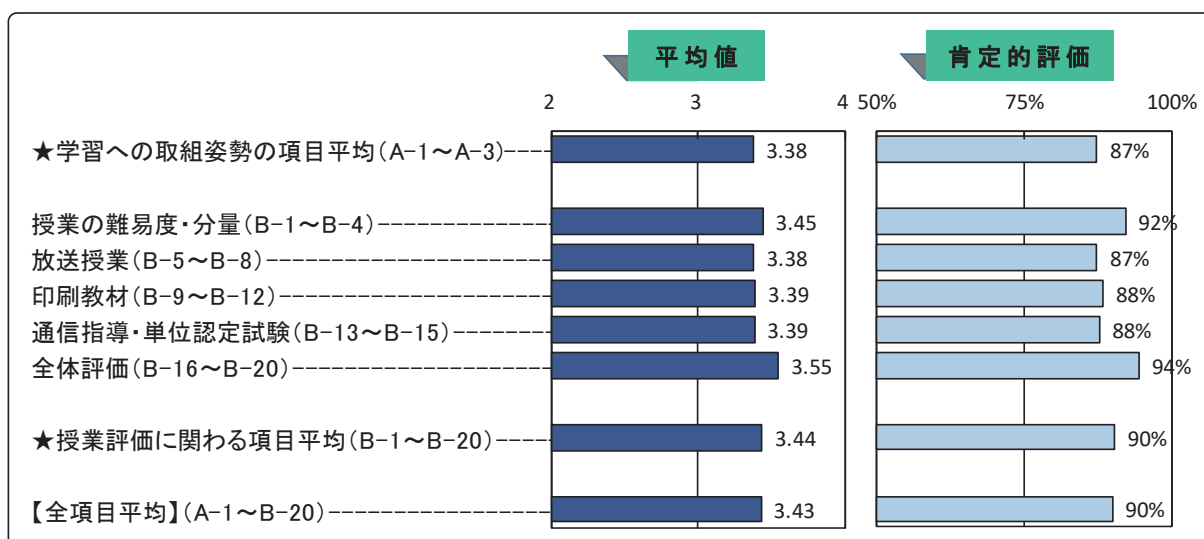
学部同様、肯定的な評価（「あてはまる」＋「ややあてはまる」）の方が（例えば回答者の 80%）イメージしやすく、下図左側の平均値と肯定的評価に齟齬が生じた場合、どちらを採用するか合理的に判断出来ないため、コメントについては肯定的評価を用いて、平均値は参考値として扱っていききたい。

また、新規開設科目の年度比較は、比率の差の検定結果から、大学院は、学部ほど回答者数が多くないため（2019 年度 350 人、2018 年度 76 人 2017 年度 705 人）、本年度と昨年度の比較では概ね 8 ポイントの差で有意となったため、8 ポイント以上で「差がある」事にする。

項目平均による全体的傾向をみると（図 2－4 7）、『学習への取組み姿勢（A-1～A-3）』は 87%、『授業評価に関わる項目平均（B-1～B-20）』は 90%であった。

授業評価に関わる項目（B-1～B-20）で、90%を超えていたのは『授業の難易度・分量』（92%）と『全体評価』（94%）であった。

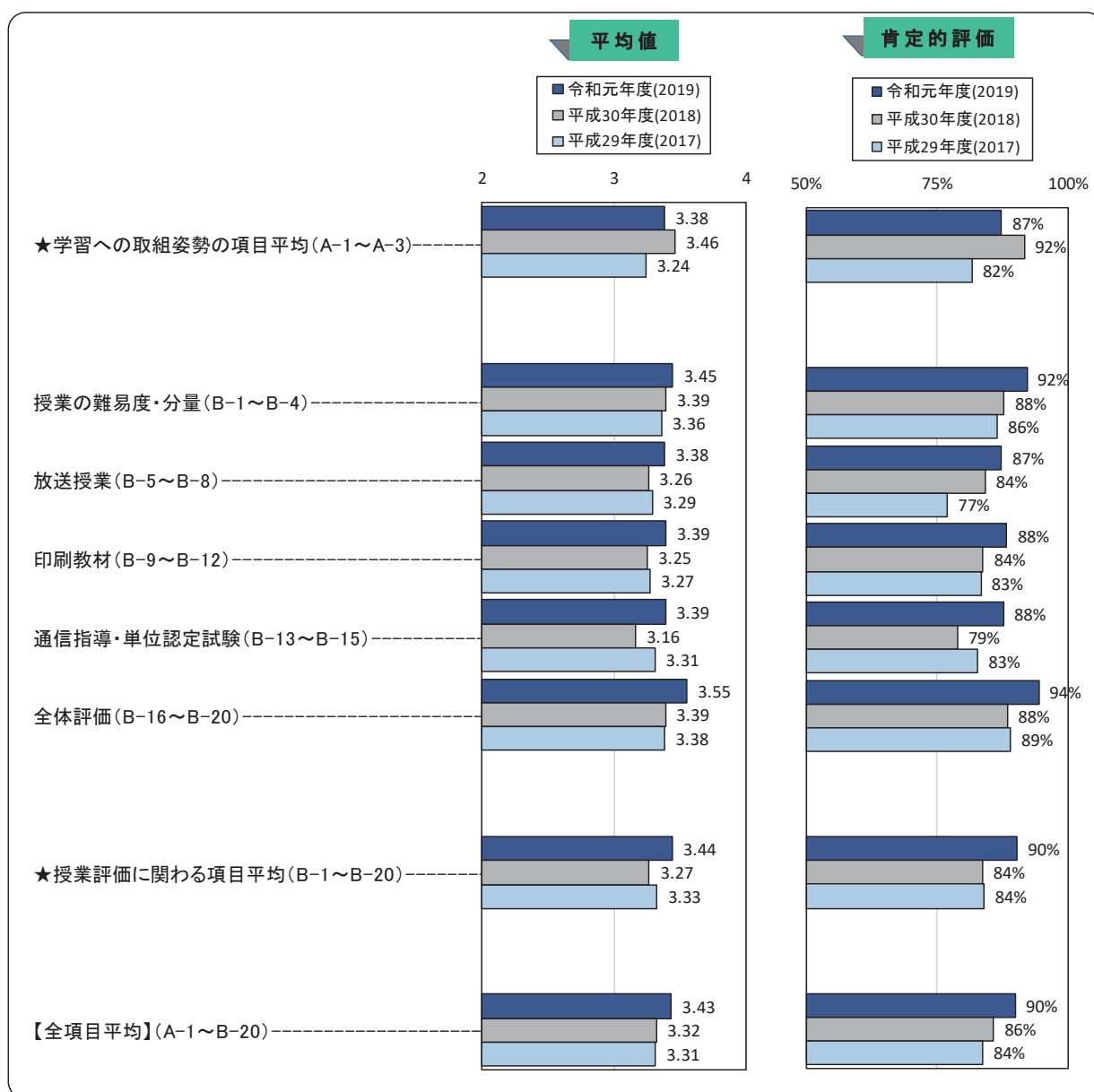
図 2－4 7 【大学院】項目平均による全体的傾向



項目平均を科目の開設年度で比較して見ると（図2-48）、本年度の『学習への取組姿勢』（87%）は、昨年度に及ばず5ポイント下回っていた。

『授業評価に関わる項目』については、本年度は87~94%で昨年度より高い評価となっており、『通信指導・単位認定試験』は昨年度より9ポイント増の88%、『全体評価』は6ポイント増で94%に達していた。

図2-48 【大学院】項目平均による全体的傾向（開設年度比較）



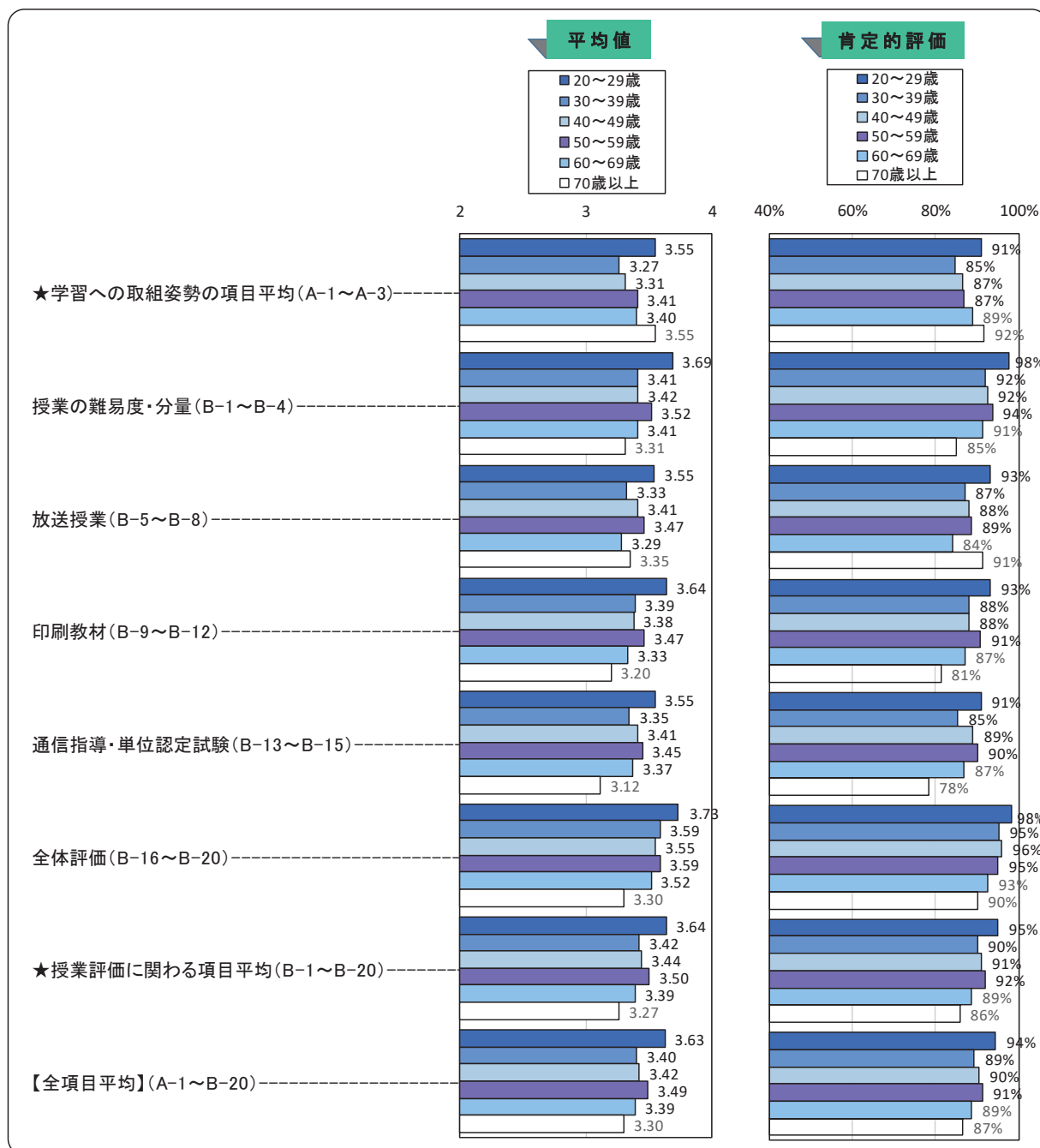
年齢階層別では(図2-49)『学習への取組み姿勢の項目平均』は、20歳代と70歳以上が90%台で、熱心に取り組んだ人が9割を超えていた。

また、3項目目の『放送授業』でも同様の傾向で、20歳代と70歳以上の評価が高かった。

授業評価に関わる残りの3項目では、20歳代の評価が最も高く、70歳以上の評価が最も低かった。

※「20～29歳」は回答者数が11人と少人数である事に留意されたい。

図2-49 【大学院】項目平均による年齢階層別全体的傾向



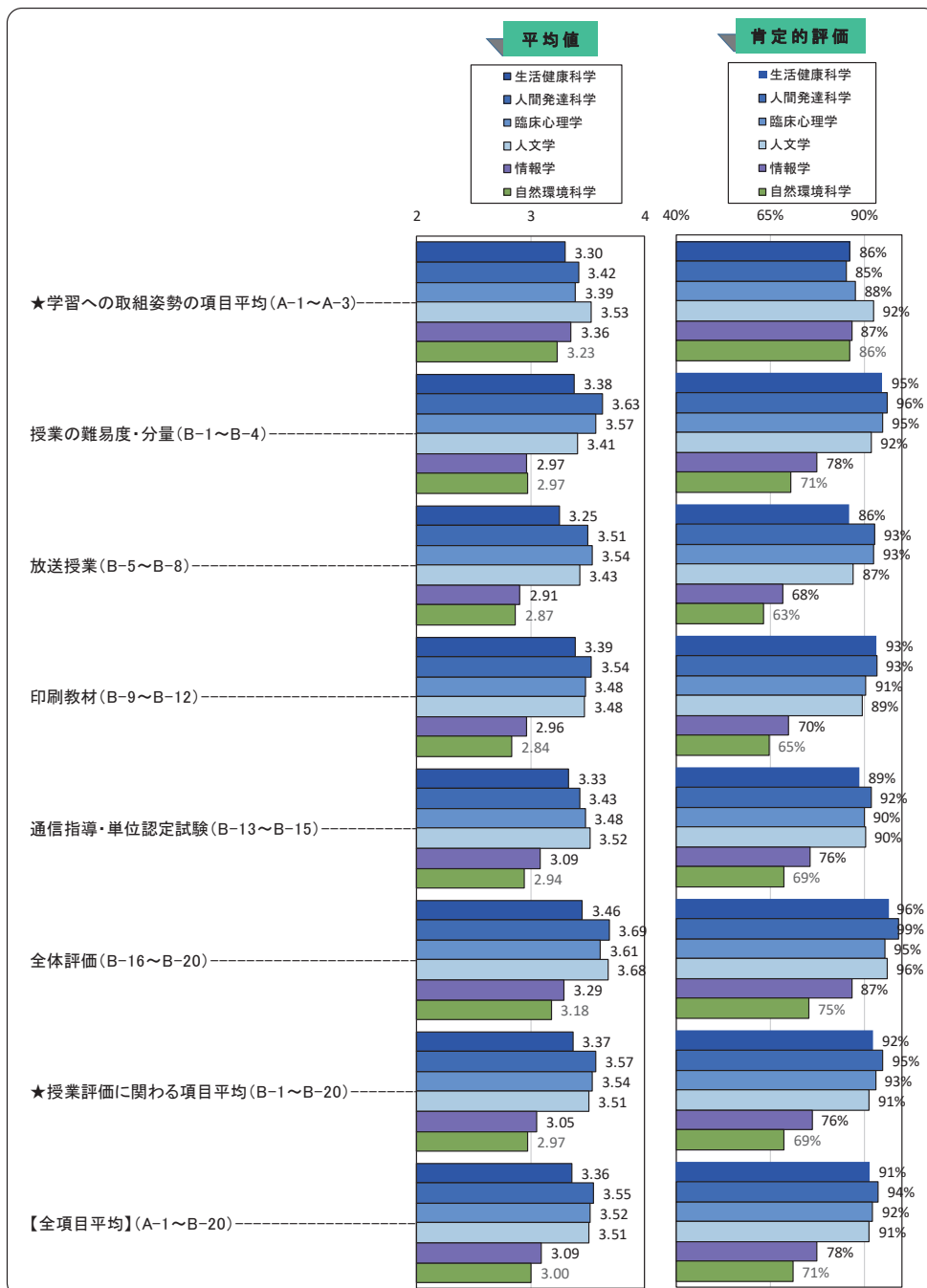
所属プログラム別に項目平均を見ると（図2-50）、『学習への取組姿勢の項目平均』はいずれのプログラムも85%以上で、特に「人文学」は92%に達し、授業に対する熱心度が最も高かった。

次の項目の『授業の難易度・分量』～『通信指導・単位認定試験』では、「情報学」と「自然環境科学」が60～70%台と極端に低く、それ以外のプログラムはほぼ90%前後と高率であった。

『全体評価』でも前述の傾向が見られ、「情報学」と「自然環境科学」が順に87%、75%だったが、それ以外のプログラムは95%以上と高い評価であった。

※「自然環境科学」は回答者数が17人と少人数である事に留意されたい。

図2-50 【大学院】項目平均による所属プログラム別全体的傾向



職業別では（図2-51）、「家事専業」と「他大学等の学生」は回答者数がそれぞれ11人と2人で、共に少人数なので「家事専業」については基本的に割愛し、「他大学等の学生」については今後言及しないことにする。

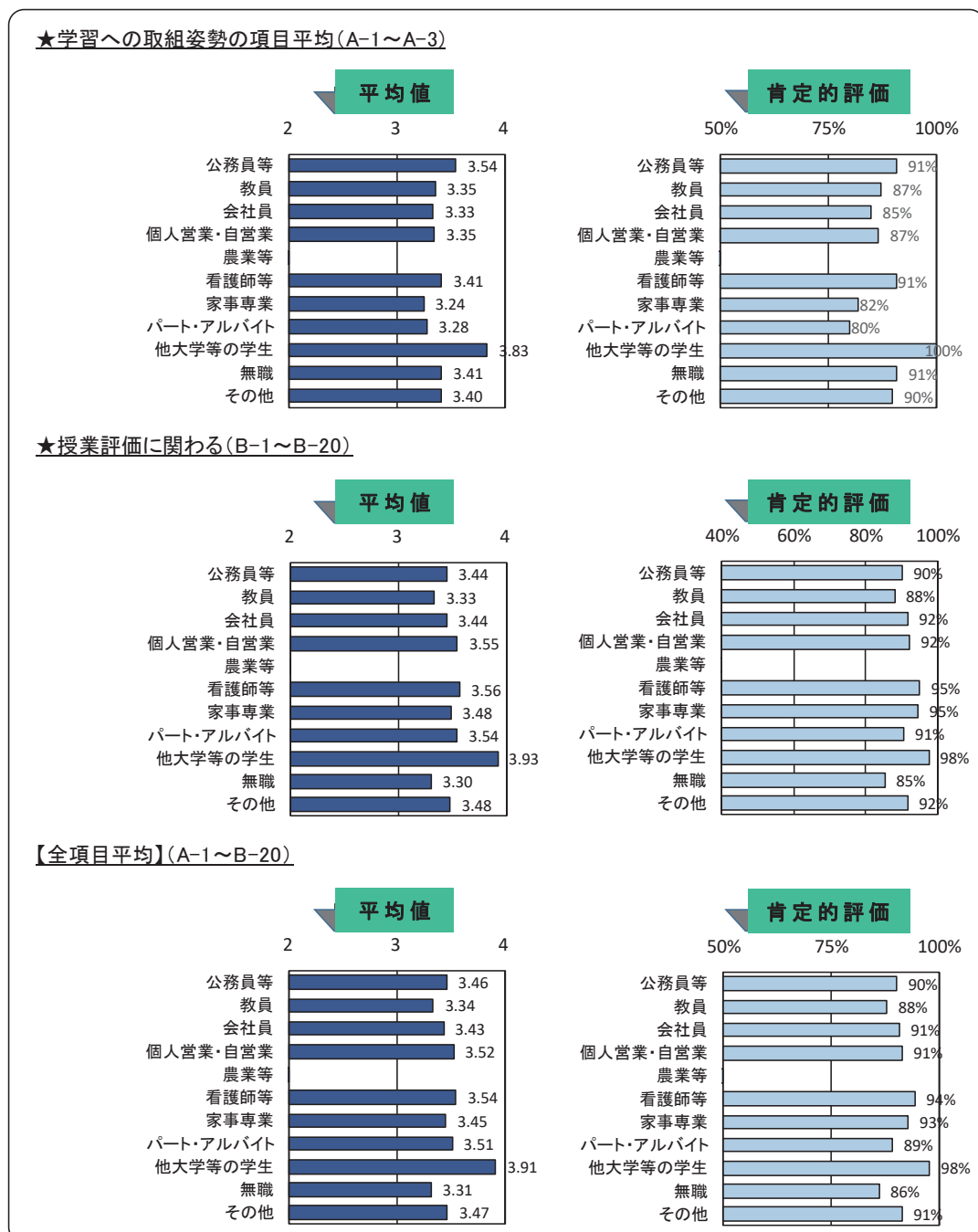
『学習への取組み姿勢の項目平均』ではいずれも80%以上となり、その中で90%以上となったのは「公務員等」「看護師等」「無職」「その他」で上位を占めていた。

『授業評価に関わる項目平均』では「教員」（88%）と「無職」（85%）以外は91%前後に達していた。

『全項目平均』は前述と同様の傾向が見られた。

※職業で農業等の人はいなかった。

図2-51 【大学院】項目平均による職業別全体的傾向



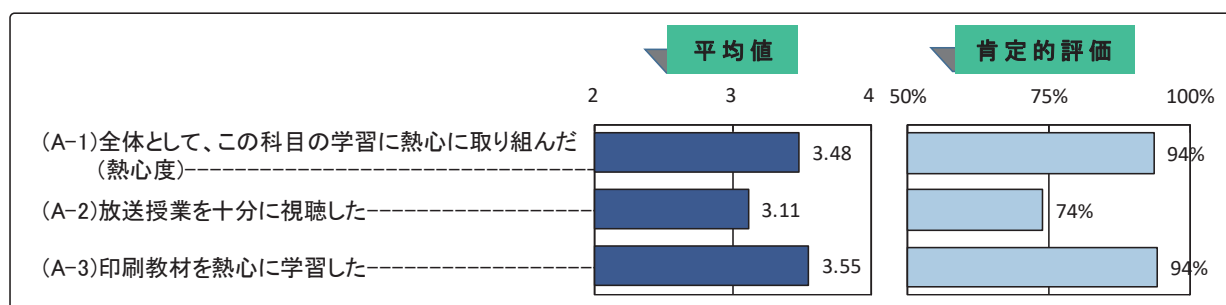
## Ⅱ-2-2. 学習への取組み姿勢

ここからはそれぞれ評価項目ごとに調査結果を見ていく。

『学習への取組み姿勢』（図2-52）では、(A-1)「全体としてこの科目の学習に熱心に取り組んだ（熱心度）」と (A-3)「印刷教材を熱心に学習した」は94%に達していた。

一方、(A-2)「放送授業を十分に視聴した」は74%で前述の2項目に比べると極端に低かった。

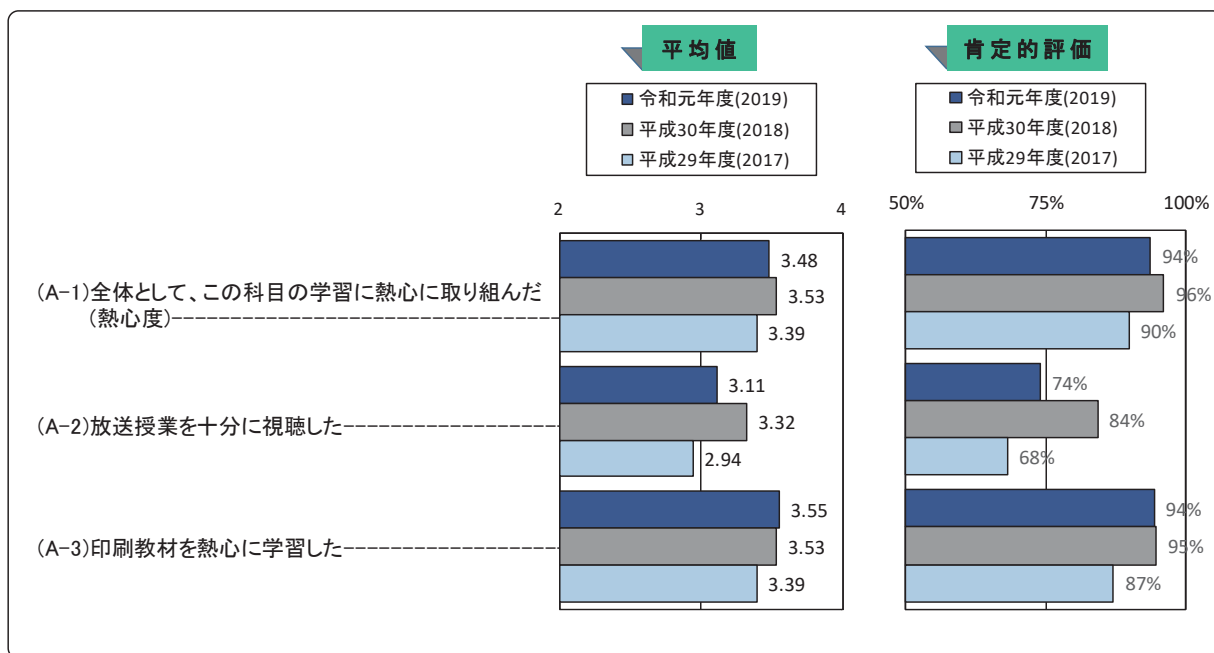
図2-52 【大学院】回答者全体の取組姿勢





『学習への取組み姿勢』を時系列で見ると（図2-53）、(A-1)「全体としてこの科目の学習に熱心に取り組んだ（熱心度）」と(A-3)「印刷教材を熱心に学習した」については、本年度は、昨年度の一昨年度からの上昇分を維持していたが、(A-2)「放送授業を十分に視聴した」が10ポイント減と極端な落ち込みが見られた。

図2-53 【大学院】回答者全体の取組姿勢（時系列）

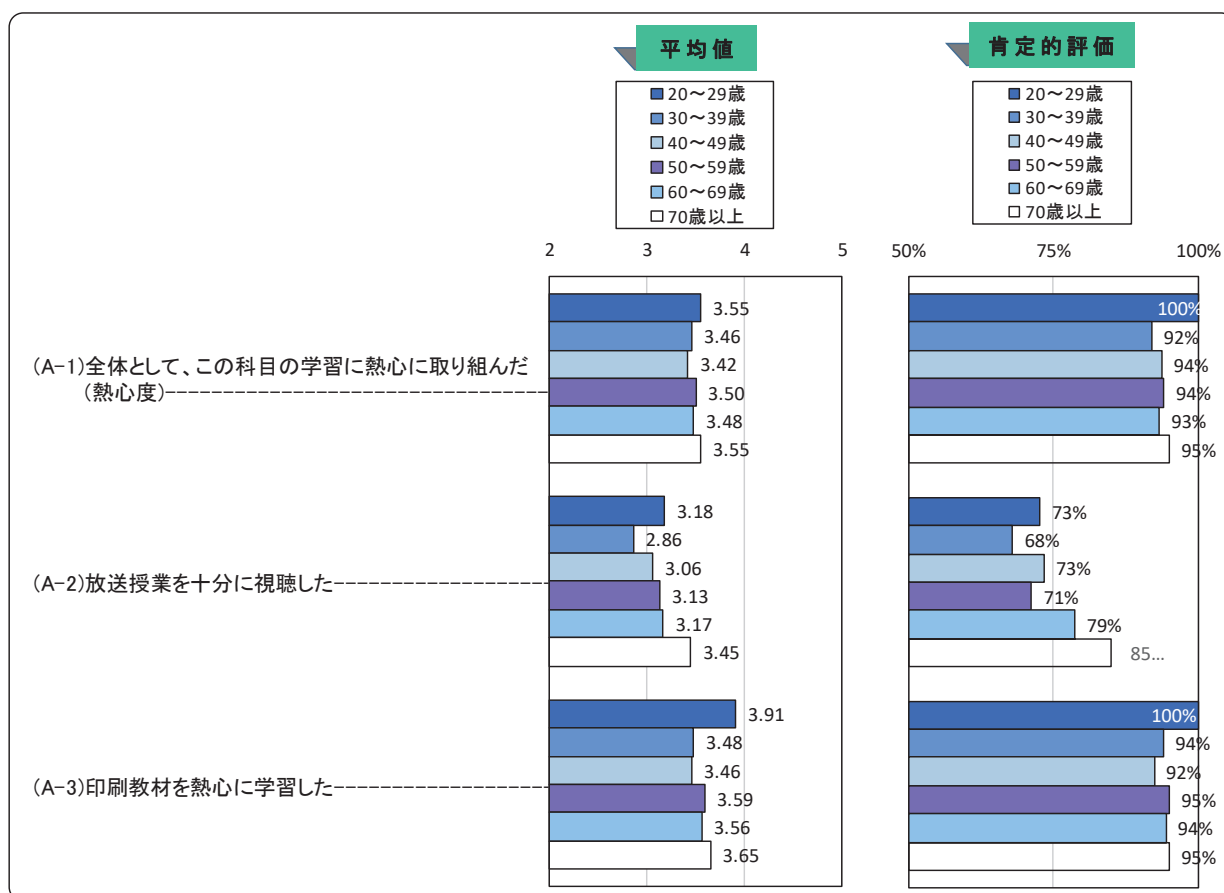


年齢階層別では（図2-54）、(A-1)「全体として、この科目の学習に熱心に取り組んだ（熱心度）」と(A-3)「印刷教材を熱心に学習した」は、92%～95%と90%を超え、年代間に大きな差は見られなかった。

(A-2)「放送授業を十分に視聴した」は30歳代～70歳以上で漸増傾向が見られ、70歳以上で85%に達していた。

※「20～29歳」は回答者数が11人と少人数で極端な値を取っているためコメントを割愛し、これ以降のページも同様とする。

図2-54 【大学院】年齢階層別の取組姿勢

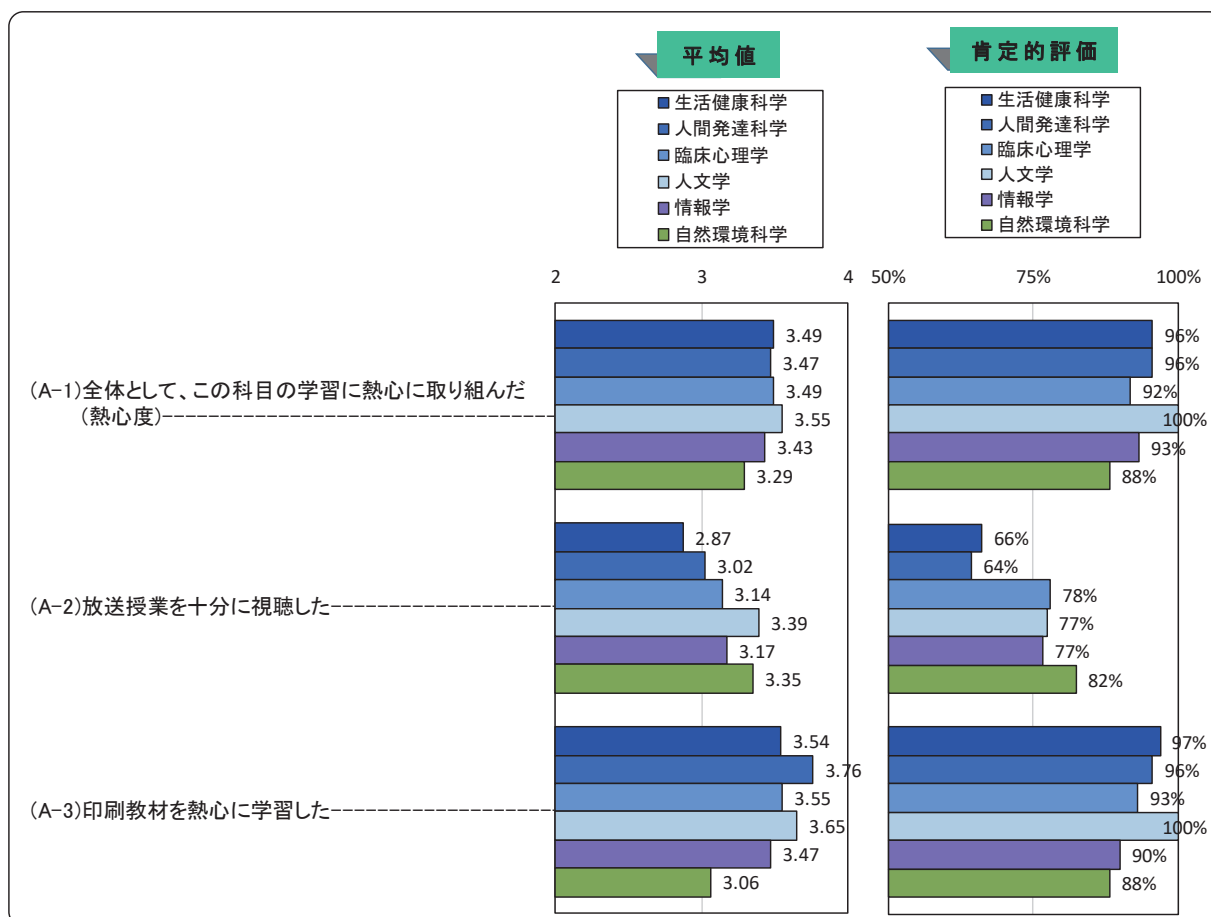


所属プログラム別では（図2-55）、(A-1)「全体としてこの科目の学習に熱心に取り組んだ（熱心度）」は、「自然環境科学」が最も低く88%で、それ以外は90%を上回っており、中でも「人文学」は100%に達していた。

(A-3)「印刷教材を熱心に学習した」も前述の傾向となっていた。

(A-2)「放送授業を十分に視聴した」については、「生活健康科学」と「人間発達科学」が60%台と下位を占め、「自然環境科学」が82%と最上位であった。

図2-55 【大学院】所属プログラム別の取組姿勢



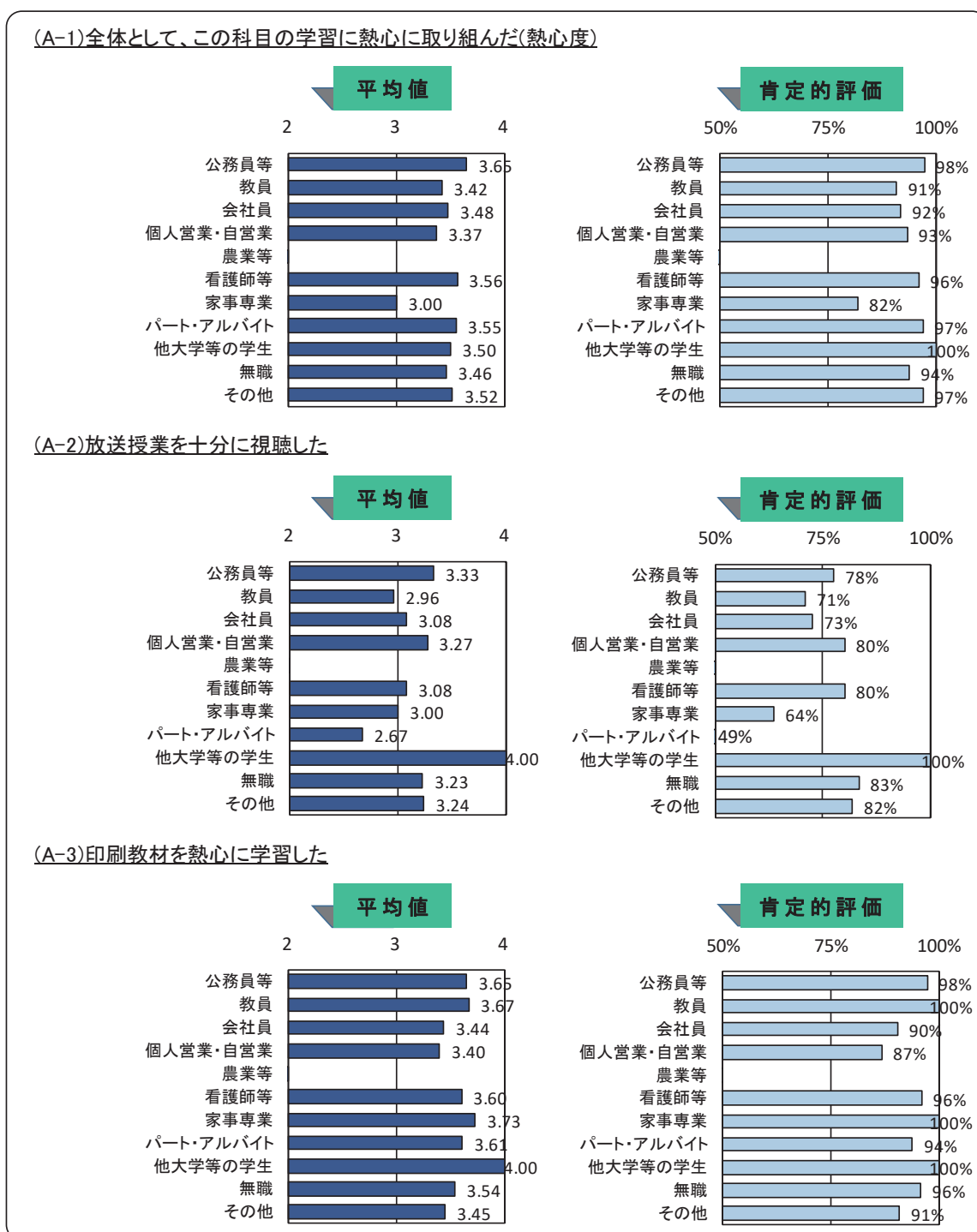
職業別では（図2-56）、(A-1)「全体としてこの科目の学習に熱心に取り組んだ（熱心度）」は、回答者が少数の「家事専業」と「他大学等の学生」を除くといずれも90%を超えており、「公務員等」が98%で最も高かった。

(A-2)「放送授業を十分に視聴した」は、「パート・アルバイト」が49%と極端に低く、「教員」「会社員」も70%前半で下位を占め、それ以外の職業は80%前後であった。

(A-3)「印刷教材を熱心に学習した」は、「教員」が100%で最も高く、「個人営業・自営業」は87%と最も低かった。

それ以外の職業は90%以上で分散していた。

図2-56 【大学院】職業別の取組姿勢



単位認定のための学習方法（図2-57）では、属性別の各層内で回答者数が17人以下と少ない20～29歳、「自然環境科学」「家事専業」と「他大学等の学生」の4属性については下記のグラフから除外した。

全体では、比率の高い順に「放送教材と印刷教材の両方の学習で臨んだ」が66%と過半数を占め、「ほとんど印刷教材の学習だけで臨んだ」が27%で、「ほとんど放送教材の学習だけで臨んだ」は7%とごくわずかであった。

年齢階層別では、30歳代は「印刷教材の学習だけ」と「両方の学習で」がほぼ同数で、他の年代にはない特徴が見られた。

40歳代と50歳代は全体と同じ傾向で、60歳代と70歳代の高年齢層は「両方の学習で臨んだ」が75～80%と他の年代と比べ多く、その分「印刷教材の学習だけ」が少ない傾向であった。

所属プログラム別では「生活健康科学」が全体に比べ「印刷教材の学習だけ」（40%）が高く、「両方の学習で臨んだ」（57%）が低かった。

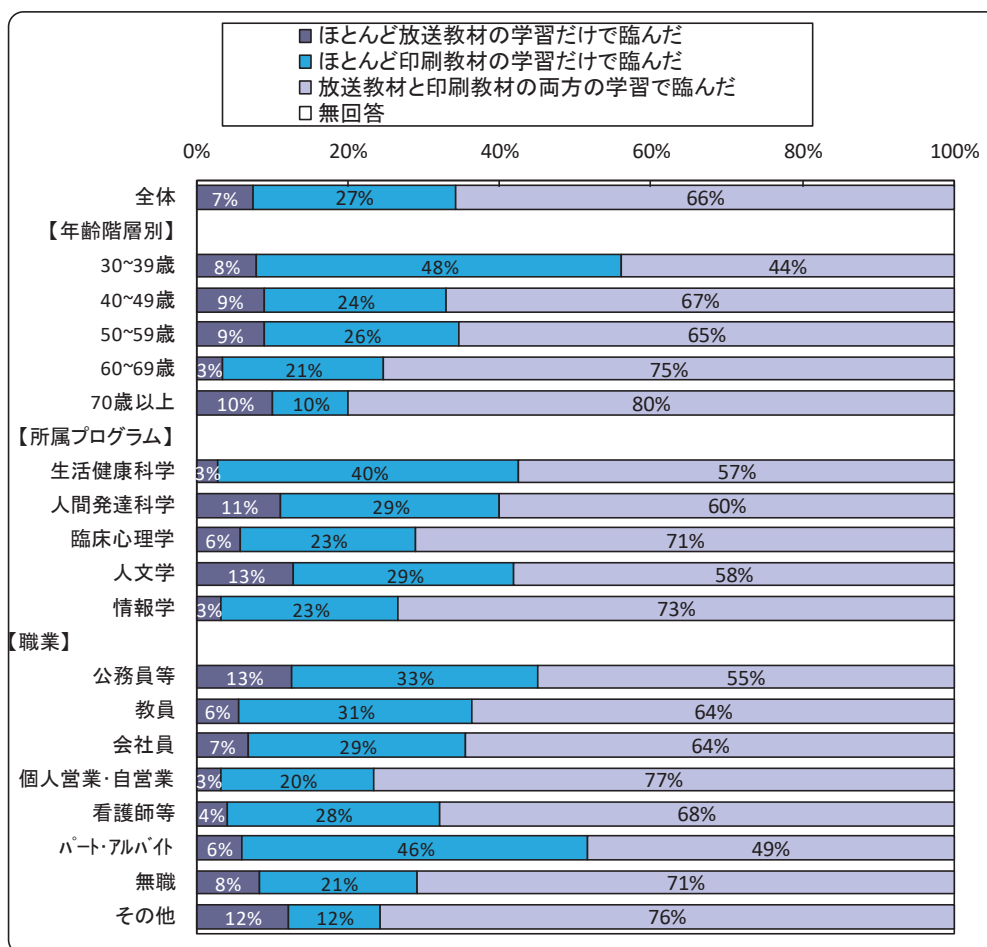
他に「人文学」も「両方の学習で臨んだ」（58%）は全体と比べると低かった。

「情報学」は反対に「両方の学習で臨んだ」（73%）が全体との対比で高かった。

「公務員等」と「パート・アルバイト」は他の年代と比べると、「両方の学習で臨んだ」が順に55%、49%と低く、「パート・アルバイト」は「印刷教材の学習だけ」46%と過半数に達していなかった。

「両方の学習で臨んだ」が70%を超えていたのは「個人営業・自営業」「無職」「その他」であった。

図2-57 【大学院】単位認定のための学習方法



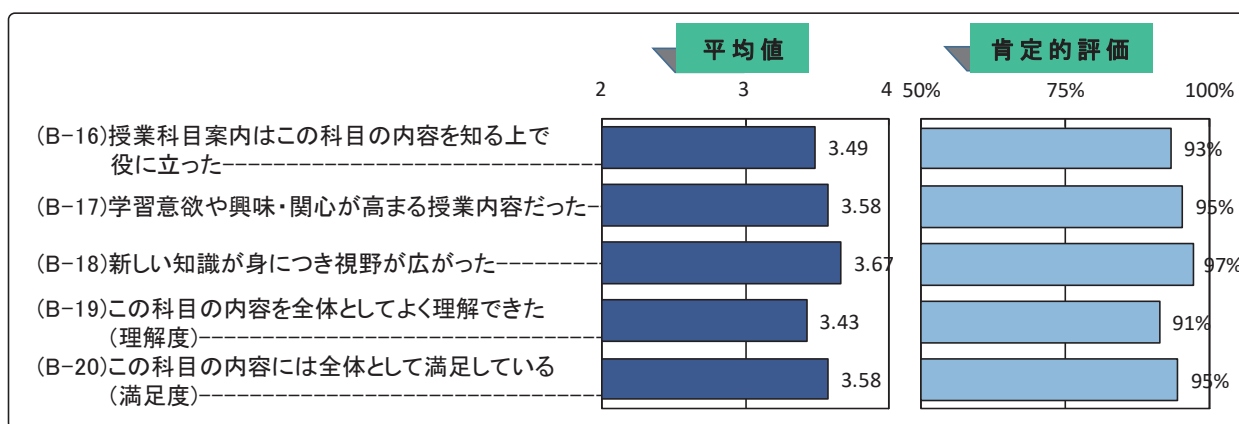
## Ⅱ－2－3. 大学院の授業評価

### (1) 全体評価

ここからは大学院の授業評価について、評価項目ごとに見ていくことにする。

全体評価では(図2-58)、(B-19)「この科目の内容を全体としてよく理解できた(理解度)」(91%)は下記5項目の中で最も低かったが、それ以外の項目については95%前後に達しており、(B-18)「新しい知識が身につく視野が広がった」(97%)が最も高く評価されていた。

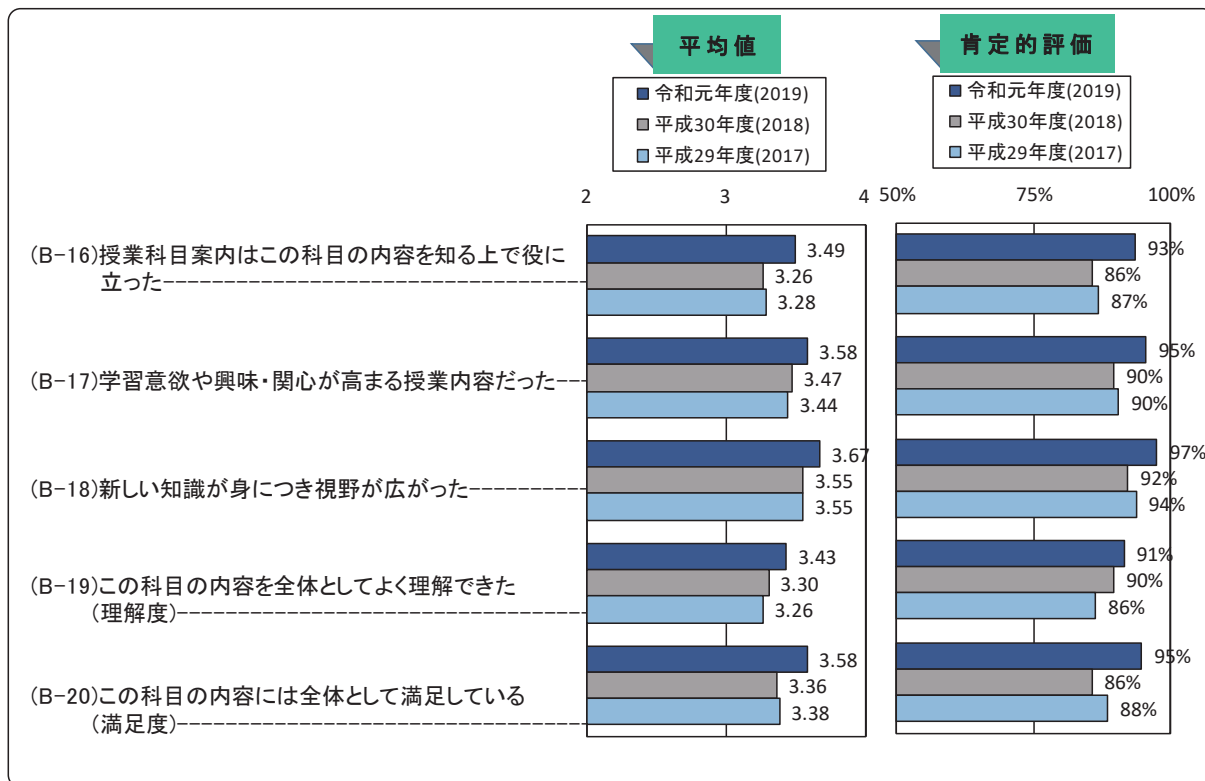
図2-58 【大学院】回答者全体の全体評価



全体評価を時系列で見ると（図2-59）、(B-19)「この科目の内容を全体としてよく理解できた（理解度）」は昨年度と変わりはないが、それ以外の4項目については上昇が見られ、95%前後の評価を得ていた。

特に、(B-20)「この科目の内容には全体として満足している（満足度）」（95%）については、9ポイントの大幅な上昇が見られた。

図2-59 【大学院】回答者全体の全体評価（時系列）



年齢階層別では(図2-60)、(B-16)「授業科目案内はこの科目の内容を知る上で役に立った」については、50歳代が97%と最も高く、70歳以上が85%最も低かった。

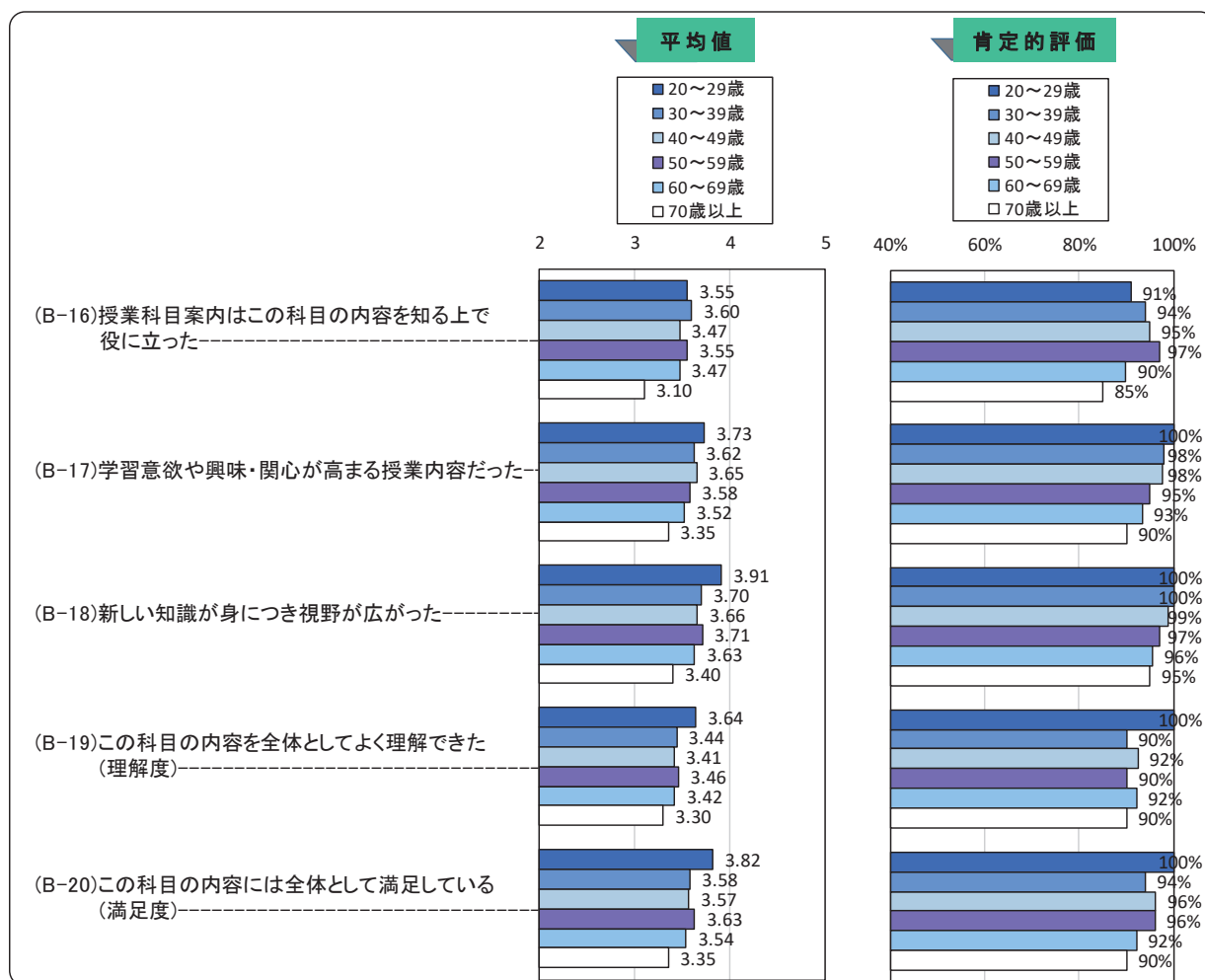
(B-17)「学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった」は20歳代~40歳代までの若い層の評価が高く、50歳代以上は年代が上がるほど、評価を下げていた。

(B-18)「新しい知識が身につく視野が広がった」については、いずれも95%~100%に達し、一様に高い評価を得ていた。

(B-19)「理解度」と(B-20)「満足度」は同じような傾向で、その評価は20歳代(100%)で高く、70歳以上(90%)で低かった。

※「20~29歳」は回答者数が11人と少人数である事に留意されたい。

図2-60【大学院】年齢階層別の全体評価



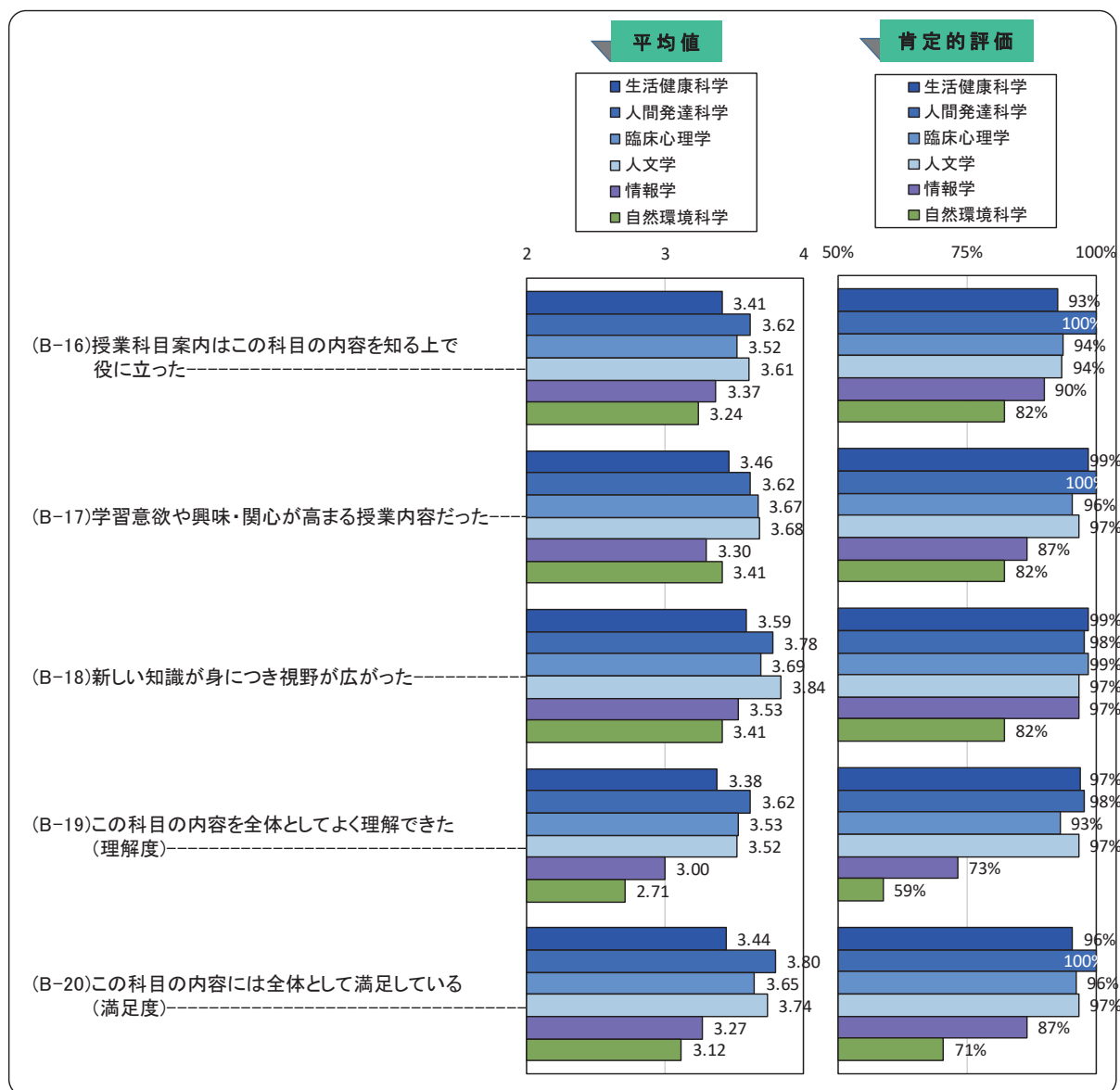


所属プログラム別に全体評価を見ると（図2-61）、(B-16)「授業科目案内はこの科目の内容を知る上で役に立った」では「人間発達科学」受講者の全員が肯定的評価をしており、反対に「自然環境科学」は82%と他のプログラムとの対比で、評価は低かった。

(B-17)「学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった」と(B-19)「理解度」、(B-20)「満足度」では、同じような傾向がみられ、「生活健康科学」～「人文学」までは90%台後半から100%の高評価であったが、残る「情報学」と「自然環境科学」は大きく評価を下げており、特に(B-19)「理解度」で「自然環境科学」は59%にとどまっていた。

(B-18)「新しい知識が身につく視野が広がった」は「生活健康科学」～「情報学」までは98%前後の高評価であったが、ここでも「自然環境科学」は82%と他のプログラムと比べると低い評価であった。

図2-61 【大学院】所属プログラム別の全体評価



職業別では（図2-62）、(B-17)「学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった」は「個人営業・自営業」「看護師等」「その他」が100%と最も高い評価であったのに対し、「家事専業」と「無職」はほぼ90%にとどまり、他の職業より低い評価であった。

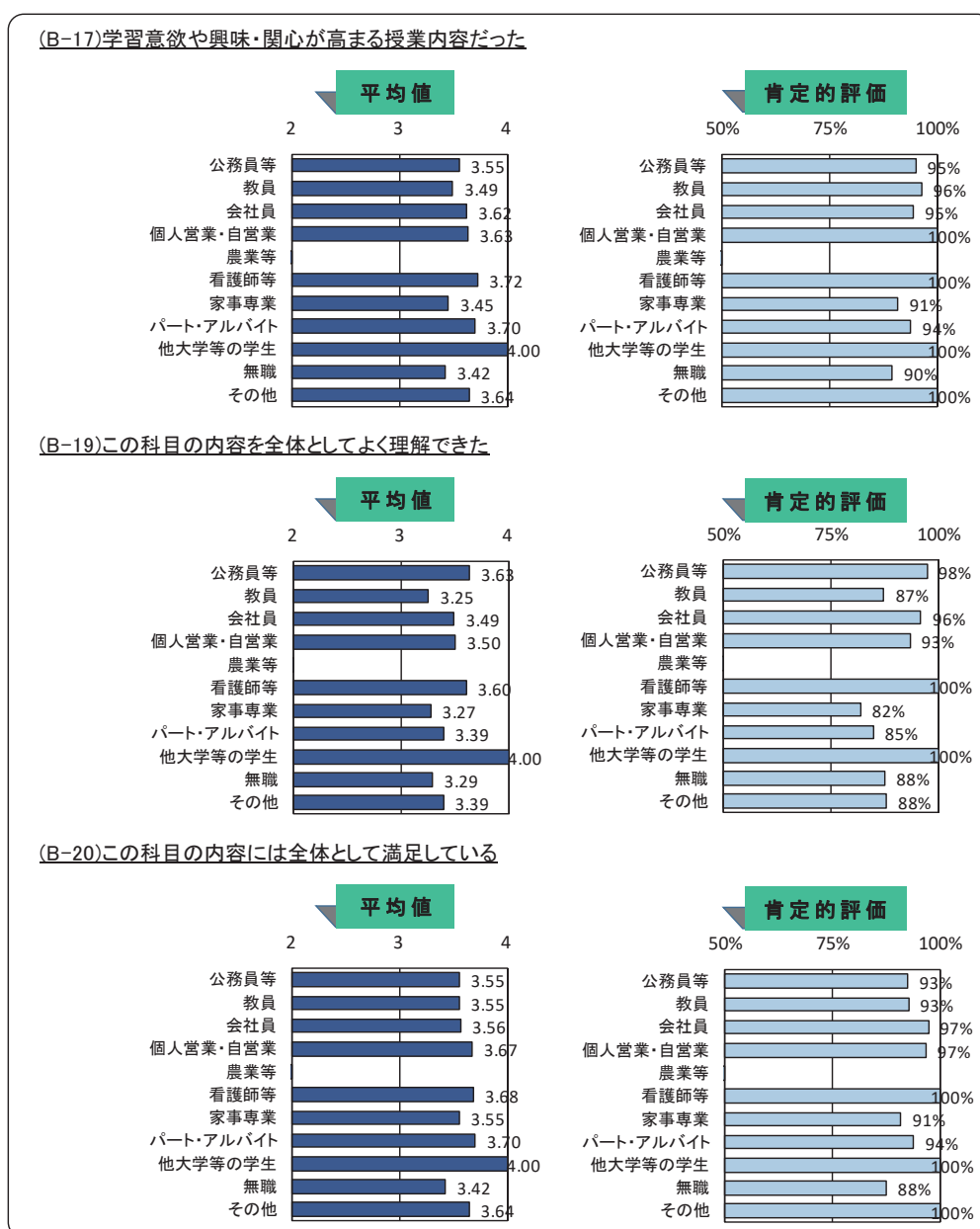
(B-19)「理解度」では、ここでも「看護師等」が100%に達しており、他に「公務員等」(98%)、「会社員」(96%)の評価も高かった。

それ以外は82%～93%と分散している。

(B-20)「満足度」では、前の2項目同様「看護師等」が100%で、他に「その他」も100%に達していた。

反対に「無職」は88%と、他の職業と比べると低い評価であった。

図2-62【大学院】職業別の全体評価

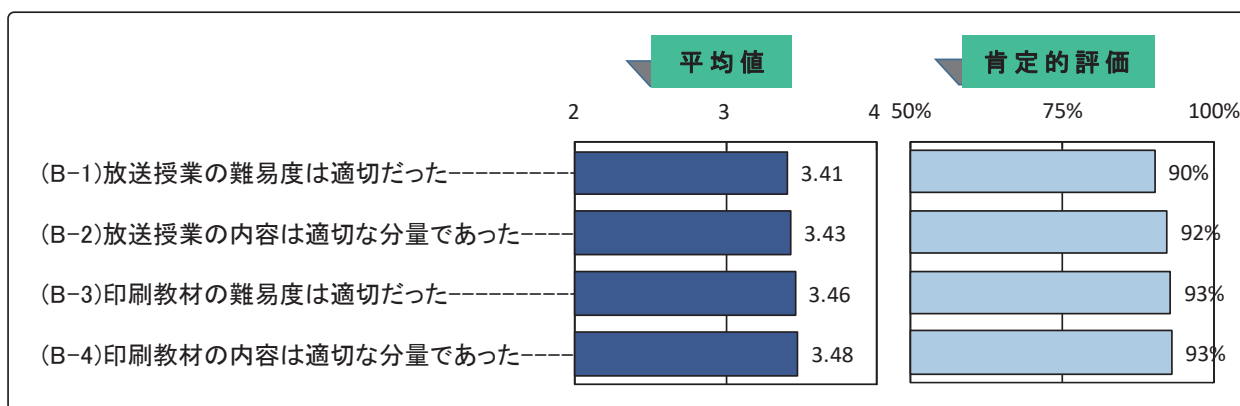


## (2) 授業の難易度・分量

次に授業の難易度・分量について評価項目ごとに見ていく。

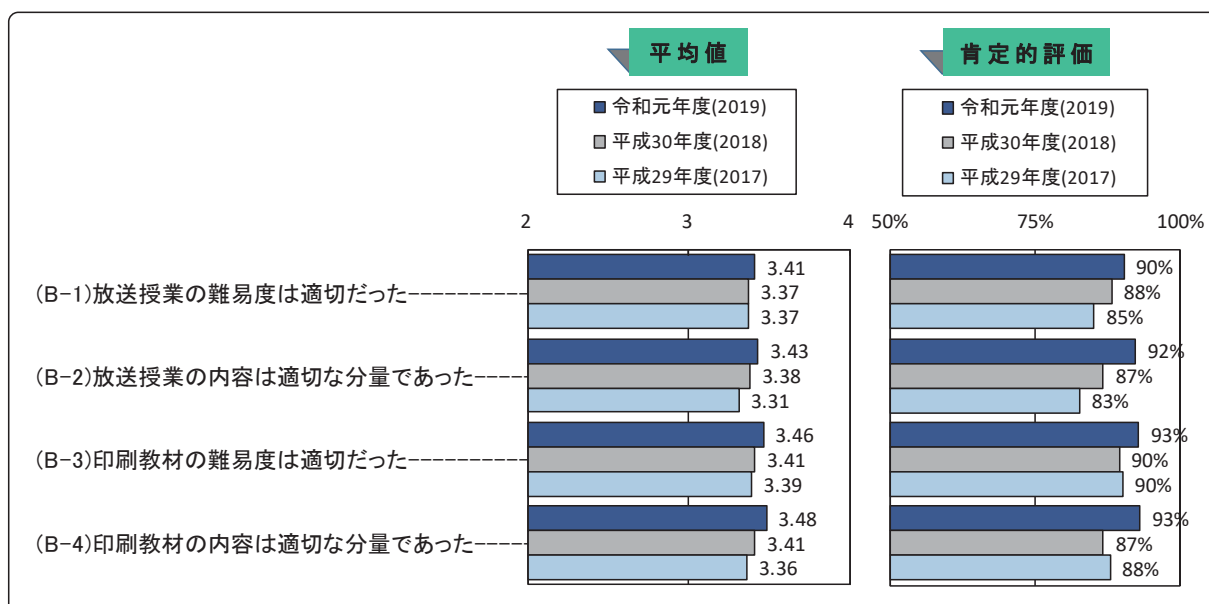
授業の難易度・分量の評価は（図2-63）は、いずれも90%以上と高い評価となっている。

図2-63 【大学院】回答者全体の授業難易度・分量の評価



開設年度別では（図2-64）、本年度と昨年度を比較すると、下記の3項目で本年度に上昇傾向が見られ、(B-2)「放送授業の内容は適切な分量であった」と(B-4)「印刷教材の内容は適切な分量であった」の両方で5ポイント以上上昇しており、共に93%に達していた。

図2-64 【大学院】回答者全体の授業難易度・分量の評価（開設年度比較）



年齢階層別に授業の難易度・分量を見ると（図2-65）、(B-1)「放送授業の難易度は適切だった」は40歳代～60歳の評価が90%以上に達しており、反対に70歳以上は80%と最も評価が低かった。

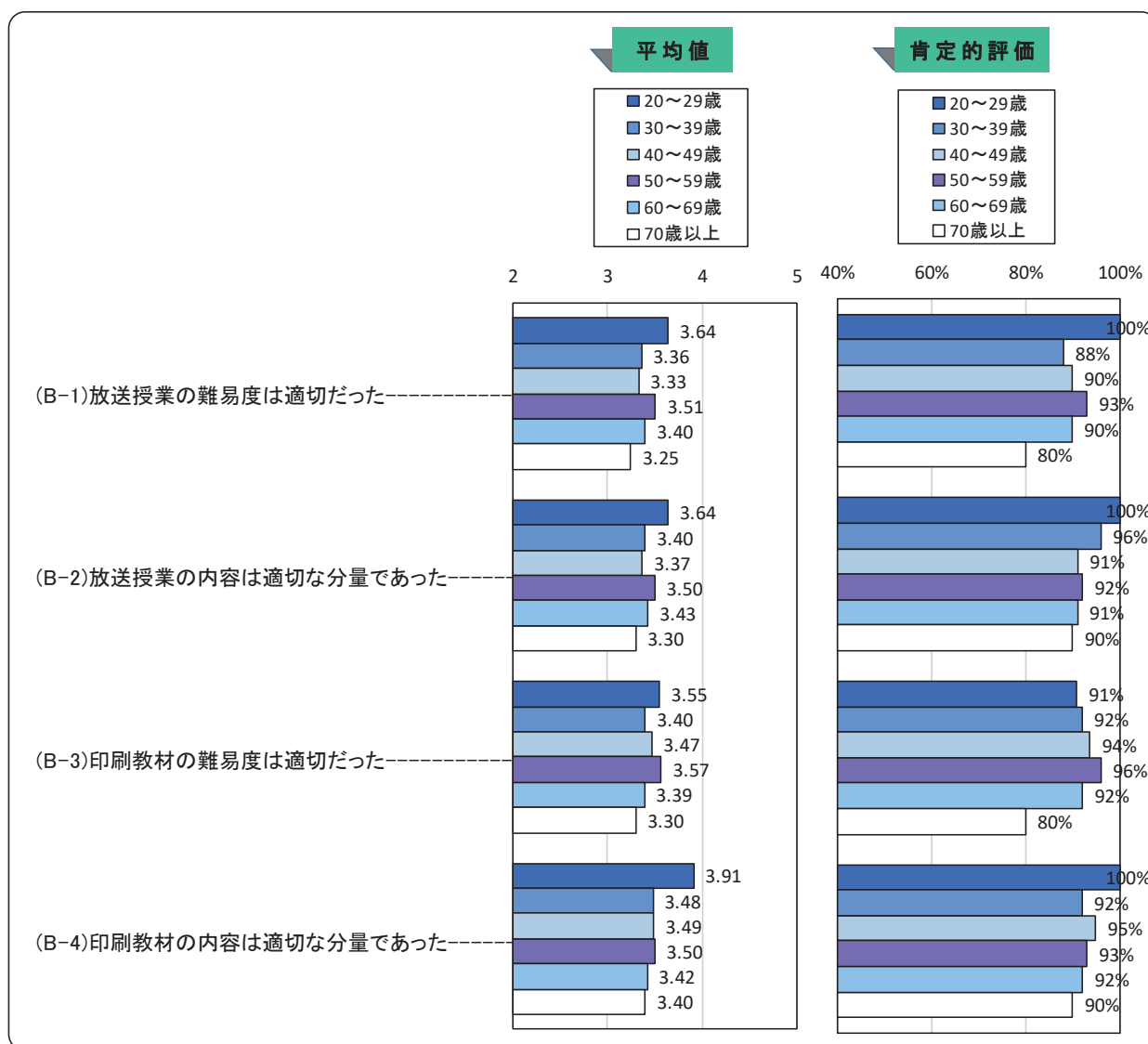
(B-2)「放送授業の内容は適切な分量であった」は30歳代（96%）が最も高く、40歳代以上は91%前後で同じ水準であった。

(B-3)「印刷教材の難易度は適切だった」では、30歳代～60歳代までは90%以上に達していたが、70歳以上は80%にとどまっていた。

(B-4)「印刷教材の内容は適切な分量であった」は、30歳代～70歳以上まで90%以上で各年代間に大きな差は見られなかった。

※「20～29歳」は回答者数が11人と少人数である為、コメントを差し控えた。

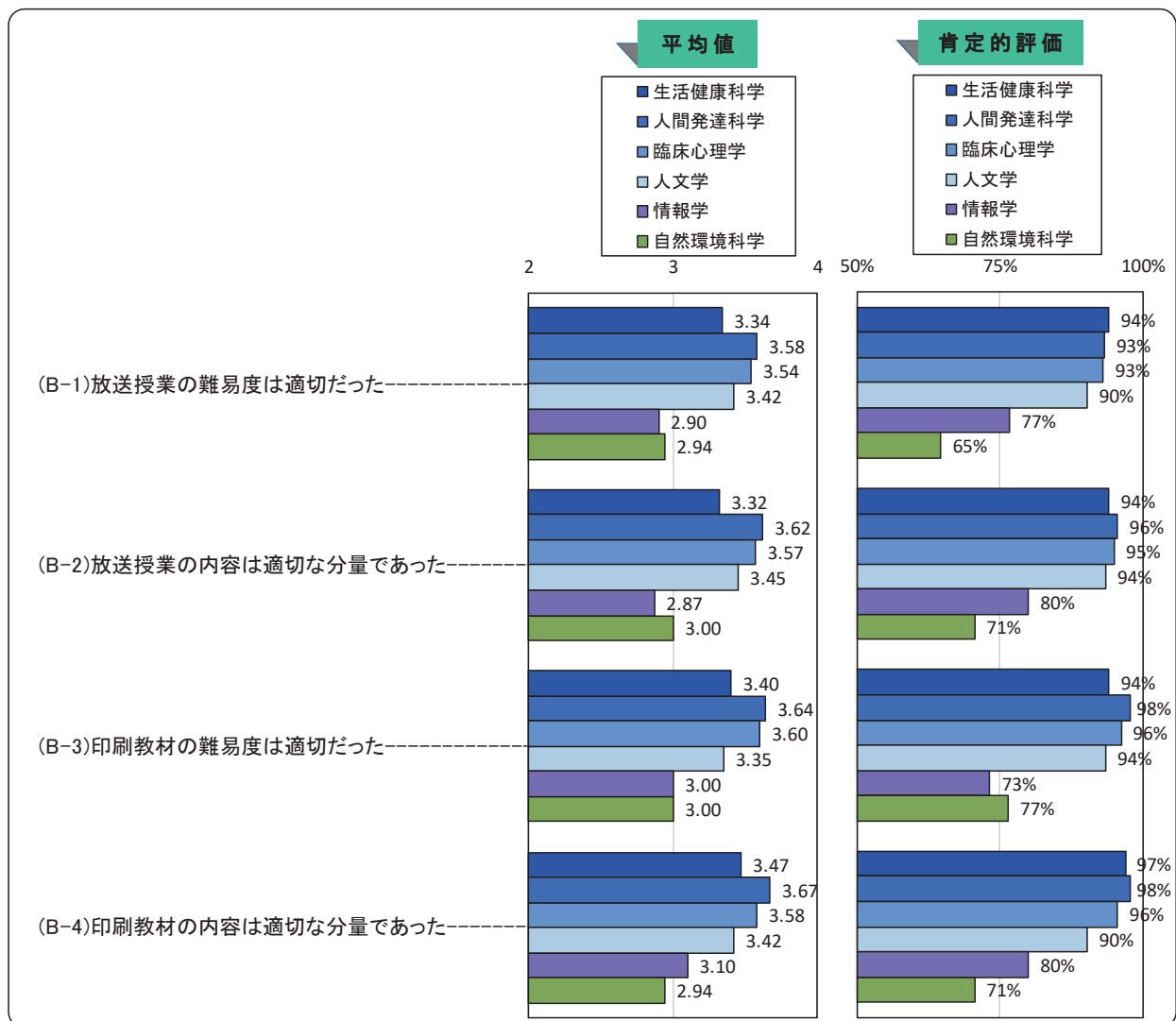
図2-65 【大学院】年齢階層別の授業難易度・分量の評価



所属プログラム別に授業の難易度・分量を見ると（図2-66）、下記の4項目全てで同じ様な傾向が見られ、「生活健康科学」～「人文学」は90%以上に達していたが、「情報学」と「自然環境科学」は65%～80%にすぎず、評価が低かった。

※「自然環境科学」は回答者数が17人と少人数である事に留意されたい。

図2-66 【大学院】所属プログラム別の授業難易度・分量の評価



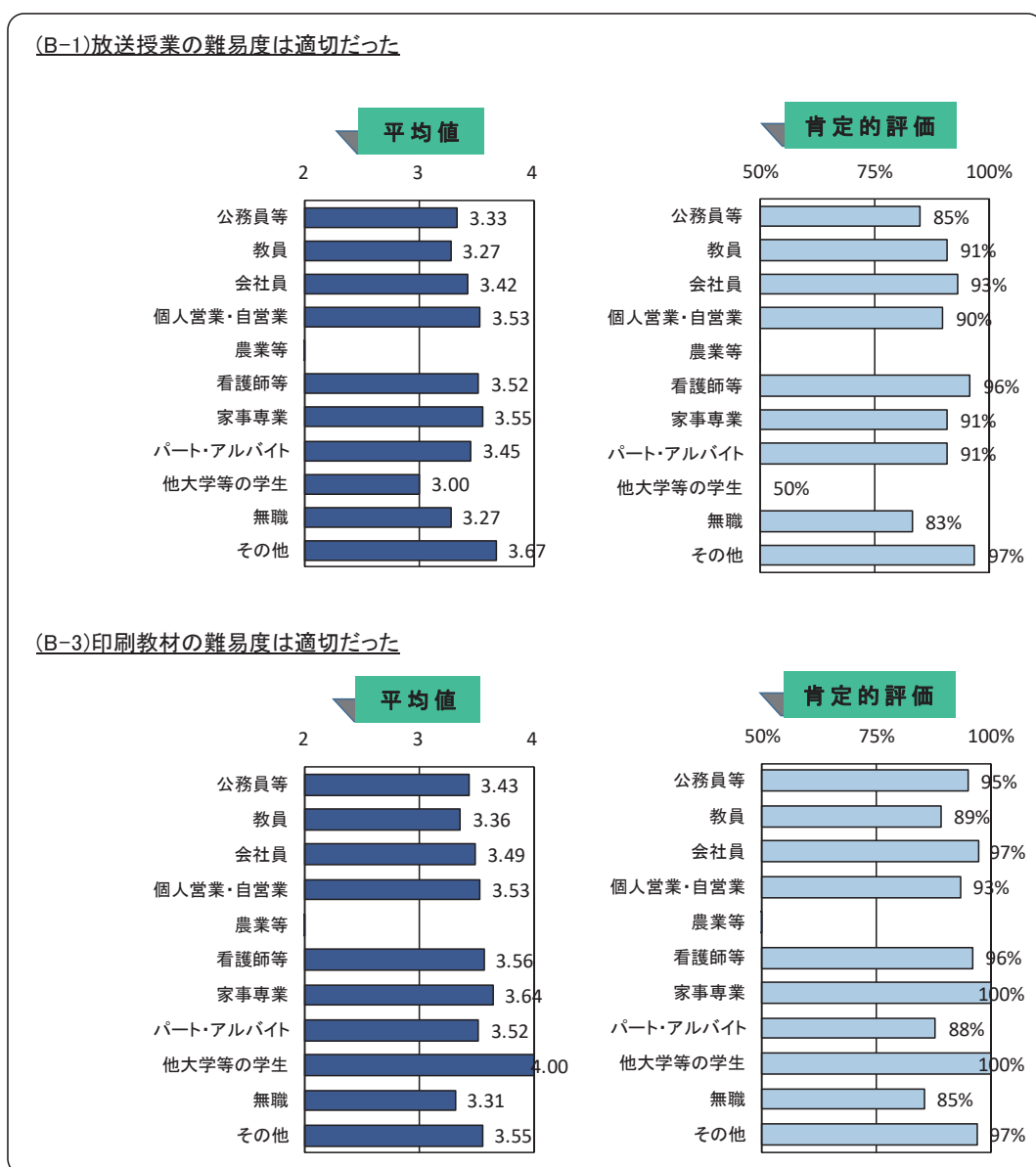
職業別に授業の難易度を見ると（図2-67）、(B-1)「放送授業の難易度は適切だった」は、「その他」と「看護師等」が96%以上と上位で、反対に「公務員等」と「無職」は84%前後にすぎなかった。

残りの職業については、90%前半での評価であった。

(B-3)「印刷教材の難易度は適切だった」では、最も高かったのは「会社員」（97%）と「その他」（97%）で、「無職」（85%）が最も低かった。

※「家事専業」と「他大学等の学生」は回答者数がそれぞれ11人と2人であった為、両方を割愛した。

図2-67【大学院】職業別の授業難易度の評価

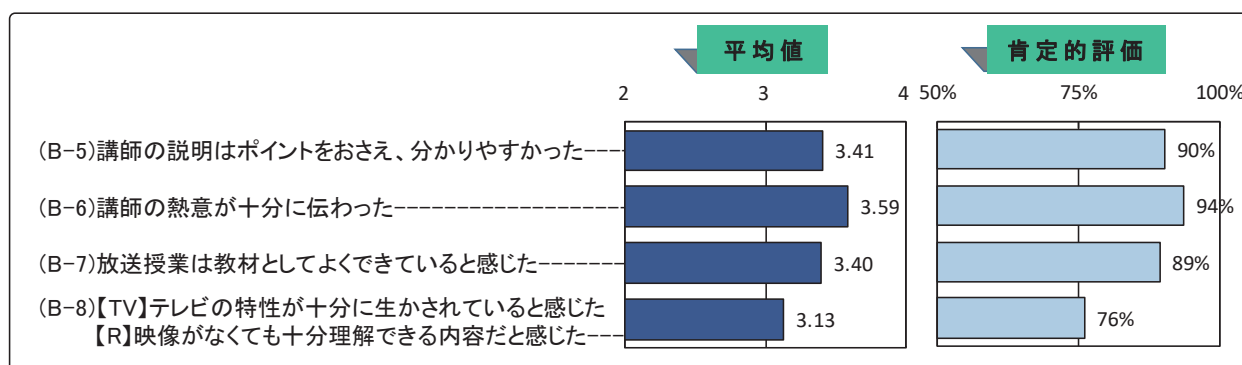


### (3) 放送授業

ここからは放送授業について評価項目ごとに見ていく。

放送授業に関する評価項目を見ると（図2-68）、(B-5)「講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった」と(B-7)「放送授業は教材としてよくできていると感じた」は約90%、講師の熱意が十分に伝わった」は94%に達していたが、(B-8)「【TV】テレビの特性が十分に生かされていると感じた／【R】映像がなくても十分理解できる内容だと感じた」は76%と大きく評価を下げていた。

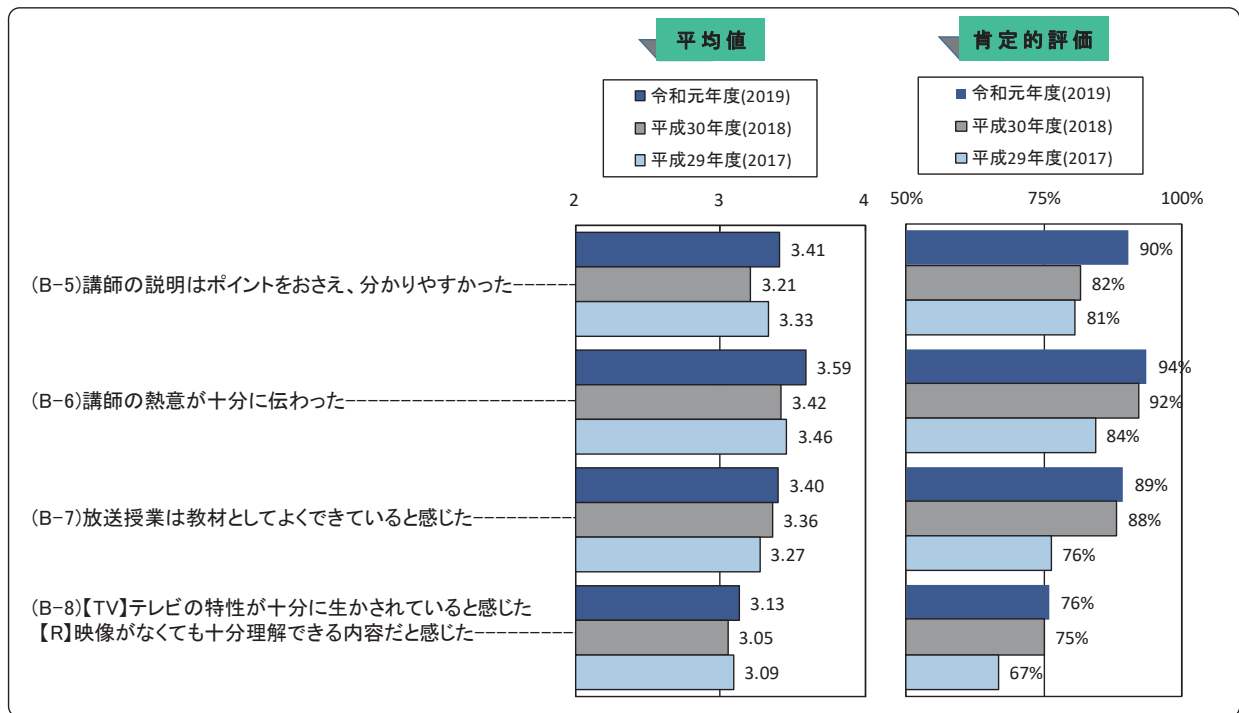
図2-68 【大学院】回答者全体の放送授業の評価



放送授業の評価を時系列で見ると（図2-69）、(B-5)「講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった」では、本年度は一昨年度と昨年度から大幅に評価を上げ、90%に達していた。

それ以降の(B-6)「講師の熱意が十分に伝わった」～(B-8)「テレビの特性が十分に生かされていると感じた／映像がなくても十分理解できる内容だと感じた」では、本年度の評価は、昨年度とほとんど変わらなかった。

図2-69 【大学院】回答者全体の放送授業の評価（時系列）



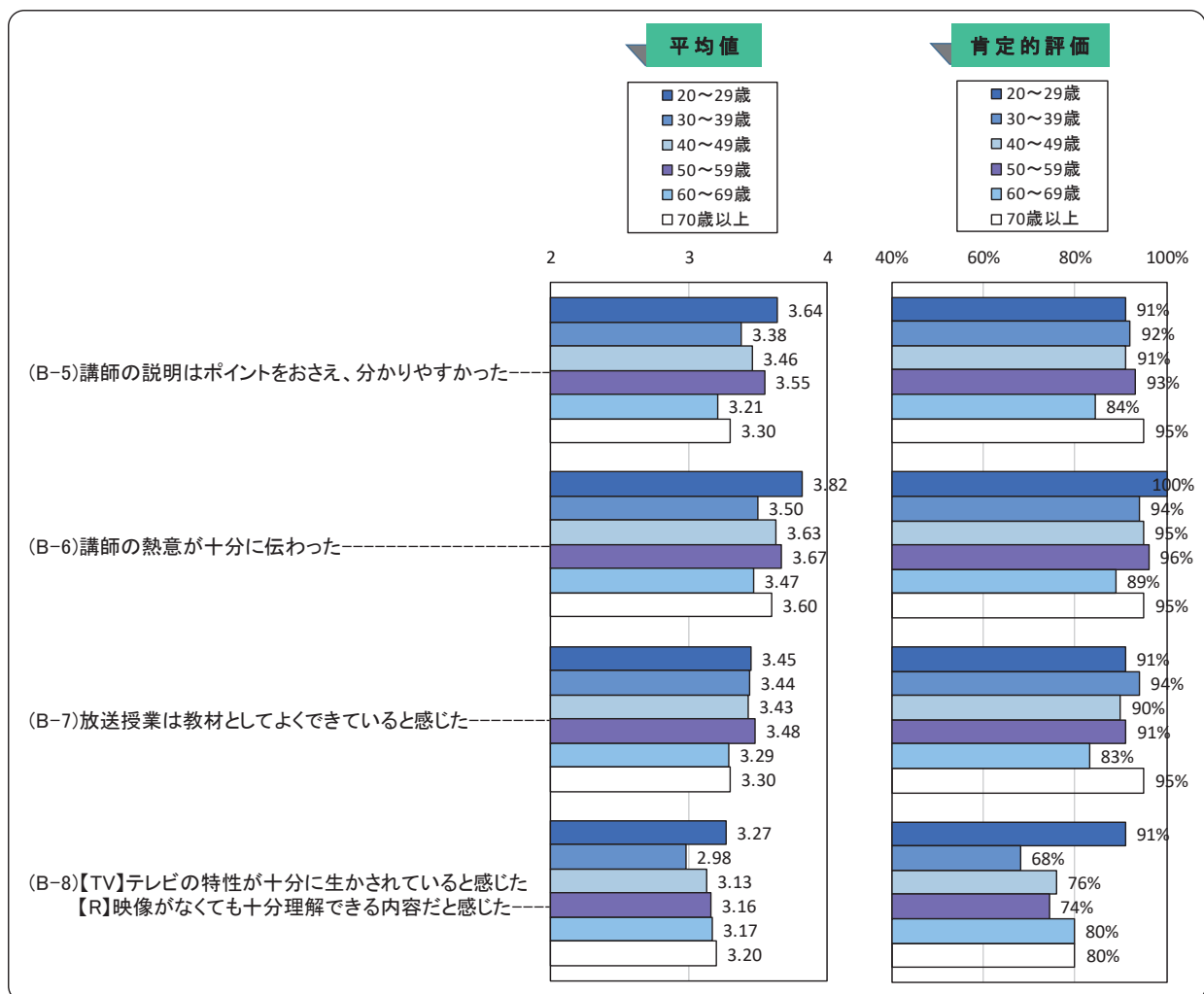


年齢階層別では（図2-70）、(B-5)「講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった」～(B-7)「放送授業は教材としてよくできていると感じた」については、60歳代の評価がそれ以外の年代に比べ低い傾向であった。

(B-8)「テレビの特性が十分に活かされていると感じた／映像がなくても十分理解できる内容だと感じた」については、60歳代と70歳以上は80%に達し、40～50歳代は75%前後であったに  
対し30歳代は68%にとどまり、最も評価が低かった。

※「20～29歳」は回答者数が11人と少人数である為、コメントを差し控えた。

図2-70 【大学院】年齢階層別の放送授業の評価



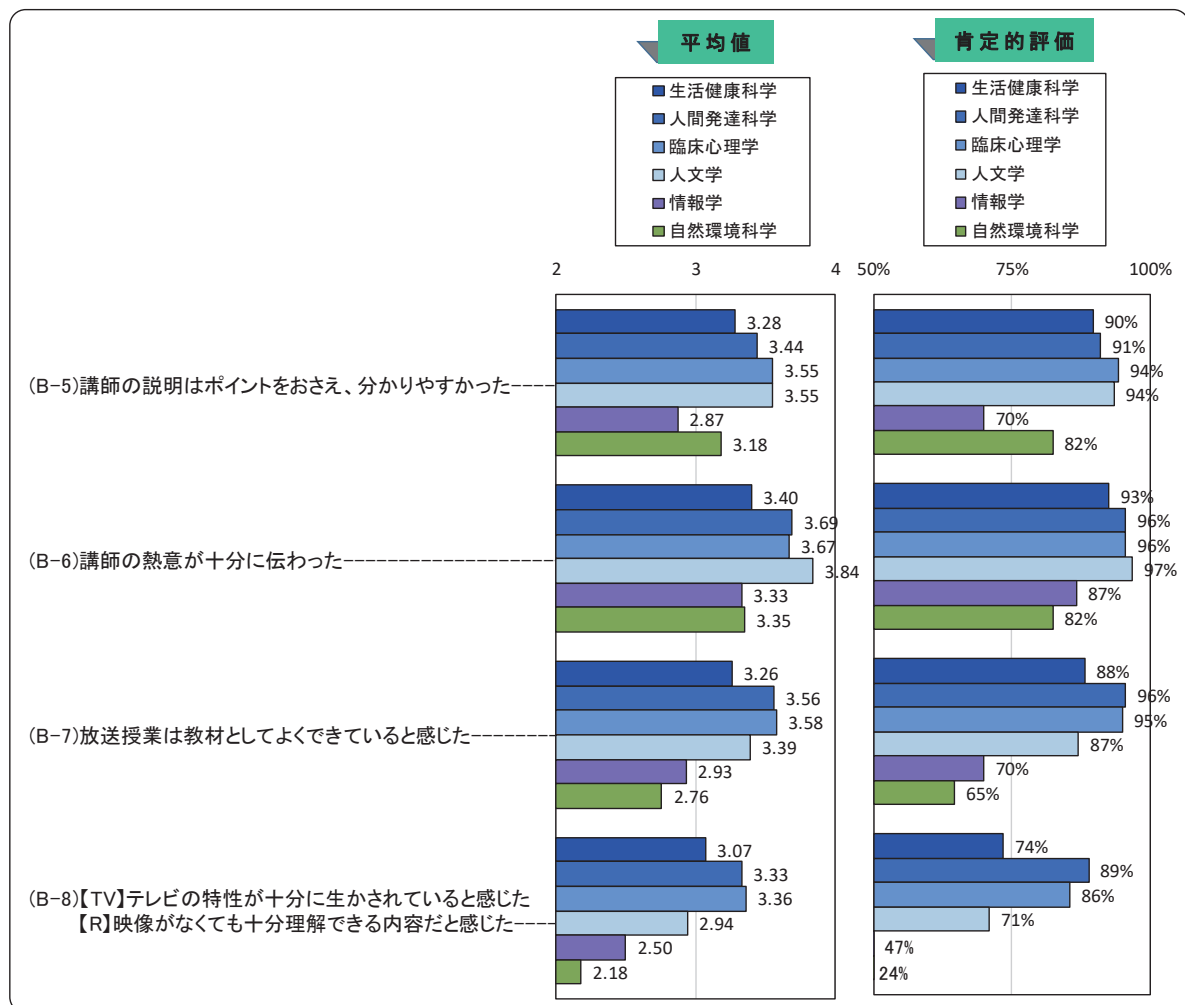
所属プログラム別では(図2-71)、(B-5)「講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった」は、「生活健康科学」～「人文学」では90%以上の評価であったが、「情報学」は70%と最も低く、「自然環境科学」も82%と「生活健康科学」～「人文学」と比べると評価が低かった。

(B-6)「講師の熱意が十分に伝わった」では、前述の傾向に近く、「生活健康科学」～「人文学」は90%の前半から後半の評価であったが、「情報学」と「自然環境科学」は80%台にとどまっていた。

(B-7)「放送授業は教材としてよくできていると感じた」についても、「生活健康科学」～「人文学」の評価が高く、「情報学」と「自然環境科学」の評価が低いという傾向が見られた。

(B-8)「テレビの特性が十分に生かされていると感じた/映像がなくても十分理解できる内容だと感じた」については、「人間発達科学」と「臨床心理学」が80%後半で上位を占め、「生活健康科学」と「人文学」が70%台、「情報学」と「自然環境科学」が極端に低く50%以下で、3極化していた。

図2-71 【大学院】所属プログラム別の放送授業の評価

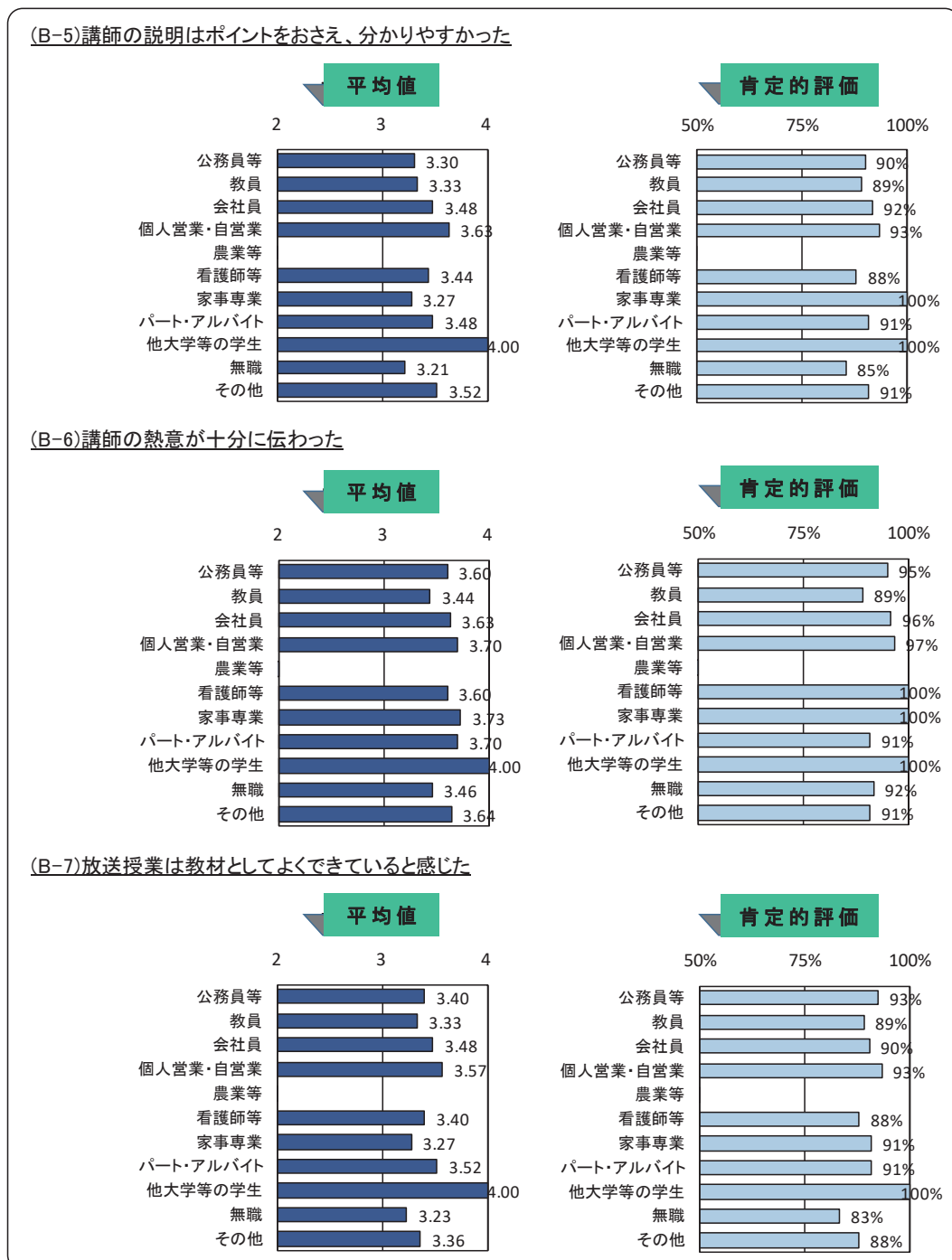


職業別では（図2-72）、(B-5)「講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった」は、「個人営業・自営業」(93%)と「会社員」(92%)が上位を占め、反対に「無職」が85%と最も低かった。

(B-6)「講師の熱意が十分に伝わった」では、「看護師等」(100%)の全員が肯定的評価をしており、他に「個人営業・自営業」「会社員」「公務員等」も96%前後と高い評価であった。残る他の職業も90%前後に達していた。

(B-7)「放送授業は教材としてよくできていると感じた」は、「公務員等」と「個人営業・自営業」からの評価が高く（それぞれ93%）、反対に「無職」は83%と最も低かった。

図2-72【大学院】職業別の放送授業の評価

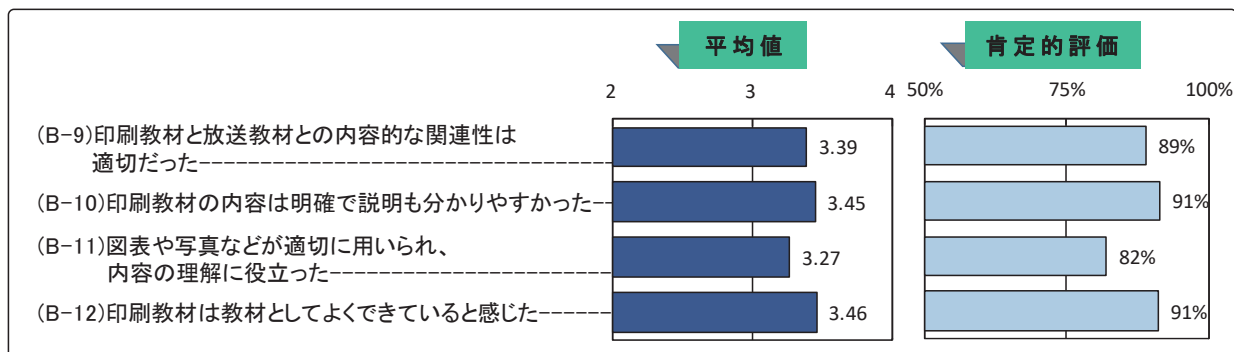


#### (4) 印刷教材

ここからは印刷教材について、評価項目ごとに見ていく。

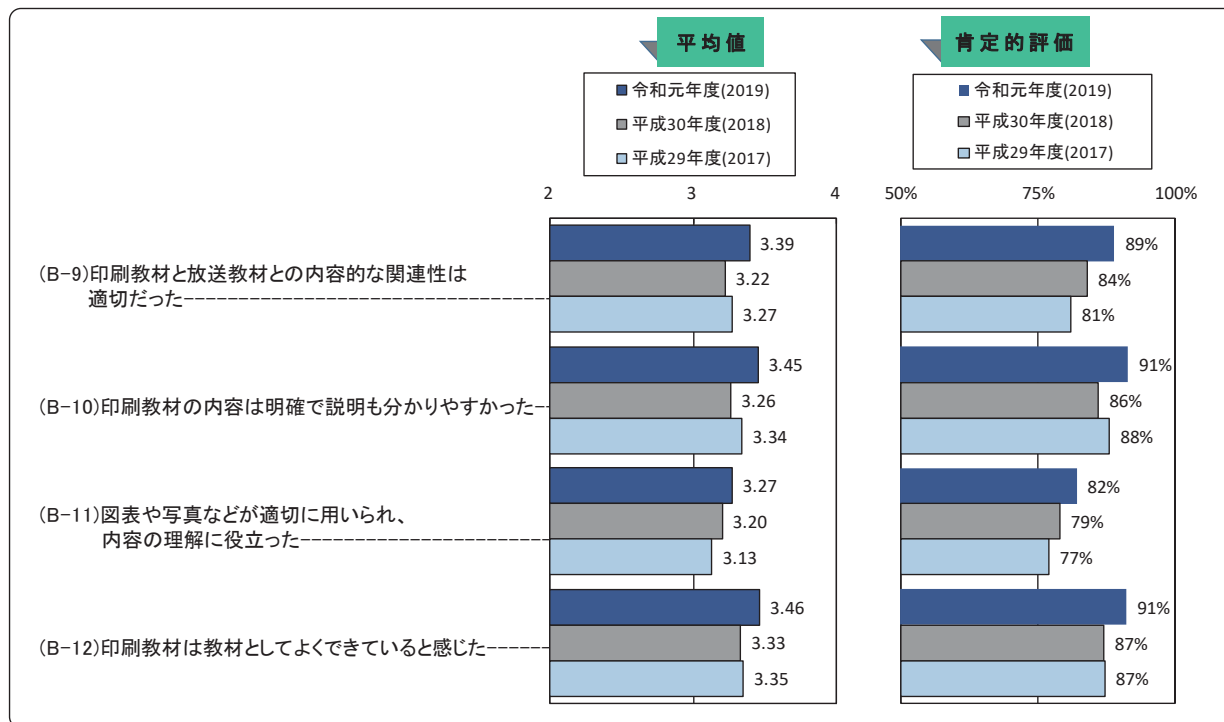
印刷教材の評価項目では（図2-73）、下記4項目の中で、(B-11)「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った」以外は、90%前後に達していたが、「B-11」は82%と評価が低かった。

図2-73 【大学院】回答者全体の印刷教材の評価



印刷教材の評価を時系列で見ると（図2-74）、以下の4項目では、本年度は昨年度と比べいずれも比率の上昇が見られ、特に(B-9)「印刷教材と放送教材との内容的な関連性は適切だった」(B-10)「印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった」(B-12)「印刷教材は教材としてよくできていると感じた」では、90%前後に達していた。

図2-74 【大学院】回答者全体の印刷教材の評価（時系列）



年齢階層別の評価（図2-75）の(B-9)「印刷教材と放送教材との内容的な関連性は適切だった」では、「20歳代」「40歳代」「50歳代」がそれぞれ91%に達していたが、「60歳代」と「70歳以上」は85%にとどまり最も評価が低かった。

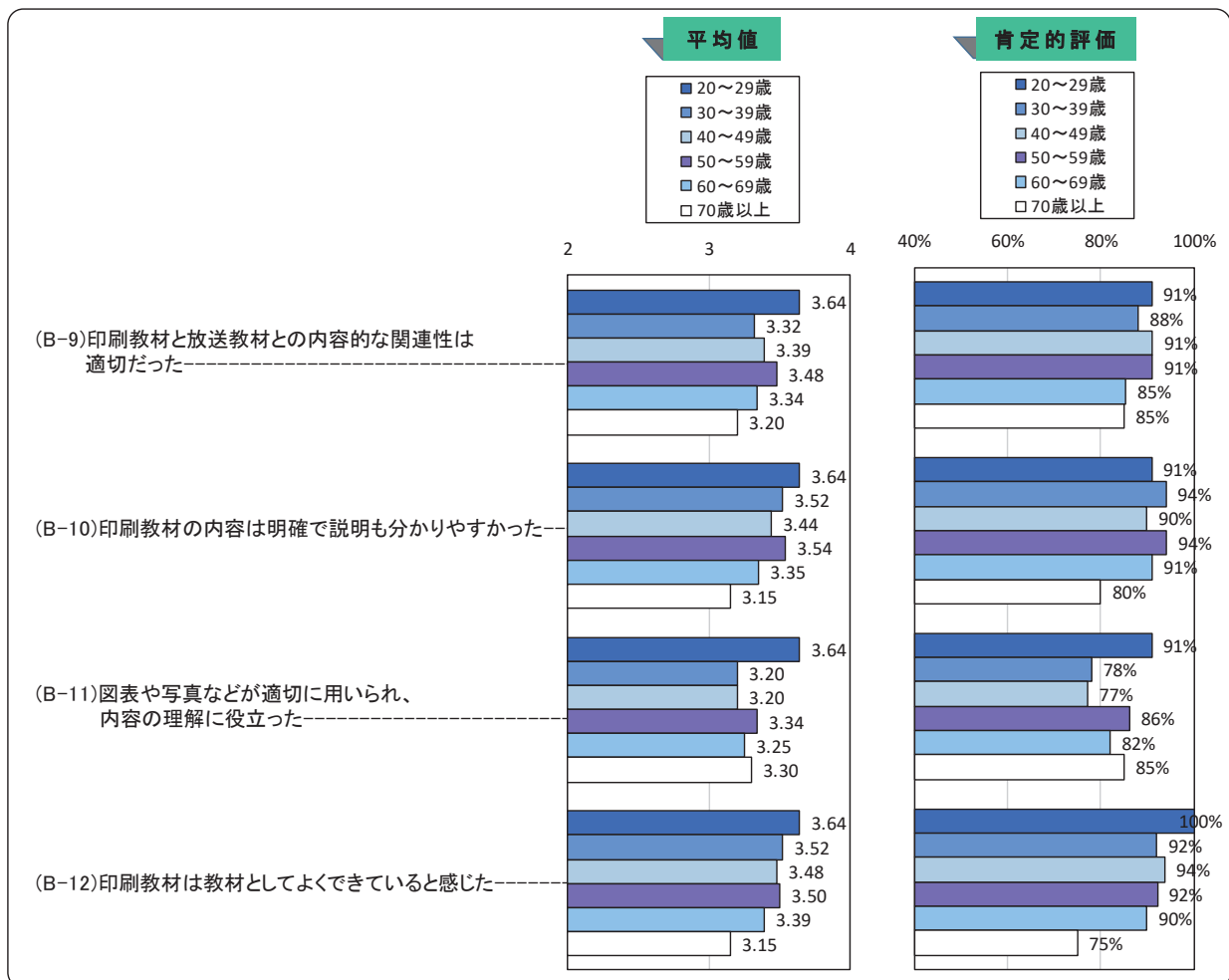
(B-10)「印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった」では「20歳代～60歳代」までは90%以上の評価であったが、「70歳以上」が80%と極端に低かった。

(B-12)「印刷教材は教材としてよくできていると感じた」は「B-10」と同じような傾向で、「70歳以上」が75%と更に評価を下げている。

(B-11)「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った」は、30歳代と40歳代が70%後半にとどまり、それ以外の年代は82～91%に達していた。

※「20～29歳」は回答者数が11人と少人数である事に留意されたい。

図2-75 【大学院】年齢階層別の印刷教材の評価



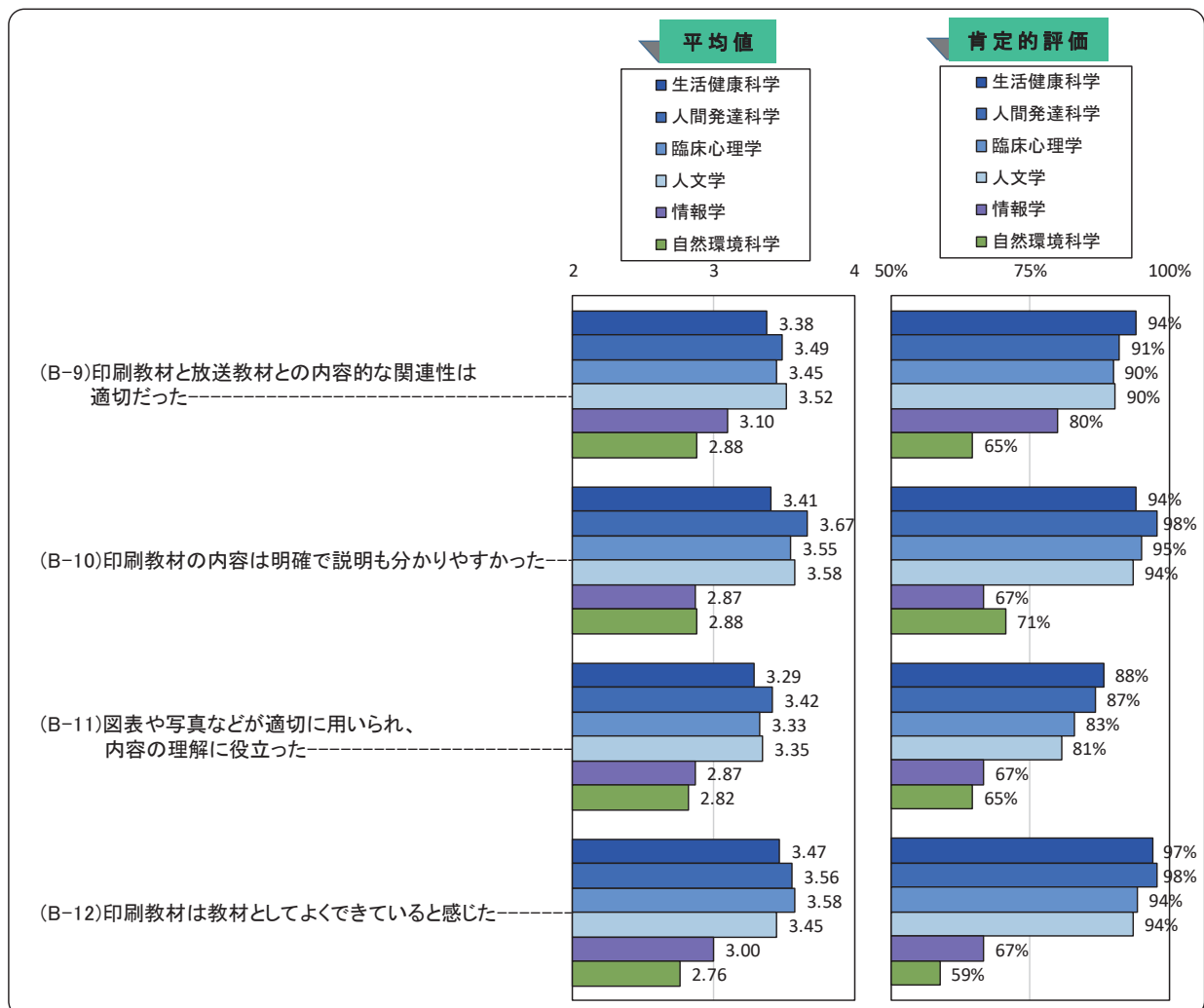
所属プログラム別の評価を見ると（図2-76）、(B-9)「印刷教材と放送教材との内容的な関連性は適切だった」は「生活健康科学」～「人文学」までは90%以上に達していたが、「情報学」では10ポイント以上減の80%、「自然環境科学」更に15ポイント減の65%と極端に評価が低かった。

(B-12)「印刷教材は教材としてよくできていると感じた」にも前述の傾向が見られ、「情報学」(67%)と「自然環境科学」(59%)は更に評価を下げていた。

(B-10)「印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった」でも「生活健康科学」～「人文学」は94%以上の高評価で、反対に「情報学」と「自然環境科学」は70%前後と、二極化が見られた。

(B-11)「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った」では「生活健康科学」(88%)～「人文学」(81%)までは漸減傾向で、「情報学」と「自然環境科学」は66%前後と低い評価であった。

図2-76 【大学院】所属プログラム別の印刷教材の評価



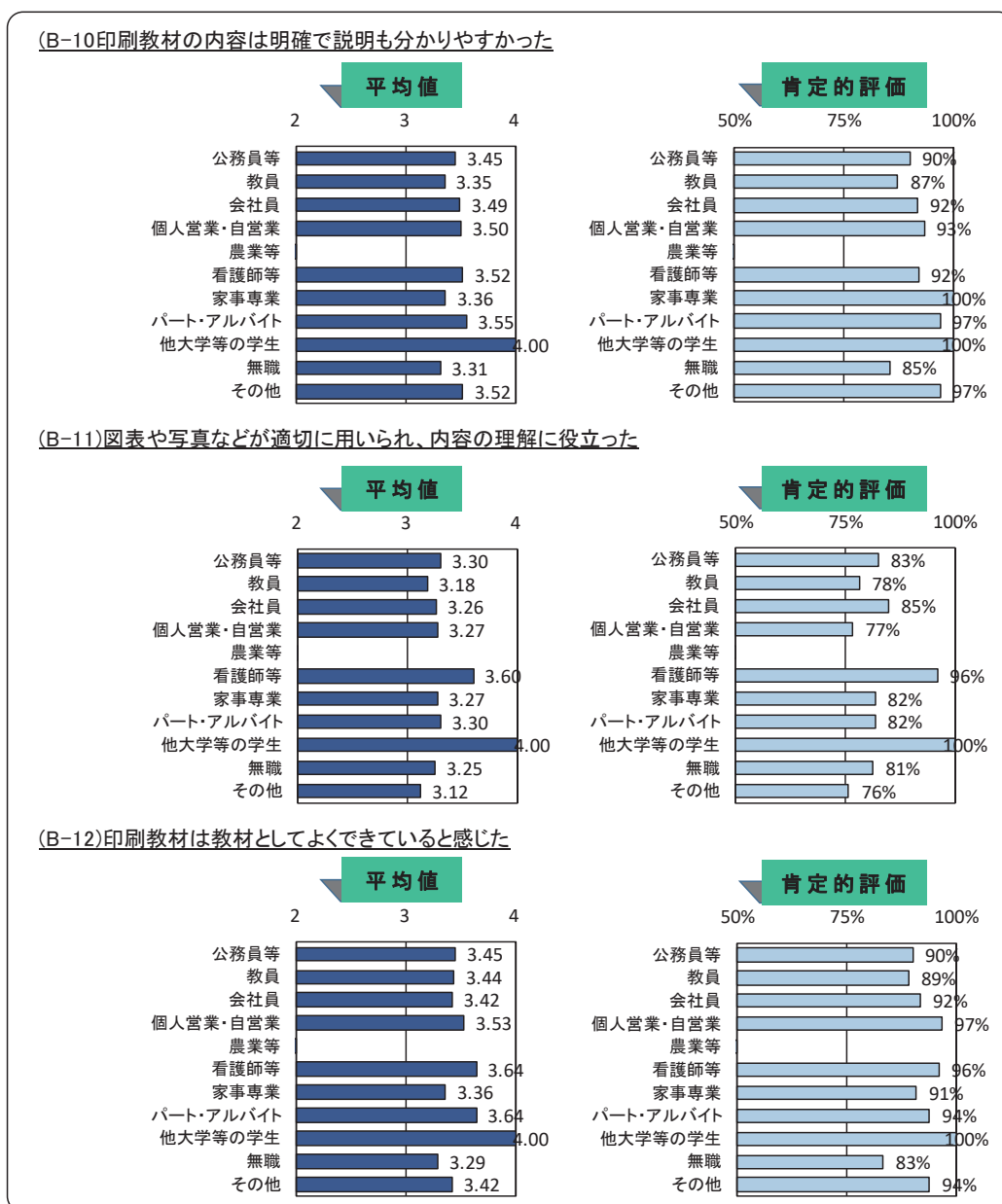
職業別では(図2-77)、(B-10)「印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった」は、「パート・アルバイト」と「その他」が最も高く97%、反対に「教員」と「無職」は86%前後にとどまり、残りの職業は90%の前半であった。

(B-11)「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った」では、「看護師等」が96%と唯一90%越えて、「教員」「個人営業・自営業」「その他」は77%前後と評価が低かった。それ以外の職業は81%~85%であった。

(B-12)「印刷教材は教材としてよくできていると感じた」では、「個人営業・自営業」と「看護師等」はそれぞれ97%、96%と高評価、反対に「無職」は83%と最も低かった。それ以外の職業は、89%~94%と高い評価であった。

※「家事専業」と「他大学等の学生」は回答者数がそれぞれ11人と2人であった為、両方を割愛した。

図2-77【大学院】職業別の印刷教材の評価



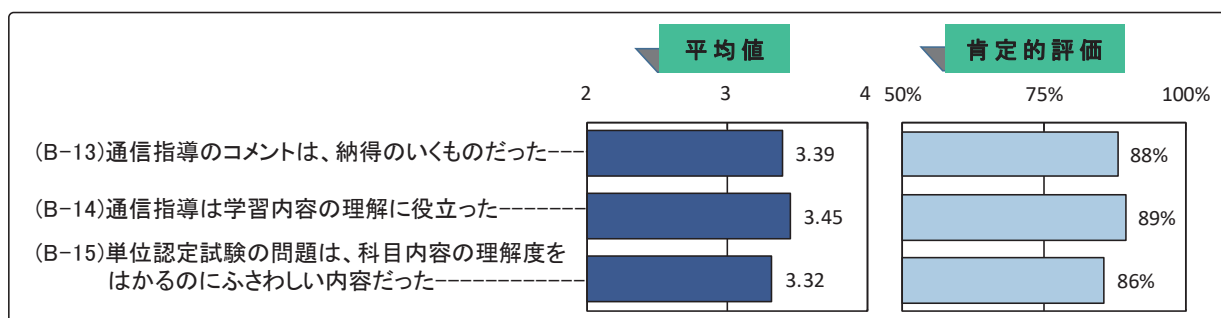


(5) 通信指導・単位認定試験

最後に通信指導・単位認定試験の評価について項目ごとに見ていくことにする。

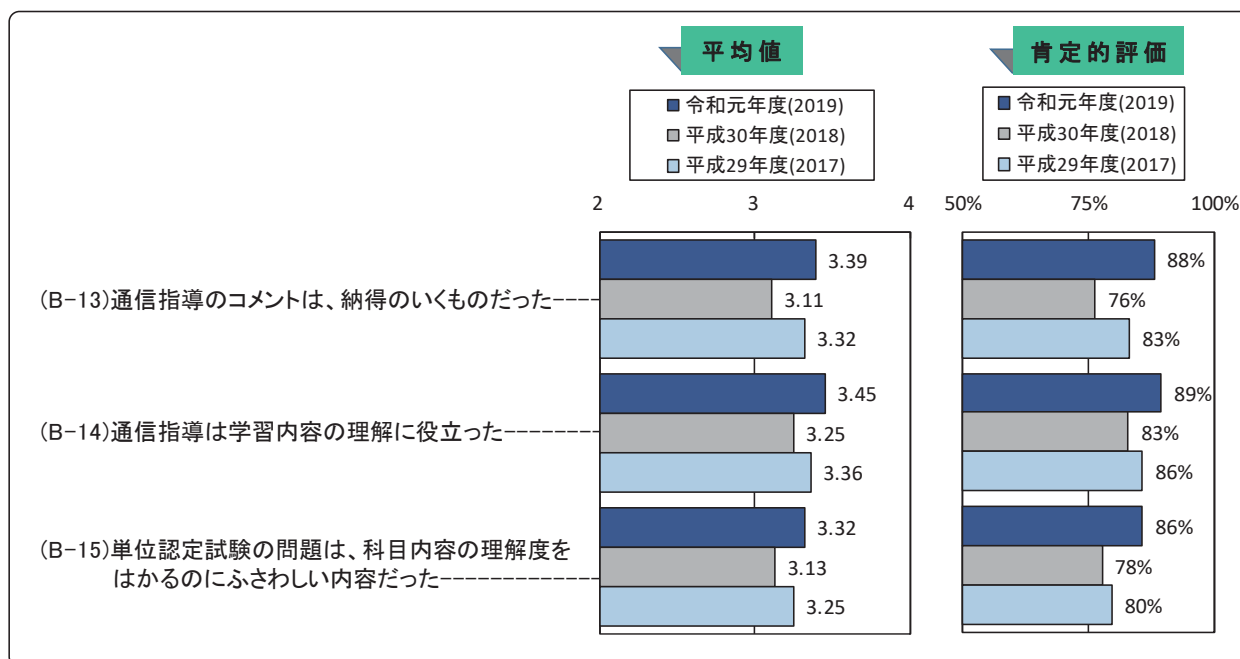
図2-78の通信指導については、(B-13)「通信指導のコメントは、納得のいくものだったでは」と(B-14)「通信指導は学習内容の理解に役立った」は80%の後半に達していたが、(B-15)「単位認定試験の問題は、科目内容の理解度ををはかるのにふさわしい内容だった」は86%にとどまっていた。

図2-78【大学院】回答者全体の通信指導・単位認定試験の評価



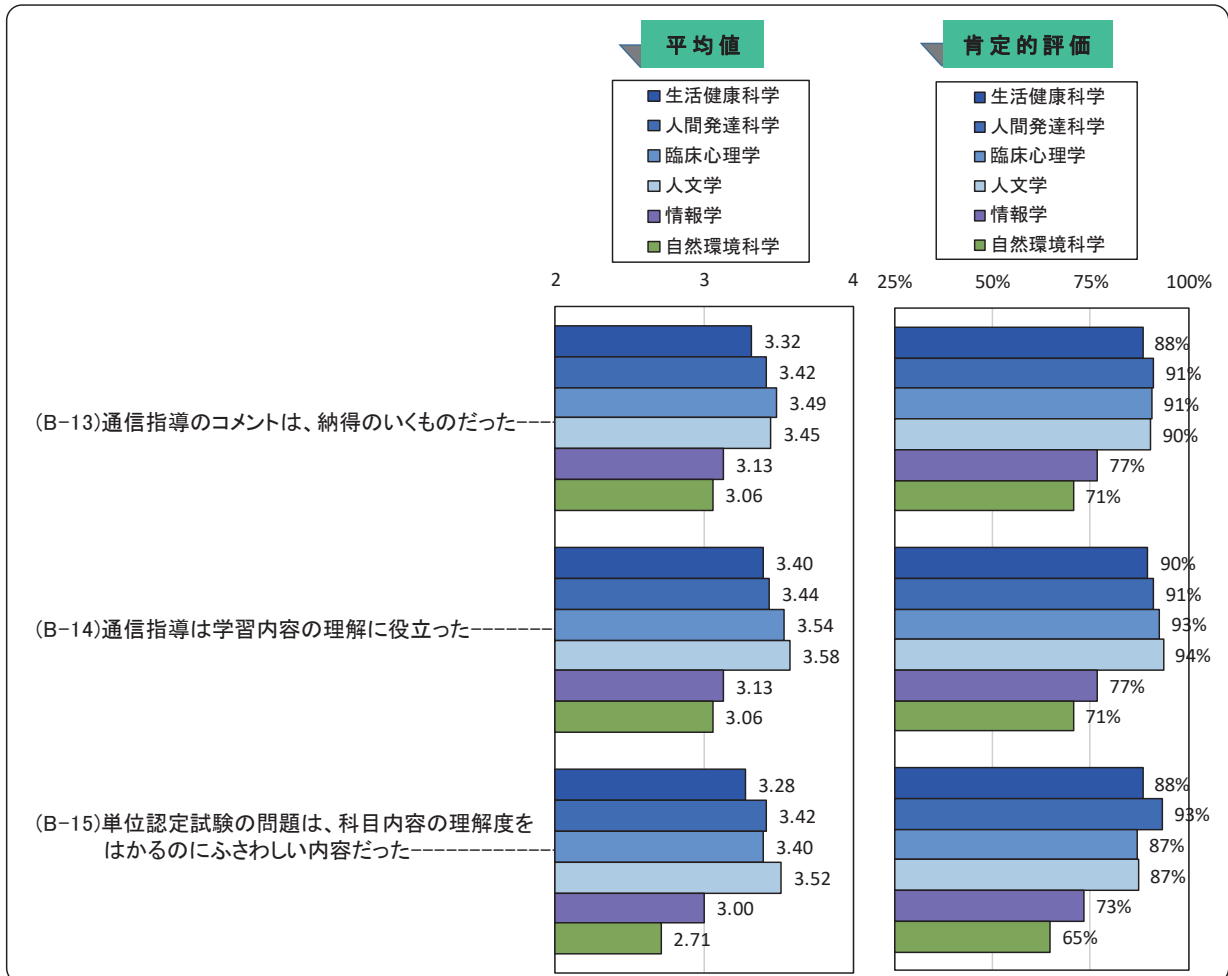
通信指導・単位認定試験の評価を時系列で見ると(図2-79)、過去2年度と比べ、どの項目でも本年度が高く、昨年度との対比で(B-13)「通信指導のコメントは、納得のいくものだった」の上昇幅が、12ポイントと群を抜いていた。

図2-79【大学院】回答者全体の通信指導・単位認定試験の評価(時系列)



所属プログラム別では（図2-80）、下記3項目で共通しているのは、「生活健康科学」～「人文学」までは、80%の後半から90%前半に達し、高評価であったのに対し、「情報学」と「自然環境科学」は高くても77%にすぎず、「生活健康科学」～「人文学」との差が大きかった。

図2-80 【大学院】所属プログラム別の通信指導・単位認定試験の評価



## Ⅱ－２－４．大学院の重回帰分析

大学院でも学部同様、重回帰分析で全体の満足度 B-(20) を目的変数とし、それ以外の項目を説明変数として分析を試みる。

最終的には「全体の満足度」に寄与する項目を明らかにすると共に、その影響力の強さを知ることが目的としている。

項目名	変数	対象
目的変数	y	全体の満足度 B-(20)
説明変数	$x_1, x_2, \dots$	各項目 B(1)～(19) : 全 19 問(項目)
係数	$a_1, a_2, \dots$	重回帰分析によって得られる偏回帰係数

重回帰式  $y = a_0 + a_1x_1 + a_2x_2 + \dots + a_{19}x_{19}$  (説明変数が 19 個の場合)

サンプルサイズが十分でない場合や説明変数が多すぎると、全体の満足度を表すのに適した重回帰式を得られないことが経験的に分かっているため、重回帰分析の中で、説明変数間で強い相関関係がある場合、その一方の項目を自動的に削除する「変数減少法」を用いて解析を行うことにする。

使用するデータは質問項目 I.B の全設問を全て回答した 350 人のローデータを使用する。(昨年度からオンライン利用によるアンケート形式に替わり、今回も全員が全設問を回答していた。)

### ■分析精度

自由度修正済み決定係数とは、得られた重回帰式が目的変数に対してどれだけ説明力(寄与度)があるかを示す指標で、「1」に近いほど良い結果で、この分析では 0.707 であった。

ダーヴィンワトソン比とは、残差同士の系列相関(自己相関)を示す指標で、0～4 までの値を示し、1 以下や 3 以上だと残差(誤差)に規則性があり、解析自体あるいはデータ自体に問題があり、「2」近辺の値ならよいとされ、その値は 2.110 となった。

#### ◆分析精度

決定係数	0.707
自由度修正済み決定係数	0.691
ダーヴィンワトソン比	2.110
残差の標準偏差	0.351

今回の重回帰分析では下表の分散分析表が示すとおり、有意水準 0.01 の判定で、かなりの精度で式の当てはまりの良さが確認できた。

(有意水準とは危険率と同義で 0.01 の場合、判定を誤る確率が 1%ある事を表している。)

◆分散分析表

変動	偏差平方和	自由度	不偏分散	分散比	p 値	判定
全体変動	139.4171	349				
回帰による変動	98.61342	18	5.478523	44.44181	0.000	[**]
回帰からの残差変動	40.80372	331	0.123274			

凡例	有意水準	凡例	有意水準
[**]	0.01	[*]	0.05

下表にある標準偏回帰係数とは説明変数の相互比較を可能にするためのもので、各説明変数の目的変数に対する影響力の度合いがこれで分かる。

標準偏回帰係数（全体の満足度に対する寄与度）が最も高かったのは B-17 の「学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった」で標準偏回帰係数が 0.226、次いで B-19 の「この科目の内容を全体としてよく理解できた（理解度）」（標準偏回帰係数 0.206）、他に B-18 「新しい知識が身につく視野が広がった」（同 0.187）、B-12 「印刷教材は教材としてよくできていると感じた」（0.182）で、全体の満足度に対するそれぞれの寄与度は上位 4 項目間で大きな違いは無かった。

「全体の満足度」（肯定的評価 95%）を上げるためには、上位 4 項目の「B-17」「B-19」「B-18」「B-12」の肯定的評価を上げる事が最も効果的であると考えられる。

この 4 項目の肯定的評価について見てみると、B-17:95%、B-19:91%、B-18:97%、B-12:91%で、B-17 と B-18 は、100%に近いので、この肯定的評価を更に上げるのは難しいと思われる。

従って、この 2 項目の肯定的評価の維持と、B-19 と B-12 の肯定的評価を上げる事に重点を置く事が有効だと考えられる。

目的変数	標準偏回帰係数	説明変数	判定	B-15との対比
B-20.全体の満足度	0.226	B-17 学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった	[**]	2.5
	0.206	B-19 この科目の内容を全体としてよく理解できた(理解度)	[**]	2.2
	0.187	B-18 新しい知識が身につく視野が広がった	[**]	2.0
	0.182	B-12 印刷教材は教材としてよくできていると感じた	[**]	2.0
	0.102	B-6 講師の熱意が十分に伝わった	[*]	1.1
	0.101	B-16 授業科目案内はこの科目の内容を知る上で役に立った	[*]	1.1
	0.092	B-15 単位認定試験の問題は、科目内容の理解度をはかるのにふさわしい内容だった	[*]	1.0
		定数項	[ ]	

※説明変数の中で有意水準が0.05以下の項目だけを掲載した